呪われた井戸

金貸しＯＬ殺人事件

黒川 文

目次

１．絵皿
. 3

（１）
（１） 7

（２）
（２） 17

（３）
（３） 29

（４）
（４） 33

２．マンションの怪奇現象
２．マンションの怪奇現象 39

（１）
（１） 43

（２）
（２） 53

（３）
（３） 59

３．管理組合
３．管理組合 67

（１）
（１） 71

（２）
（２） 77

（３）

（3） 85

４．調査
４．調査 91

（１）
（1） 95

（２）
（2） 101

（３）
（3） 107

（４）
（4） 113

５．編集部
５．編集部 119

（１）
（1） 123

（２）
（2） 129

（３）
（3） 135

６．咲子
６．咲子 143

（１）
（1） 147

（２）
（2） 153

（３）
（3） 161

（４）
（4） 167

７．金貸しＯＬ
７．金貸しＯＬ 173

（1）
（1） 177

（2）
（2） 183

（3）
（3） 189

（4）
（4） 195

8．男の犯行
8．男の犯行 199

（1）
（1） 203

（2）
（2） 209

（3）
（3） 217

9．絵皿の由来
9．絵皿の由来 221

（1）
（1） 225

１．絵皿

（1）

（1）

そこに刻まれた文章を目で追っていくだけのつもりが、「わたしは人を殺してしまいました」という内容に引き込まれて最後まで読み切り、咲子は徹夜してしまった。レポート用紙十枚ほどに細かい字でびっしりと書き込まれていた。所々、赤鉛筆で修正が入ったりしている。とんでもない告白文だった。

いや、犯した罪の告白なのか創作話なのか、これだけではわからない。それに、このレポート用紙を手にしたのも偶然だった。フリマアプリで大学で使う専門書を安く買えたのだ。売主はフリマアプリだとよくわからなかったが、古書店だと思われた。このレポート用紙をホチキスで綴じたものが折りたたまれて、本の中程に紛れていたのだ。分厚い本だったから売主も発送時に気がつかなかったのだろう。

そして、その犯行シーンの描写に、激しい既視感を覚えた。

――前の日に夢で見たものとそっくりだった。
夢の中では、目が血走った中年男性が地面に倒れた女性に馬乗りになり、首にロープをかけて全力で締め上げていた。激しく抵抗され、腕にはひっかき傷が出来、血が垂れていたが、そんなことはお構いなしに、女性の命を奪ったのだ。男性は女性が反応しなくなると、立ち上がり、ギョロリと咲子の方に顔を向けた。

ぞっとして逃げようとした所で夢から覚めた。
その男性にも女性にも見覚えがなく、そんなシーンにも覚えがなかった。
なぜ、そんな夢を見たのか、昨日は不思議に思っていた。そして、フリマアプリで買った本の中に紛れ込んでいた「殺人の告白」。偶然だったのだろうか？　書いてある内容は夢で見た光景と合致していた。

時計を見るとまだ四時だった。普段ならこれから寝てしまうところだが、文章のあまりのリアルさにすっかり目が覚めてしまった。咲子はベッドから出て浴室に向かった。シャワーを浴びようと思ってドアを開けたところで、兄と廊下で出くわした。

「何だ、こんなに早く。それに幽霊でも見たのか？　顔色が悪いぞ」
「え？　幽霊？　やだ」
　咲子は慌てた。
　そんな咲子を尻目に彼はトイレに行き、そして、自分の寝室に戻っていった。でも、二度寝ではない。多分、一番電車で出勤するつもりなのだろう。今の職場、心霊写真とオカルトの専門雑誌「芸術写真」の取材記者に転属してから、よく、不規則な勤務時間になることが多かった。
　咲子は自分がドアを勢いよく開けて音を立てたことで、疲れている兄を起こしてしまったのではないかと少し心配になった。
「お兄ちゃん？」
　咲子は兄の部屋の扉を少しだけ開け、声を掛けた。
「俺はこれから出勤だ。お前まだ早いだろう。それに土曜日だぞ。大学も休みだろう？」
「え、あ、うん。朋香と約束があって.....って言っても、お昼からなんだけど」
　朋香とは咲子が東都女子大の附属中学に入ったときからの友人のことである。何度もうちに遊びに来たことがあるので、兄とも面識があった。
　咲子は濡れたタオルで拭くだけにし、兄の出勤の準備を手伝うことにした。
　カッターシャツを着てスラックスを履いただけの格好で兄は台所に降りて来た。
　咲子はお湯を沸かし、トーストを焼こうとした。
「お兄ちゃん。何枚？」
「ああ、いや、いい。コーヒーだけ頼む」
「駄目だよお。朝はちゃんと食べなきゃ」
　朝御飯を抜くと、血液中の糖分が減り、脳の働きが抑えられてしまう。身体が勝手に省エネモードになるのだ。
「ミルクだけたっぷり入れてくれ。それでいい」
「そう.....」
　咲子は出しかけた食パンの包みを、また棚の中にしまった。
　お湯はすぐに沸く。その前に兄のマグカップを流し台の容器から取り出し、インスタントコーヒーを入れた。

「今月からさ、半日異動を言いつかってしまった」
「半日異動？」
　四月の初めである。会社にいたのでは異動は毎年のことであった。咲子は兄がオカルト誌なんかにいるのは自分のせいだと思っていたから、少しでもいい部署に異動出来るならそれに越したことはないと感じていた。
　元はと言えば、咲子の女子大附属中学進学に話は遡る。八年前のこと。

　受験に合格し、その後、中原家ではめでたいことが重なった。商社員だった父は次長から部長に昇格し、母も勤めていた病院で看護師長として勤続表彰を受け、兄は兄で大手経済出版社であるライオン社に入社していたが、トップの売り上げを誇る「経済ジャー

ナル」へ配属が正式に決まったところであった。
　咲子の提案で両親に兄と二人から、と言っても実質は兄からだったが、ホテルでのディナー券を贈ったのだ。――楽しんで来てね。と送り出したのが父と母の姿を見た最後の姿だった。
　ディナーの帰り道、母から「今日は楽しかったわ。ありがとう。これから帰るね」というメールが送られてきて、その後、交通事故に遭ったのだ。乗っていたタクシーにダンプカーが追突し、運転手を含む全員が生命を失った。
　咲子が十二歳のときだった。
　入ったばかりの中学校。友達は近藤朋香しかいなかった。

　でも、彼女は献身的に咲子の面倒を見てくれた。泣いてばかりでうちに閉じこもっていた咲子に、毎日ノートを届けてくれたり、休みの日には家に来て一緒に話し相手になってくれたりしたのだ。そんな彼女のお陰で、一月半の閉じこもりを経て、咲子は再び学校に通うことが出来る様になった。
　朋香と出会ったのは、六年生のときに受けた入学説明会が初めてだった。たまたま両方の母娘が隣同士の席になり、話しやすい子だなあとお互いに思ったのがなれそめだ。それ以来、六年生の秋から入学式までよく遊びに行ったりし、また、入学してからもずっと一緒だった。そして、中学、高校とずっと仲良しでいて、大学も同じ学科を選んでしまった。
　その間、兄は、独りぼっちになった咲子の身を気遣い、会社を定時で終え、早く帰宅したり、三日以上の長期の出張を拒んだりし、そのうち、上司から愛想を尽かされてしまった様で、三年目の春にオカルト誌に転属になってしまったのだ。
　咲子の感じている責任感は半端なものではなかった。

「栄転なの？」
　咲子は食卓につき、椅子に腰掛けてあんま棒で凝った肩を叩いている兄に尋ねた。
「どうなんだろうなあ。……行先は経済ジャーナルなんだ。元の職場だ。でも、半日だけの派遣扱いだから、さらなる左遷かもな」
「そう」
　咲子は悲しげに視線を落とした。しゅーっと言う音を立て、ヤカンが沸騰を告げた。咲子はマグカップにお湯を注ぎ、砂糖とミルクを入れた。
「はい」
「ああ、すまない」
　兄はふうっと息を掛け一口コーヒーを飲んだ。
　ときおり、手元に置いた携帯電話の画面に目をやった。仕事の連絡が入るのだろうかと咲子は邪魔にならないように、台所を出た。玄関からドアを開け、すでに上りつつある日光を浴びて大きく背伸びをした。
　新聞受けを見るとすでに配達されていた。咲子はそれを手に取るとまた家の中に入った。この家では兄がライオン社に入ったときから経済新聞を購読していた。あのときは日々の経済ニュースに朝一番に目を通しておかなくてはならないし、父もいたので、自

然とそんな習慣になっていた。
　オカルト誌に左遷されたからと言って、一般紙に切り替えるなど、咲子からは言い出せなかった。

　咲子が台所に戻ると、兄はすでに自分の部屋に戻ってしまっていた。コーヒー一杯の朝食なのだ、五分とかからない。そして、ネクタイを締め背広を羽織り、革鞄一つ持って駅まで歩くのだ。
　咲子は、玄関で兄を見送った。
「行ってらっしゃい」
「ああ」
「帰りは遅くなるの？」
「午後から経済ジャーナル勤務になるから、予定は未定だ。よくわからん」
「そう……頑張ってね」
「ああ」
　兄は玄関で革靴を履くとそのまま咲子の方を一度も振り返らずにドアノブに手を掛け、出かけて行った。

　午前十時過ぎ。
　家の中の掃除をしていると携帯電話が鳴った。咲子は朋香かなと思い、そのまま通話ボタンをタップして耳に当てた。
「朋香でーす」
　軽やかな声が伝わってきた。
「おはよう。買い物のこと？」
「寝てた？」
「そんな訳ないじゃん。起きてたよ。ふあぁ」
　咲子はどこからか見られていたのかと一瞬勘繰った。
「梅ヶ丘にさ。アンティークショップがあるの。そこで何か探そうかなと思うのよ」
「ふうん。アンティークねえ……」
　咲子には軽い霊感の様なものがあり、古いものを扱っているアンティークショップは店に入るのも苦手だった。もちろん、いくら親友とは言え、彼女にこの霊感のことは話したことがなかった。大切な親友だ。おかしな子と思われるのさえはばかられた。
　梅ヶ丘は朋香が以前住んでいた街だった。大学一年のときに、父親が下北沢に一戸建てを買って引っ越している。彼女は大手メーカーの営業職員だった父親の影響で小学校時代をアメリカで過ごしていた。いわゆる帰国子女というやつである。六年生のときに世田谷区立梅ヶ丘小学校に在籍し、英語教育に力を入れていた東都女子大附属中学を受験し、咲子と知り合ったのだ。因みに当時、咲子は埼玉の所沢の小学校だった。附属中へは電車通学していたが、商社員だった父親が高円寺に家を買い、通学は便利になった。

今日の買い物は、朋香の小学校時代の友人である本橋裕美果の引越祝いを買いに行こうと朋香から声を掛けられたのだった。年齢は本橋が一つ上で、朋香は裕美果ちゃんと呼んでいるが、咲子は本橋さんと呼んでいる。

東都工科大の工学部三年生だった。

朋香はあまり遠慮のない性格で、本橋の家族とも親しくつきあっていたが、咲子は少し距離を置いていた。他人に馴れ馴れしくするのは性分ではなかった。でも、去年の夏休みに本橋の父親が持っている鎌倉のコテージに朋香と一緒に遊びに行き、家族旅行に混ぜてもらったことがあった。でも、咲子はあまり楽しめず、キャッキャ言いながら騒いでいる朋香のペースに巻き込まれただけだった気がしていた。

朋香の提案では梅ヶ丘の駅の近くの住宅地の中にあるアンティークショップに置物か何か探しに行こうと言うことであった。本橋の母親にそうした趣味があり、年代物の皿などを集めているらしかった。

――好みってないのかな？　と、咲子は一抹の不安を覚えた。しかし、朋香には、あはは、大丈夫だよ。そんなことで怒ったりしないから、と、軽くいなされてしまった。

小田急線梅ヶ丘駅の改札前で朋香と待ち合わせした。

元々朋香がこの街に住んでいたから、咲子も中高とよく遊びに来ていて、ある程度の土地勘みたいなのはあった。

「咲子！」

朋香は改札の向こう側からこちらの姿を認め、手を振りながら名前を呼んだ。少し恥ずかしい。土曜日とはいえ、人通りは少なくはない。何人かの通行者がこちらを振り向いた。咲子は小さく手を上げ、朋香に合図した。

「おはよー」

「おはよ。待った？」

朋香はいつも通りの笑顔で尋ねた。

「わたしも今着いたところ。待ってないよ」

「そう。ならいいんだ。実は今日初めて行く所なの。と言っても住所からは、全然知らない場所じゃないから安心して」

「うん」

咲子は朋香の保証を信じてついて歩いて行った。

自分だけでは多分迷ってしまうだろう。「地図の読めない女」だとは思わなかったが、この町では駅から朋香の家までの道しか知らなかった。そして、である。行ったことがない道に関してはからきし駄目だった。知っている道から一本隣の道路に入り込むだけで、たちまち方向感覚が怪しくなってしまう。

「朋香ぁ、そんなにすたすた歩かないでよぉ」

咲子は大股で歩く彼女の後ろを追っていくのに精一杯だった。

「ごめん、ごめん。でも、そんなに早足だっけ？」

彼女は立ち止まり、振り向いた。

「あ！　ここ？」
　咲子はマンションの一階を指さして尋ねた。目的のアンティークショップだと気付いたのではなかった。ただ、何となく嫌な波動を感じただけだった。古いものに込められた想念や、あるいはものによっては怨念など。店そのものから感じ取れた。朋香はスマートホンの地図を確認した。
「あら？　そうみたい。よくわかったのね」
「何となく」
「入ろ」
　アンティークショップはマンションの一階に位置していた。木の板に「あんていく堂」と店名が彫刻された看板が掲げられ、入り口はガラス戸になっていた。扉の横もガラス張りで古びた美術品などが展示されていた。
　ぎぎっと軸受けがきしむ音がしてドアが開いた。
　――何の店だろう？　咲子はふと疑問に思った。一口にアンティークと言っても、西洋、日本、その他それぞれ得意分野みたいなのがあるはずだ。左側の棚には十八世紀頃のビスクドールが並べられ、奥の棚にはガラスケースに火縄銃や日本刀。右手の棚には瀬戸物が並んでいた。そして、真ん中の島には、置き時計と懐中時計が置かれている。
　店には先客がいて、大きな風呂敷包みをカウンターの上に置き、店主と話している様子だった。
「咲子。こっちだよ」
　朋香は手招きして右手の棚に近づいて行った。見た目にも古そうな焼き物が棚の上から下まで埋め尽くされていた。
　何となく淡い青色をした器が気になりそっと指先を触れた。
　青磁と呼ばれる焼き物の一つだ。けれど、やはり、ここに来るまで何人もの手を渡り歩いてきたのだろう。咲子の脳裏に色んな人の想念が渦巻き、立ちくらみがするほどだった。

「いい品なんですけどね……はあ」
　背後で店主と客との会話が聞こえた。店主は六十歳くらいの頭髪がかなり後退した男だった。ポロシャツにスラックスというラフな格好だった。もう、趣味でこの店をしているというそんな感じだった。
「うちに古くから伝わる絵皿なんだ。そこいらの安物と一緒にしてもらっては困る」
　客はそう反駁した。どうやら、この客が箱に収められた絵皿数枚を買い取ってもらいに来た様子だった。咲子はその男の横顔を見てハッと息を飲んだ。夢で見た男そっくり、いや、正確に言うと、同じ波動を放っていた。咲子は目が合わない様に下を向いた。
「お客さん。組皿というのは、全部揃って価値があるものなんですよ。一枚欠けていたのでは値打ちは半減しますよ」
「欠けている？　そんなはずはない。だとしたら何か書き付けがあったはずだ」
「でも、干支の絵柄でしょう？　十二枚ないと揃いませんや」

「むむむ」
　客の男は答えに窮した。結局、店主のいう値段で折り合いがつき、その場で買い取られた。一万数千円を財布に収めるのを咲子たちは目撃した。干支の絵皿で一枚欠けていたので、一枚千円として一万一千円だ。咲子は頭の中で素早く計算した。
　朋香の方を見ると、上の方の棚を見て腕を組んで考え込んでいた。
「朋香.....」
「あ、ごめん。ちょっと考え込んでたわ。あの古伊万里ってどうかしら。絵柄も素敵で」
「値札見た？」
「あ、ごめん。ちょっと予算オーバーね」
　――ちょっとじゃないだろう？
「そうね」
　朋香はぐるっと店内を一周し、店主の手元に広げられた組絵皿を見た。全部で十一枚あり、それぞれに干支をモチーフにした絵が描かれていて、彩色も鮮やかな逸品と思われた。横には漆塗りの箱が蓋を外されたまま置かれてあった。
「あの、すみません。これっておいくらくらいなのですか？」
　と、朋香が声を掛けた。
「お気に入りの様ですね。四万八千円でどうです？」
　――うそ！
「四万八千って、さっき、一万ちょっとで買い取ったばかりじゃないですか？」
　朋香は抗議した。彼女も横目でさっきのやり取りを観察していたみたいだった。でも、彼女にそう言われると店主はばつの悪そうな顔になり、合計二万まで値引きした。咲子の財布の中は一万円札が一枚と帰りの電車とお茶代だけだった。

　結局、朋香と二人で一万ずつ出し合い、二万円でその絵皿を買った。

　帰り道、近くにあった喫茶店に入った。
「ふう。いい買い物が出来たね」
　と、朋香は語った。
　いい買い物なのか、売りつけられたのか咲子には判断がつきかねた。でも、絵は見事なものだった。線の繊細さといい、色の鮮やかさといい、今の陶器より出来は遥かによかった。一体いつの時代の絵皿なのだろう。少しだけ疑問に思った。
「でも、少し変なのよね」
「何が？」
「きれいな箱に入っているじゃん？」
「漆塗りかしら」
「そうじゃなくて、蓋をスライドさせると、中が仕切られているの。十一区画よ。だから、欠品があったんじゃなくて、最初からこの絵皿は十一枚しかないと思うのよ」
　と、朋香は独自の見解を述べ始めた。
「ええーっ！」

　咲子は大きな声を出し、喫茶店のマスターがこちらを見た。咲子は肩をすくめた。「だって、干支の絵皿でしょう？　　十二枚ないと不自然だよ。おかしいよ」
「でも、この皿より箱の方が立派っていうの？　　漆塗りに金箔で家紋が入ってちゃんとしたやつだよ。きっと絵皿に合わせてしつらえられたに違いないわ」
　咲子が箱を眺めると、確かに上に金箔で家紋が入っていた。「三つ巴」だった。どこかの大名家の家宝だったのだろうか。横蓋が上にスライドして、横から皿を入れる様になっていた。きちんと区分けされ、それが最初からこの皿は十一枚一組であることを物語っている様に思われた。
「でしょ？」
　朋香は得意げに言った。
「何か挟まってる.....紙片？」
「包み紙か何かじゃないの」
「ううん。ちゃんとした紙だよ」
　咲子は指先で一番上に入っていた紙片をつまみ出した。テーブルの上に広げると、しっかりした和紙に毛筆で黒々と文字が書かれていた。
「どれどれ.....このたびの戦功大なり。よって左記のものつかわす候ものなり。って、この皿のことかな？　　でも、虫食いでそこだけ抜けてるわ。誰のサインだろう？」
　朋香は花押の部分を指さして言った。
「さあ？」
　咲子も古文書に関してはさっぱりだった。首をかしげた。

（２）

（２）

　咲子は朋香と一緒に地下鉄麹町駅を降り、階段を伝って地上に上がった。
　オフィスビルが建ち並ぶ中、その向こうに、背の高い建物が屹立していた。
　朋香がスマートホンの画面を見た。住所や何かをメモ書き代わりにしている。
「フォルテッシモ麹町.....五十階建ての四十七階ってあるから、あの建物がそうじゃないかしら？」
「そうなの？」
　地図と見比べもせずに、早計に断定を下してしまう友人がある意味うらやましかった。咲子は石橋を叩いて叩いて、壊れるまで叩いて、そして、渡ろうとしてすでに機は逸してしまったと嘆く方だ。それは言い過ぎとしても、数百メートルも歩かなければならないのだ。地図でビルを同定して欲しかった。
「ほら、英語じゃなさそうだけど、看板にフォルテッシモって書いてあるわ」
　と、見えにくいのか目を細めて言った。
　彼女はやや近視が入っている。普段はメガネもコンタクトもしていないが、大教室での講義の時はメタルフレームのメガネを使用していた。でも、いつもではない。だから、本当は目がいいのに、メガネっ娘に憧れて掛けているのか、逆に実際の視力はもっと悪いのに無理して見えている振りをしているのか、咲子にもよくわからないでいる。

　ととっと、朋香は先に立って歩き始めた。咲子は絵皿の入った紙バッグを先ほどの地下鉄の中からずうっと持っている。十一枚もあると結構重たかった。
「そんなに急がないでよう！」
「ごめんごめん。でも、もうすぐよ。ほらほら！」
　結局そのままマンションのエントランス前まで来てしまった。
　朋香がインターホンで相手を呼び出している。
　――はーい。と、スピーカー越しに声がした。咲子も知っている本橋のお母さんだった。彼女はどうぞ上がってらしてと言い、エントランスのオートロックを解除してくれた。
「エレベータに乗ってそのまま四十七階まで上がって。うちは、七号室よ」
「はい。わかりました」
　朋香が答えると、ドアがすうっと開いた。そのまま二人でエントランスをくぐり抜け、エレベータホールに行った。咲子が上矢印のボタンを押した。そのとき脳裏に古びた井戸の見える風景がぼんやりと浮かんだ。どこかで見たことがある。そんな気がした。どこだろう？　　ボンヤリしていたが、幸い、エレベータはしばらく来なさそうだった。

「高そうなマンションだね」
　と、朋香は素朴な感想を漏らした。咲子も同感だった。壁は大理石張りだし、エレベータも高そうだし、廊下の照明も上品だった。ただ、築年数だけが少し経っていた。建物入り口近くの礎石に刻まれた年号を見ると、平成元年、まさにバブル時代の竣工だった。
　しかし、管理費も高そうで、共用部分の清掃など、ガラス窓、廊下、壁などきれいに磨き込まれていた。管理会社も大手が入っているみたいだった。
　エレベータが着いた。
　チーンと言う上品な作動音がして、ドアがすっと開いた。二人して乗り込む。
　開閉ボタンを押すと、ドアはまたすっと閉まり、ケージは軽やかな加速度を発生させ、静かに上昇を始めた。ものすごい速度で階が上がって行く。でも、嫌なきしみ音一つ立てることなく、あっという間に四十七階に着き、ドアが開いた。
「何かエレベータまで高級だね」
　朋香は素朴な感想を漏らした。
「うん」
　咲子は紙袋を落とすことなく、両手でしっかり持っていた。いい加減、重くて指の根元に紐が食い込み、しびれてきた。
「七号室、七号室.....」
　朋香はつぶやきながら、エレベータから廊下を進んだ。探すまでもなく、端から七番目に「本橋」とネームプレートに書かれた部屋があった。インターホンを押すと、返事はなく、すぐにドアが開いた。
　本橋裕美果とお母さんが出迎えてくれた。

「どうも、ご無沙汰しております」
　と、咲子がお辞儀すると、お母さんも同じように挨拶してくれた。裕美果は朋香とは、久しぶりではないみたいで楽しそうにお喋りを始めた。
「ここはすぐにわかったの？」
　お母さんが尋ねた。
「いや、わたしが方向音痴なもので.....朋香ちゃんに助けてもらいました」
「わざわざ訪ねてくれてありがとう。梅ヶ丘に住んでいたらよかったのだけど.....」
「はい？」
　お母さんが語尾を濁したのを咲子は感づいた。
　朋香が本橋から訊いた所によると、お父さんが不動産を買う趣味があるらしく、鎌倉のコテージを始め色んな所を購入しているそうだった。でも、本業はサラリーマンだ。潤沢な購入資金が唸っている訳でもなく、従って、訳あり物件や築三十年以上の古い物件を探して格安（と本人は信じている）で購入しているらしかった。もちろん、全部に住めるはずもなく、賃貸マンションや賃貸住宅などにして所得を得ているそうだ。あの鎌倉のコテージも管理会社に任せ、普段はレンタルルームにしているらしい。
　お母さんが語尾を濁したのも、せっかく長く住み慣れた梅ヶ丘の一戸建てを売り、初めての街である麹町でしかも高層マンションであることに対する不満があるものと思われた。

一戸建てと違い、マンションには管理組合なるものが存在する。普通の町の自治会に相当するものだ。一点異なるのは、マンションには定期的に大規模修繕という一大行事があり、要するに、外装や配管、年数によってはエレベータなどの装備品を一新する。一戸建てなら、うちは古くてもいいや、という考え方も認められるのだが、マンションでは認められないということだ。もちろん、個人所有となる部屋の中は別だ。これは壁紙が剥がれようが電灯が切れようが好きにしたらよい。でも、共有区画と呼ばれるエントランスや中庭から各戸の入り口までは、マンション全体で決められる。

その点、自由は利かない。

自治会なら適当に顔を出して、町内の清掃やゴミステーションの管理、自治会報の刊行など、数年に一度回ってくる幹事や理事の仕事だけ付き合いだと思って参加すればそれでよかった。

しかし、マンションは違う。各階から毎年一名選出される代議員からなる管理組合。マンションに住まうものとしての、しばりは窮屈なものがあった。

咲子の見る限り、本橋のお母さんは、麹町に慣れないと言うだけでなく、マンション住まい自体が肌に合わないと言うのだろうか。もう、自分自身は隠居して娘の裕美果に全部任せてしまいたい。そんなことを考えていそうに思えた。

腕がしびれてきた。

「そうそう、中原さんだったわね。大きな荷物。下に置いたら？」

お母さんが咲子の指先が青白くなっているのを見てそう言ってくれた。

「あ、いえ」

贈り物を地面に置いてはいけないのだ。朋香の方を見て片目をつぶった。多分気付いてくれるだろう。

「このたびは新居購入おめでとうございます」

朋香はお母さんにそう言った。「アンティークの陶器がご趣味と聞いていたので探して来たんです。お祝いにと思って」

「あらあら！　そんなこといいのに。それも陶器だなんて。重かったでしょう？」

お母さんは陶器と聞き、まんざらでもなさそうな反応を見せた。

そして、二人はリビングに通された。

ソファとテーブルだけが部屋の中央に配置されている他は、窓際にまだ開梱していない段ボール箱が山と積まれていた。咲子はテーブルの上にそっと荷物を載せた。

ここまで、朋香と二人で公平に持って来たはずだった。それなのに、やけに指が痛かった。前半朋香が持ったのだが、あのときは、電車の中で彼女は荷物を膝の上に載せていたのだった。――こいつ！　咲子は駅の階段からこのマンションまでの道のりの遠さを今になって実感した。

　お母さんは包みを開け、漆塗りの木箱をテーブルの上に置いた。そして、蓋をスライドさせて外し、中の絵皿を一つ一つ丁寧に箱の横に並べていった。ショップで見たとおりの鮮やかとしか言い様のない出来の逸品だった。
「あら、干支の絵皿なの？」
　お母さんは一瞬喜び、そして、疑問の表情になった。十一枚しかないせいであろう。
「子、丑、……卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」
　何度数えても十一枚だった。
「お母様。この絵皿は十一組みたいなんです」
　朋香が横から説明した。寅の絵皿が欠けていた。
「ふうん。まあ、骨董品にはよくあることよね。でも、何か変……この木箱の仕切りは十一枚分しかないわよ。元々十一枚の組皿だったのかしら？」
　よく言えば、何か謂れのある骨董品だったのだろうが、悪く言えば曰く因縁付きの品物だった。
　朋香はそこら辺は笑顔でごまかした。
「えへへ」
　そして、虫食いのある書き付け。この絵皿の曰くもよくわからなくなっていた。
「どうもありがとう。うれしいわ。少しばかりミステリアスなのはアンティークにはよくあることよ。いいえ、少しくらいの謎がなければアンティークに手を出す値打ちがないわ。大事にするわ。ありがとう」
　そう言われ、咲子も、ここまで重たい思いをして持って来た甲斐があったと思った。

「ちょっとお母さん。テーブルの上をどけてよ」
　と、裕美果が紅茶のポットとカップをお盆に載せて運んで来た。ダージリンのいい香りがリビングに漂った。「あと、クッキーも焼いてあるから」
「どうもありがとうございます！」
　朋香が嬉しそうにお礼を述べた。お母さんは急いで絵皿をまた木箱の中に収め始めた。そして、いそいそと別室に運んでいった。
「あんたたち、どうしてあんなもの持って来たのよ？」
　裕美果はあきれ顔で二人に尋ねた。
「前に裕美果ちゃんに何がいいって聞いたときに、お母さんが、アンティークの食器を集めているって言ったじゃない」
　朋香はため口で答えた。
　咲子は前に置かれた紅茶のカップをしげしげと見つめた。これも何だか高級そうだ。
「それ、十八世紀のマイセンよ。割らないでね」
「あ、どうも」
　咲子は器に息が掛からないように、ふうっと吹いた。そして、一口飲んだ。この家の食器は皆、アンティークばかりのようだった。

　お母さんが絵皿を大事そうに木箱にしまい、納戸へ持って行っている間、裕美果がソファの向かいに座った。
「もう三年生になるんだね。工学部なんて難しそう」
　朋香が茶化すように言った。
「四年生で卒業研究を取らなければならないのだけれど、履修条件に選択科目九十単位と必修科目全部と言うのがあってね。……要するに三年生を終える時点で卒業研究以外の単位を残すなってことなの。どうしようかな」
「どうしようかなって、まだ残っているのですか？」
　他人事ながら咲子も心配になった。
「必修を五科目落としているの。あ、お母さんには内緒だよ」
「は、はあ」
「なんか、周りのレベルが高すぎてついて行けてないっていうの？　いやんなっちゃう」
「例えば？」
　と、朋香が聞く気もないくせに質問を投げた。
「こんなこと、話してもしょうがないんだけど……機械工学の三大力学と呼ばれる、材料力学、流体力学、熱力学があるでしょう？　それに、機械振動学と機械設計、機械工作法この六つで機械工学は成り立っている。だから、どの科目もⅠとⅡがあって、必修単位になっているの。一個でも落とせば、卒業研究は認めない」
「要するに永遠の三年生っていうことね」
「うん」
　と、朋香の相づちに裕美果はうなずいた。
「今年中に取れる見込みはあるのですか？」
　咲子は恐る恐る尋ねた。別にここで口を挟んだとて、咲子にいいことは一つもなかったにも拘わらず、質問をせずにはおれなかったのだ。
「今まで頑張って取れなかったものが、三年生になった途端に急に取れる。って、そんなことあると思う？」
「またぁ、裕美果ちゃんたらぁ。脅かさないでよ」
　朋香がふざけて茶々を入れた。
　それは高校の三年だったら、偏差値を一つ上げるにも大変な努力が必要だった。だが、これは、全国の受験生皆が一斉に必死になって頑張るからこそ、大変なのである。これに反し、大学の単位だったら、皆で仲良く合格しようよと言う態度でもあり、共同戦線を張りわからない所やテストの予想問題などを皆で仲良く分担し、一人でも大勢の学生が合格しようという態度がありありだったのだ。これは、一部の学生を落とす試験ではなく、一定のレベルを維持しようという試験だったからこそ成り立った共同戦線だった。

「違うんですか？」
　咲子は尋ねた。裕美果はふうっとため息を漏らした。
「その共同戦線って言う表現は当たっているわ。同期生同士、みんなよく助け合ったものよ。英語が得意な学生は原文と英訳の対照表を作ってみんなにコピーして配ったり、物

理が得意な学生は問題集を解いて、解説文をこれまたみんなにコピーしたりしたわ。そうして、出来る限りみんなで進級して、一緒に卒業しようぜって雰囲気だったの」
「いい学校なんですね」
　咲子の問いかけに、裕美果は頭を横に振った。長い髪が宙を舞うのが見えた。少し茶色が入っていた。
「成績のいい子は、すでに全単位を揃えているわ。だから、三年次はあまり出席の必要性なし。それで、必修科目の残った子は足の引っ張り合い状態。って言っても別に実際に足を引っ張る訳じゃないんだけどね。あたしのひがみかな。……要するにもう助けてくれる勉強の幹事さんはいない状態なの。もっとも、プライドなんか全部捨てて、下級生のそうしたコミュニティに顔を出す、厚顔無恥な輩も少しはいるわ。でも、あたしは駄目。そんなこと死んでも出来ないわ」
「理科系って大変なんですね」
　咲子が言うと、横から朋香がうふふと可愛い笑いを入れた。
「あたしたちだって、ゼミに入るじゃない。人気の高いゼミは成績順って聞いているよ。咲子は大丈夫よね」
「え！　そうなんだ」
　咲子は初めて聞いた。もっとも、成績はいい方と周りからは思われている。実際には中くらいだろう。単位は百パーセント取り揃えているが、優の数はほどほどである。
　でも、裕美果もプライドを捨てて、二年生のコミュニティ（要は仲良しグループだ）に入れば、試験前の情報や、普段の課題の答案を写させてもらえる。それに、そんなにプライドが高い子とは思っていなかった。現に年下である朋香には名前を呼び捨てにされている。
「この子は特別。同じ小学校の登下校グループだったんだけど、この子だけ帰国子女だったの。お父さんがアメリカ勤務だったんだっけ？」
「うん、シアトル」
「何か最初は生意気な気がしていたんだけど、裕美果って呼ぶし、他の子も違和感なさそうだし、本人も悪意がなさそうで、無邪気な顔見てたら、まあいいかって思ったの。でも、朋香だけ。他の子だったら、年下なのに呼び捨てなんて絶対に許せないわ」
「では二年生のコミュニティに入れてもらうなんてのは論外と？」
「もう、自分の力でやるわよ。入試の時だって一人っきりで戦ったんだから！」
　裕美果は機嫌悪くそう言い切った。

　帰り際、四十七階のエレベータホールでカゴが下りてくるのを待っていたら、朋香が意外な事実を口にした。
「彼女の負けん気の強さって、多分、弟の存在が大きいと思うの」
「え、姉弟がいたの？」
「三つ年下なんだけどね、お父さんが大手メーカーの技術者のせいなのかな。やっぱり理科系でねえ。世田谷科学高校の理数進学コースの三年生なの。成績は上位十名に入っていて、来年は東都大か東都工科大のどちらかに進学する予定みたい。だから、裕美果って気さくに見えても、結構コンプレックスを抱えているみたい。自分より優秀な弟を持

つ姉の気分っていうの？」
　――咲子の目から見た本橋裕美果は決して気さくではない。上下関係に厳しい、どちらかというと体育会系の人だ。だからこそ、咲子は彼女のことを本橋さんと呼び、けっして裕美果ちゃんとは呼ばないのだ。
　でも、三歳年下の弟。それも成績優秀で自分より上の大学に進まれたり、あるいは上の学科に進学でもされたら、メンツが丸つぶれもいい所だと咲子は思った。

「エレベータ来ないね」
　朋香がそう言い、悪戯っぽく微笑んだ。「非常階段で降りよっか？」
「えー！　朋香本気？　ここ四十七階だよ。何段あると思っているの？」
「降りるだけじゃない。そうそう、あたし、夏休みに東京タワーに歩いて登る競技会に当選したんだ。トレーニングも兼ねて歩きましょ」
　そこまで言われ、咲子も嫌とは言えなかった。

　エレベータホールから少し離れた場所に非常階段の緑のマークが光っていて、その下に頑丈な鉄扉が立ちはだかっていた。
「よいしょっと！」
　朋香は細い腕に力を込めて、鉄扉を開いた。ぎぎいっという音がした。「行こ。咲子」
「あ、う、うん」
　非常階段は蜘蛛の巣こそ張っていなかったが、蛍光灯も何となく薄暗く、陰気に感じられた。二人でなければ絶対に入らない場所と言えた。でも、実際には火災や地震の際にはここを通って外部へ脱出しなければならないし、そのために作られた設備でもあった。
　朋香は帰り、身軽になっていたので、とんとんとんと階段を駆け下りて行った。
「待ってよう」
　咲子は急な勾配になっている階段を恐る恐る一歩ずつ確かめながら降りていった。こんな調子では簡単に置いて行かれてしまう。しかし、先ほどから咲子が手すりの金属部分に触れる度、何だか嫌な感触が伝わってきた。
　咲子の持つ霊感のなせる技であった。モノに触れるとそこに込められた想念を頭の中でビジョンとして描くことが出来たのだ。もっとも、はっきりした画像ではない。ほとんどの場合、何となく不吉とか、その程度の霊感であった。――気のせい。そう言われると身も蓋もない能力だった。

「朋香ぁ。そっちは駄目！」
　咲子の感覚が鋭敏になった。何か不吉なモノがあるはずだった。関わってはいけないもの。それがそこにはあった。
　四十三階。非常階段の踊り場。そこに、少女らしき身体が服をはだけて横たわっていた。身体は「く」の字型に折り曲がり、長い髪の間からは血が流れ出ていた。朋香はそれを見て立ち尽くしている。少し遅れて現場を見た咲子は流れ出た血の多さに思わずハ

ンカチを口に当てた。――もう死んでいる。
「見ちゃ駄目！」
　咲子は叫んだ。が、すでに遅かった。
「この子.....死んでないよね？　　まだ助かるよね？」
　朋香は現実から目を逸らそうと懸命になっていた。しかし、事実は厳然として二人の目の前に屹立していた。巖のような存在。もはや逃れようがなかった。咲子は携帯電話をバッグの中から取り出し、どこにダイヤルしたらいいのだろうかと少し迷った。朋香が咲子の携帯を引ったくり、即座に一一〇番通報した。
　――事故ですか事件ですか？
　スピーカーを通じて落ち着いた男性の声が伝わって来た。――これって事故なのだろうか、それとも事件のなれの果てなのだろうか。横で聞いていた咲子はぼんやりとそんなことを考えた。
「女の子の死体がマンションの階段の踊り場に横たわっているんです。すぐに救急車を！」
「だったら、救急要請ですね？」
　やりとりを聞いているだけでももどかしかった。
「事故です」咲子は朋香の持つ携帯に向かって叫んだ。「女の子が非常階段から落ちて死んでいるんです」
「わかりました。詳しい場所を教えて下さい。現場に警察官が駆けつけるまでそのまま待機していて下さい」
　相手はあくまでも落ち着いていた。本当はこうしている間にも地域課の巡査に緊急出動の指令が下り、即座にパトカーが出動し、行先は追って無線で指示されるらしかった。
「麹町にある高層マンション、フォルテッシモ麹町の非常階段四十三階です」
「わかりました」

　最初に到着したのは救急隊員だった。しかし、女の子の脈を取ると、首を横に振った。
「死後数時間経過している。警察の仕事だね」
　と、冷たく言い放った。

　間もなく非常階段の上と下から制服を着た巡査が数名と背広姿の刑事が現れた。
「通報したのは？」
「あの、わたしです」
　咲子はおずおずとした態度で右手を挙げた。朋香は普段の快活さなどどこかに飛んで行ってしまったかの様にじっとうつむき、地面に視線を固定したまま動かなくなっている。小学生くらいだと思うが、女の子の死体を直接見てしまったのが、よほどのショックだったのだと思われた。
　刑事は女児の不自然に折れ曲がった頚部に指先を当て、脈がないのを確認し、咲子に振り向いた。
「どうして一一〇番通報したんだね？　　一一九番だろう？　　普通は」
　そう、きつい口調で責めた。もしかしたら、処置が正しければこの女の子は助かったのだと言わんばかりの口調だった。

「だって、こんなに血が出ているし、首も折れているし……でも、でも……もしかしたら助かった可能性はあるんですか？」
「そういう意味じゃないよ。普通、怪我人を見たら救急車を呼ぶだろう。どうして警察を呼んだのかと言う意味だよ。もしかして、慣れているのかい？」
　――そういう意味なら、慣れていたのかも知れない。兄のオカルト誌勤めのせいで、自殺者や事故死者の話には通暁していた。
　結局、第一発見者として、朋香と二人でマンションの外側に停められた三台のパトカーの内の一台の中で事情を聞かれた。ただ、ここに来たのは、引っ越しした友人のお祝いだけで、始めてだったというと、刑事はあまり細かいことは教えてくれなかったが、急に興味を失ったかの態度を見せた。
「ちなみに、非常階段なんか、どうして使ったんだい？」
「それは、朋香がこっちで行こうって……ああ、彼女夏休みに歩いて東京タワーに登るイベントの抽選に当選したらしいんです。それで、高い所から歩いて降りようと思ったのかも知れません」
「そう。……そっちの彼女も間違いないね？」
　刑事は助手席から、後部座席で咲子の横で固まってしまっている朋香に尋ねた。彼女は一言も発することなく、ただうなずくだけであった。
　刑事は二人から最小限のことを聞いただけで、二人の連絡先だけ尋ね、そして、それをメモに取ると二人を解放してくれた。

「何だか、誘って悪かったね」
　二人きりになると朋香は今日誘ったことを謝った。
「ううん。いいの。今日は朝から何となく胸騒ぎがしていたんだ」
　咲子はそうつぶやいた。
「霊感？」
「ううん。そんなのじゃないって、ただの虫の知らせって言うの？　　そんなのだよ」
「ふうん」
　今日の朋香はそれ以上詮索しなかった。

（3）

（３）

　水野宗佑が麹町東警察署に戻ると刑事係班長の佐々木梓が待っていた。
「水野ぉ、また、事故ぉ？」
　最近の佐々木は機嫌が悪い。一人息子がぐずって保育園に行きたがらないのが理由だ。水野にしてみれば災難としか言い様がない。「それに、相棒はどうしたのよ。ヒカルちゃんは？」
「あいつは、事件事故両面で調べているため、現在資料室でファイルを探させています」
「駄目よぉ。捜査官がペアで動いていることにはちゃんと.....」
「普段は効率よく仕事をしろと.....」
「挙げ足取るの、やめてくれない？」
「嫌味ではありません。死体を見て悲鳴を上げる様な刑事など、未だかつて見たことがありません。慣れるまでひたすら資料室詰めを命じています」
「駄目！　班長命令よ。今後は行動を共にすること」
「わかりました」
　水野は大人しく引き下がった。警察組織では上司の命令は絶対である。多少軽いキャラでもそれは同じだ。
「それで.....あなたの所見は？」
　佐々木はくるりと向き直って尋ねた。
「被害者は同じマンションの四十四階に住む吉岡遥ちゃん。一〇歳、女児。区立麹町東小学校の五年生です。ピアノを三歳から習っていて、近く、発表会があったらしいのですが、課題曲がうまくこなせず、悩んでいたことがあるそうです。エレベータホールで遊んでいるときに近所の住民が声を掛け、そういうことを口にしたと証言が取れています」
「自殺ぅ？　小学校五年生でしょ？」
「年齢は関係ないかと思います」
「それで、他殺説の根拠は？」
「階下の住民から、夜中にピアノの練習をするのはうるさいと、管理人室に再三申し入れていたのですが、一向に改善されなかったと」
「管理人室？　何か、いやあねえ。直接言えばいいのに。子供のピアノでしょう？」
「最近の大規模マンションでは特有の問題の様です」
「まあいいわ。それで階下の住民に殺意を抱かせるほどまずいピアノだったと？」
「それはわかりません。却って聞こえるか聞こえないかくらいの騒音が一番耳障りだと言う人が多いようです。ただ、階下の住民は八十七歳の独居老人で、脚が悪く杖がないと歩行困難な様で、小学生といえど、この老人が階段から突き落とすのは無理があります」

「あらそう？」

　水野が班の間仕切りにしているホワイトボードに今回の事件の被害者と、これにまつわる苦情の類をマジックペンで書き入れた。と、そこに柳生ヒカルが戻ってきた。水野の相棒の巡査長である。
「もう、大変でしたよお。水野さん、これ持って下さい」
　そう言って、両腕に抱えた紙ファイルの束をひょいと手渡した。別に重いとは感じなかった。柳生がひよわなだけだ。
　ただ、ファイルの件数は結構あった。あのマンションとその界隈での、事故や自殺、殺人事件などの調書だった。ここしばらくなりを潜めていたのが、今日、女子大生からの一一〇番通報を受け、水野が相棒の柳生ヒカルに調べさせておいたものだった。

　キュッと音を立て、柳生がマジックでホワイトボードに追記を始めた。
　地下駐車場で乗用車に轢かれ死亡した八十六歳の老人男性。
　これも、また、同じ地下駐車場で頭から血を流して倒れていた中学生の男子生徒。
　一〇階ベランダから転落死した八十二歳の老人女性。
　同じく一〇階からの転落で死亡した五十二歳の独身女性。

「ざっとこんなものでしょうか？」
「最近のだけじゃ駄目だ。事故死はもっと古くからあるだろう。この調子ではマンション建設当時まで遡らなければならないかも知れん」
「えぇー。嘘でしょう」
「貴重な一係の戦力を裂いている。真面目にやれ」
「はーい」
「あ、ちょっと待った」
「はい？」
　柳生は行きかけて立ち止まり、そして振り向いた。
「班長から単独行動しない様命じられた。今後、俺が外に出るときは一緒に来てくれ。中にいるときは、そのまま資料調査を続行だ」
「わかりました！」
　柳生ヒカルは嬉しそうに笑みを浮かべた。よほど資料室に籠もっていたのが苦痛だと見えた。

（４）

（4）

「ご苦労さん。この記事はこれでいいよ。でもなあ.....」
　先輩記者である山浦洋一はため息をつきながら、赤鉛筆を耳に挟んだ。
「やっぱり背後関係に興味が湧きますよね？」
　高史は他人事の様に言った。
「大規模マンションの建設の裏側で蠢く建設業者と政治家の関係を疑わせる出だしじゃない？　俺もそう思った。だがしかし。かあ？」
「だがしかし、では、やっぱり駄目ですかね」
「わかっているじゃねえか。でもまあ、君は半日勤務だし、これ以上のクオリティを求めるには作業時間が短すぎるよな。後は俺も調べておくよ。来週号ではなくその次か、またその次の号に回そうぜ」
「すみません」
「なんの、君が謝ることじゃない。こんな優秀な記者を半日勤務なんて変則的な使い方をさせておくこの社の規則に問題があるんだ。でも、編集長にはオフレコだぜ」
　山浦はそう言ってかっかと笑った。
「じゃあ、六時半になりますので、わたしは芸術写真に戻ります」
「ああ、ご苦労様。明日もよろしくな」
「はい」

　ライオン社三階にある経済ジャーナル編集部を出て、一階にある自分の本来の職場である芸術写真に戻ると、編集長の森野があくびをしながら記事のチェックをしていた。
「戻りました」
「ああ、中原か。ご苦労だったな。向こうはどうだ？　よくしてくれるか？」
「ええ、自分にはもったいないほどです。それほど役には立ててないのに、しっかりフォローもしてくれます」
「そうか。でも、こっちの仕事もしっかり頼むぞ」
「ええ。佐伯さんは？」
「さっきカップラーメンにお湯を入れに行っていたな。給湯室じゃないか？」
　彼女が給湯室でカップラーメンを食べているなら、別によかった。今現在、急いでいるのは自分ではない。彼女なのだ。普段はコンビニエンスストアのおにぎりかサンドイッチと、編集部のコーヒーメーカーから自分のマグカップに注いだのをかき込んで短時間のエネルギー補給を行なっている。
　――あんまり食べると太るし、それに、眠くなっちゃうからと言っていた。

「ふう」
　と言って彼女は戻ってきた。
「中原君、戻って来てたんだ？」
「一応六時までの応援派遣ですからね。少しオーバーしてしまいました」
「ふうん。そうなんた……ああ、そうそう、怖い話ないかな？　今月分が少しネタ不足なのよ」
「ああ、そうでしたね。わたしが抜けたもので申し訳ないです」
「それはいいのよ。会社の事情なのだから」
「怖い話ねえ……こんなのがありますよ。大規模マンションの建設に関して、役所の許可申請の口利きをした政治家がいて、野党が議会で追及すると、その政治家の秘書が行方不明になったんです」
「ええっ、うそっ、で、どうなったの？」
「議会から四〇キロ離れた千葉の海岸で遺体で見つかったそうです。警察の検視では自殺らしいです」
「怖っ！　って、そんな怖いじゃなくて、オカルトのさ？」
「そうでしたね」
　高史は密かに笑みを浮かべた。芸術写真は表紙だけアイドルのグラビアで、残る九十九パーセントは心霊写真とオカルト記事の雑誌だ。元々は違う月刊誌だったのを、出版社の統廃合を経て、元の雑誌のオカルト部門だけ残ったそうだった。ライオン社は業界でも信用度の高い経済誌専門の出版社なので、どちらかというと、浮いた存在だった。

「心霊写真は集まっているんですか？」
　高史は佐伯静香の机の上を見た。本立てはファイルが積み重ねられ、台の上はパソコンと原稿用紙が散らばり、乱雑になっていた。
「読者からの投稿分は百枚から来ているわ」
「心霊度はいかがです？」
「いい線行っているわ」
　読者からの心霊写真は巻末特集で、中心となるのは記者が集めてくるオカルト記事だった。これは、佐伯静香とカメラマンの蓮見《はすみ》亨と高史の三人でやっていた。今月から経営の厳しい芸術写真から主力である経済ジャーナルに高史が応援派遣となり、こちらは戦力不足が否めなくなっていた。
　蓮見は芸大の映像美術科出身の真っ当なカメラマンで、「芸術写真」という名前に騙されて受験したと言っていた。でも、この雑誌がアイドルのグラビアと心霊写真だけからなる怪しげな雑誌であると認識しながらも仕事を辞めたりしないのは、ひとえに彼の写真に対する情熱のなせる技なのだろう。それだけに、普通の写真に赤い光が差し込んだだけと言うものに、契約霊能力者である高山光雲が「悪霊のなせるものであり、除霊が必要」というような見解にも無理に反論することなく誌面作りにつきあっている。

「これなんかどうです？　欠けた皿。番町皿屋敷の怪？」
　メール投稿だった。
　十二枚一組の絵皿で一枚だけ欠けているという。だからといって特に怪奇現象が起こっている訳でもないのに、こんなメールをよこしてくると言うのは、やはり、どこか、心配なことがあって、誰かに相談に乗ってもらいたいと言うことなのだろう。
「あの話ってさ、東京の番町と姫路の播州と二通りのバージョンがあるんだよ」
　静香がそう言った。ぼそりと。
「そうなんですか？　そう言えば、番町皿屋敷、播州皿屋敷。あれっ、どっちだっけ」
「どちらもお殿様が腰元の一人をお手討ちにしたのは同じなんだけどね」
「へぇ」
「十一枚の皿かぁ。皿屋敷の皿は十枚一組なんだよね」
「確かそうだったですかね」
　高史がパソコンを起動させ、そのメールに添付されていた写真を見ると、江戸時代初期と思われる年代の干支の絵皿だった。十二枚一組のはずなのに、寅年の紋様の皿だけ一枚欠けているという。
「一度取材させてもらおうかしら？」
　静香が机に背中をもたせかけたままそうつぶやいた。高史は確かに手頃な取材先だと思った。住所も千代田区麹町と近いし、協力的な人であれば半日ですむ仕事だ。
「いいんじゃないですか？」
　高史が同意すると静香は嬉しそうな顔になり、先方に電話を掛け始めた。
　相手は二十歳の女子大生らしかった。そんなに切迫した感じではなかった。ただ、何となく気になるので見てもらいたい。それだけのことの様だった。静香の表情は少し曇った。ブツの鑑定となると契約霊能力者である高山光雲先生を連れて行かなければならない。そうなると費用が発生するので、記事的にはちゃんとしたものにする必要がある。つまり、見たけれど何もありませんでした。と言うのは通用しないのだ。
　静香だけなら、仮にネタとして成り立たなければ、ボツにしてもいい。だから正式な鑑定ともなると少し問題があった。

「はい。……はい。……はい」
　静香の声は少し堅かった。いつもの軽いノリではない。
　逆に高史は、このネタ自身の信憑性に実感を得つつあった。歴戦の勇者である静香が堅くなるほどの話題となると、逆に言えば本物のネタではないかと言うことだ。その辺の若者の持ち込んでくる軽いノリで交わせるほどの軽いネタとは違う何かがそこにはあった。
　しかし……相手はただの女子大生ではなかった。理系、しかも工学部の三年生だという。やたらと必修単位が多く、また、実習や実験、レポートの提出に追われ、静香と時間が合わせられないと言う。
　やむなく……本当にやむなく、残念だったが、先方とはメールのやり取りだけで調査を進めることになってしまった。

受話器を丁寧に戻すと、静香は椅子の背もたれに体重を掛けてのけぞり、「ああーあ」と嘆息した。

２．マンションの怪奇現象

2．マンションの怪奇現象

（1）

（1）

日曜日のお昼少し前に、咲子は自宅のリビングの掃除をしていた。大分年期の入ったクリーナーを掛けてがあっと言う音を立てていた。

何となく虫の知らせと言うのだろうか、何気なくクリーナーのスイッチを切ると、部屋の真ん中に置いてあるローボードの上にあったスマートホンの表示が変わっているのに気がついた。誰かからのショートメッセージだ。

――朋香からかな？　彼女からショートメッセージが入ったんだと思った。日曜だし、お昼だし、どこか出かけようよ、と言って来たのだろう。スマートホンの画面を右手の人さし指でタップするとメッセージが出た。

案に相違して、朋香ではなく本橋裕美果からだった。

――二人だけで会えないかな？

「二人？」

咲子は小首をかしげた。今まで自分を呼びつけるときには、必ずと言っていいほど、朋香とペアで行動していたからだ。もっとも、昨日の小学生の死体を見て以来、彼女は少し元気がなかった。

咲子は二人ではなく、三人の間違いなのではないかと電話を掛けてみた。

「本橋です。咲子ちゃん？　掛けてきてくれて嬉しいわ」

彼女はそう言った。言葉のイントネーションからして本心みたいだった。「会えないかな？　お昼でもどう？」

「わたしなら大丈夫ですけど、朋香も誘わなくてよかったのですか？」

「いいの。大学に関することだから」

「はい？」

彼女は工学部の学生で、咲子は文学部国文学科だ。もとより接点などあろうはずもない関係だ。でも、こちらから言下に断れる立場でもなかった。

咲子は意味もなく壁に掛かっているカレンダーを見た。四月三日の日曜日だった。朋香とは昨日一日つきあったから、今日わざわざ呼び出すほどのこともない。

「……いいですよ。どこで会いましょう？」

咲子は快諾した。内心、相手の気が変わって約束をキャンセルしてくれないかなと思いつつの返事だから、もしかしたら、言葉に「いやいや」という語感が含まれていたかも知れなかった。でも、裕美果は嬉しそうに笑った。

「あたしの相談で来てもらうのも申し訳ないから、そっちへ行くわ」
「あ、わたしでしたらいいですよ。そちらまで行きます」
「いいの？　……でもやっぱり申し訳ないわ。咲子ちゃんは高円寺だったわね。中間点と言うことで、新宿まで出て来てもらえる？　新宿駅の山手線の喫茶店辺りで話そうよ。いい？」
「はい。わかりました。これから出ます」
　咲子は布製のバッグに定期と財布とスマホだけ入れて、戸締まりをして玄関を出た。

　中央線から山手線への乗り継ぎ地点の券売機の近くで咲子は本橋の姿を認めた。白い木綿のシャツにジーンズを合わせ、その上からピンクのカーデガンを羽織っていた。そして、荷物として背中に小さめのリュックを背負っていた。重量感はないから、空っぽっぽかった。
「お待たせしました」
「ううん、あたしも今来た所。来る途中でよさそうな喫茶店があったから、そこにしない？」
「はい。いいですよ」
　咲子はちらりと彼女の背中を見た。
「あはは、これ？　十日から前期日程が始まるの。この後、大学生協に教科書を買いに行く予定なの。あなたは？」
「あぁ、教科書ですか。わたしは、先日、朋香と一緒に行きました。専門書って高いですよね」
「ああ、発行部数が少ないからじゃない？　何十万部も売れれば、千円くらいになるんでしょうけど、学生数しか売れないから何千円もするんでしょうよ。でも、分厚いし、重いし、通学する学生の都合も考えて欲しいわね」
「あはは、そうですね」
　幸いと言っていいのか、咲子の取った科目の教科書は同じく高いものばかりだったが、薄かった。大学生協でコピーした方が安く上がるのだが、科目の開始時に、教員がちゃんと教科書を使っているかチェックするので、ズルは出来なかった。

　彼女の背丈は咲子より少し高かった。並んで歩いているとお姉さんと言う感じに見えるかも知れなかった。
「ここにしよ」
　レンガ風の外装に、看板には「バビロン」と書いてあった。喫茶店だった。
　中を覗くと、二、三人の客がコーヒーをテーブルの上に置き、雑誌を読んでいるのが認められた。
　――いらっしゃいませ。と、ウェイトレスがやって来て、奥の席を勧めてくれた。
　本橋は席に座ると腕時計を確かめ、「ランチにしない？」と咲子に尋ねた。
「はい」

「じゃ、日替わりランチ二つお願いします」
　と、ウェイトレスに注文した。彼女は一礼して奥に消えた。

「朋香には話さないで欲しいの」
「はい？」
　別に彼女には朋香を遠ざける理由も感情もないはずだ。咲子は疑問に思った。
「彼女に話すとうちの父親に筒抜けになるのよ」
「お父様が？　　あ、そうでしたね」
　咲子は去年、ファミリーキャンプにつきあったときのことを思い起こした。
　本橋の父親が瀬戸内重工・技術本部の次長をしていて、朋香の父親が同じ職場で営業部長をしていたのだ。技術と営業はものすごく近い関係にあるらしく、二人は何でも喋る間柄で、娘のことを話題に出すのも常日頃のことらしかった。
　単位を落とした話だろう。確かに父親には知られたくない話だと思った。

「それにね。うちにはあたしより優秀な弟がいるの」
「え？　　弟さんが？」
　咲子は記憶の糸をたぐった。そして、すぐにこの間、朋香から本橋に弟がいると聞いたばかりだと言うことに気付いた。しかも姉より数段優秀だと言っていた。咲子の記憶では確か、キャンプには父親と母親、本橋本人の他は自分と朋香しかいなかった。だから彼女が一人っ子だというイメージにとらわれていたのだ。
「キャンプの時は、あいつ、学校の夏期講習でいなかったの。世田谷科学高校の理数科の三年生」
「へえ」
　咲子の聞いた限りでは理数系では日本屈指の進学校だった。本橋の東都工科大学ではなく、もっと上の東都大学に進学が可能なほどの成績上位者で占められていた。
　彼女の本音は多分そこらにあるのだろうとは、敏感な咲子には容易に察知できた。
　多分……。
「お父さんがね……あたしに、卒業したらエンジニアとして瀬戸内重工に入ることを希望しているの。人事課やなんかの根回しなんかも出来るらしいの」
「すごいじゃないですか？」
「でも、それは優秀な学生の話。うちの大学なら、学部で上位十五名くらいが瀬戸内重工に入っているわ。ああ、男子ばかりかあ」
「そんな。頑張って下さいよ」
「無茶言わないで！　　三年次で必修科目の単位に汲々としているくらいで、どうやって、一流企業に入れますか！」
「そんなものなのですか？」
「咲子ちゃんは？　　どうするの？」
「うちは、必修とか、全然厳しくなくて、バイト何にしようかって話です。それに、わたしは、教員免許取って中学か高校の国語教師になるつもりなんです。って、いや、なれればいいなあってレベルですけど」

咲子は本橋のあまりの惨状に、少しトーンダウンした。

もし、本橋がこのまま三年次で留年したとしよう。咲子は想像を巡らした。一流企業への就職はほぼ不可能だ。その子会社か関連企業など、少しレベルの落ちる会社が主流になる。実際は咲子だって絶対に留年なんて出来ないのだ。

その優秀な弟さんが、トップの成績で東都大工学部を卒業したとしよう。もう、どこの企業へでも逆指名してでも就職が可能だろう。その上、お父さんの引きもあれば瀬戸内重工の本社技術部に配属されることだろう。お父さんとしては嬉しいことこの上ない。

そうなったとき、悲惨なのは本橋の立場だ。

遅れて卒業した挙げ句、ろくな企業へ就職出来なかった。労働条件は厳しい。文句を言って、帰ってビールを飲もうとすると、父親に嫌味を言われる。優秀な弟と引き比べられる。最悪だろうなと、末っ子の咲子は想像した。

ランチはサラダとチキンカツだった。コーヒーはモカみたいだった。いい香りがした。

「あたし、コーヒーの香りが好き」

本橋は一言そう言い、それ以上、成績の話はしなかった。

「取り直しの科目と三年次の科目と時間が重なったりしないんですか？」

咲子は付け合わせのサラダを口にして呑み込んでからそう尋ねた。留年生など見たことのない女子大からの素朴な疑問だ。本橋はむっつりした。

「二、三の科目は犠牲になるわ.....本当に興味があるのはそっちの方なのに」

「本当の興味？」

「工学部に入るって、やっぱり、ロボットの制御や人工衛星、高速鉄道なんかに元々興味があるからじゃない？　それが基礎工学の再履修で潰されるんだよ！　今の咲子ちゃんに例えると、ライスだけ二つにされて、肝心のチキンカツはお預けになる様なものなの」

「ああ.....そう言われれば、わかります。よく。基礎って何をするんですか？」

「材料力学、流体力学、熱力学。ほとんど、微分と積分の計算。言い換えれば数学の演習問題そのものだね」

――確かにあんまり面白くなさそうだ。

本橋はさっさとご飯をかき込むと、お喋りを続けた。

「このこと話すの咲子ちゃんが初めてなの。お父さんにもお母さんにも話したことないの」

「はい？　このことって？」

「あたしが成績不良の学生だと言うこと。課題やレポートも同級生に見せてもらって、ホントは丸写しなんだけど、所々、ニュアンスを変えてほとんどそのまま提出するの。教授にはバレているのか、指摘すると指導力不足が露見するから敢えて黙っているのか、何にも言わず受け取るの。でも、『優』は一つももらえない。『可』ばっかり」

可は合格だけれど、最低の成績を意味する評価ランクだった。これは女子大でも同じだ。でも、咲子と朋香はほとんどの科目で「優」以外見たことがなかった。東都工大は難関大学で、無理して入ったと考えると、後の苦労が予想される。だったら、入学前から、.....例えば教科書を買いに行ったその帰り道の電車の中ででも、猛勉強を始める

べきだったのだ。成績不良学生が好成績を収めて留年することなく上位の成績で卒業し、優秀な学生しか採用しない瀬戸内重工に入社するにはそのくらいの努力が必要なのだ。

　食後、本橋はリュックの中からタバコとライターを取り出した。
「吸っていいかな？」
「わたしは構いませんが？　　このお店どうなんでしょうか？」
　咲子は壁に禁煙のマークが掛かっていないか探した。それに、今の今まで彼女は人前でタバコなんか吸ったりすることはなかった。咲子がなめられているのか、それとも、甘えているのか？
「別にいいみたい」と言ってライターで火をつけ、ふうっと煙を吐き出した。
　コホン。と、咲子は軽く咳き込むと、本橋はいたずらっぽく笑みを浮かべた。右手の人さし指と中指でタバコを挟み、手慣れた風で吸っているスタイルを見ると、いっぱしの不良学生そのものだった。男子の多い工学部ではタバコ人口が多いそうだった。大学生協でもカートンで売っているらしい。
　さすがに、最近の禁煙風潮では販売中止の店舗が多いらしかったせいもあるのかも知れないが、咲子の周囲ではタバコを吸っている人は見たことがなかった。
　せいぜい、宗教学の准教授である森本先生が研究室でたまに煙を吹かしているくらいだった。もっとも、受動喫煙の影響が叫ばれ出してからは、学生のいるときには吸わないみたいだ。

「お客様？」
　さっきのウェイトレスがやってきた。「本店では全席禁煙となっております」
「あら、そうなの？　　禁煙マークが出てないわよ」
　本橋はそう言い返した。
「最近では禁煙がスタンダードでございますので、ガラスで分煙されたスペースを持つ店のみ、喫煙可としている店が多い様でございます」
　彼女はそう言って灰皿を差し出した。火を消せと言うことらしい。確かに、せっかくのコーヒーの優雅な香りがタバコのニコチンとタール臭で台無しになってしまう。本橋はむっとした表情で（ムッとした原因はウェイトレスの上から見下した様な態度から来るものだった）灰皿に吸いかけのタバコを押しつけ火を消した。
「失礼いたしました。ごゆっくり」
　ウェイトレスは下がって行った。

　本橋はリュックのアウターポケットにタバコの箱とライターをしまうと、中のスペースを整理し始めた。これから、工学部の三年次で使用する「分厚い」教科書を買いに出かける。中の仕切りを調節して十分なスペースを確保する必要があったようだ。
　咲子の時は食パンのシールの景品でもらったトートバッグを使った記憶があった。
　教科数がそんなになかったのと、教科書自体が、教官のノートをまとめただけの内容

の薄い書物となっていたから、肩に掛けても、そんなに負担ではなかった。

　本橋が伝票を引き取った。
「あ、わたしの分出します」
　咲子がそう言うと、本橋は「いいの、あたしが休日に呼び出したんだから。それに、口止め料もね。って、９８０円じゃ安すぎるね。あはは」と言って笑い飛ばした。
「そうですか？　　ごちそうになります」
　咲子はおごったり、おごられたりと言ったことが苦手な人種だった。
「あ、そうだ。咲子ちゃん霊感あったっけ？」
「いや.....ないと思います。あの、もしかしたら昨日の絵皿のことですか？」
「絵皿？」
　彼女は全然気にもしていない風だった。
「いや、でなければいいんです。何か気になることでもあるんですか？」
「実はね.....」
　裕美果は伝票を手に、立ち上がろうと中腰になっていたが、また、どっかと座り直した。咲子も帰るタイミングを逸した形で、中腰のまま話を聞いた。「あのマンションの地下駐車場でね.....壁に人影が映ったの。.....ううん。そう感じただけ。お母さんのクルマの助手席でライトが切れた瞬間、ぼうっと人影が映った様な気がしたの。そうしたら、非常階段で小学生の女の子が死んでいたって聞いて.....」
「あ、それ、発見現場に居合わせたの、わたしと朋香なんです」
「え、あんたたちが？」
「朋香がこの夏に東京タワーに歩いて登るイベントに当選したからって、あの高層マンションから歩いて降りるって言い出して、で、非常階段を歩いて下りていたら、あの階で女の子が頭から血を流して横たわっているのを発見したんです。もう、びっくりしたというかショックというか。わたしも昨日の夜は寝られなかったんです。朋香も多分今日は寝込んでいると思います」
「何か、殺されたとか、自殺だったとか、色々噂が飛び交っているの。ううん。あのマンション、幽霊だらけだよ」
　裕美果は両手でこめかみを押えた。
「あの女の子だけではなかったのですか？」
「ううん。あたしが調べた限りでも五、六件はあるわ」
「あの.....わたしたちが持って行った絵皿なんですが、あれと関係はあるのでしょうか？」
「ううん。多分ないと思う。幽霊を見たのはもっと前からだから。あの女の子とも無関係かどうかはわからないけど、駐車場の壁の影は、別の人の様な気がするの」
「そうですか.....」
「ああ、でも、こんなこと咲子ちゃんに言っても仕方ないよね。ごめんね。変な話を聞かせて」
「あ、いいえ」

「こんなこと気にしないで、また、遊びに来てよ。ね？」
「あ、はい」
　咲子は席を立とうか立つまいか迷った。本橋はこのままの流れで伝票を手にして立ち上がりそうにも思えたし、また、反対に別の話題に切り替わる様な気もした。
「じゃ、行こ！」
　本橋は立ち上がった。咲子はそれに合わせて立ち上がった。

（２）

（２）

「はい……はい……はい。そうなんですか。大変ですねえ」
　静香は受話器を肩と耳に挟んで、右手でメモを取りながら電話していた。先日、欠けた組皿の相談を持ちかけてきた女子学生だった。講義と実習で忙しいらしく、取材のタイミングが合わないと言うか、約束を取り付けられなかった。電話取材だけと言うのは、本来、ボツネタになってしまうのだが、静香の第六感は何か引っ掛かるものを受け取っていた。
　そして、話を聞き終え、受話器を元に戻した。
「何だか思わせぶりなのよねえ」
「どうしたんすか？」
　向かいの席の蓮見が訊いてきた。
「欠けた組皿をもらった後で、幽霊が見え出したんですって」
「ふっ」
　彼は鼻で笑った。静香には一番堪える仕打ちだった。
「それ、やめてって言っているでしょ！」
「すみません。でも、珍しいですね」
「何が？」
「佐伯さん、今までアポも取らずに強引に取材に押しかけていたではないですか。今回に限り、どうして遠慮しているんです？」
　――一流大学に通う、理科系の女子学生というのに、少し気圧されるものを感じていたのだ。自分自身、田舎の女子高を出て、東京の専門学校卒業の経歴しか持っていない。素行不良の学生や、疲れたサラリーマンやＯＬに取材するのに何の遠慮もなかったが、一段高い世界の女子学生には同じ態度は取れないでいた。
　同僚の中原高史が一緒なら？　　彼とだったらこんな遠慮とは無縁でいられたかも知れなかった。
「相手が厳しい家庭の人みたいなの」
　とだけ答えた。

　静香は出来ることに専念しようと、パソコンに向かった。ネットで得られる情報には限界も制約も嫌と言うほどあったが、何もしないよりは遥にましであった。
　ブログやＳＮＳでも結構有力な情報は得られるものだ。だから、これまでも、メール取材に入る前に積極的にこれらから情報収集に努めて来た。
「どうだ？」
　野太い声がして、静香は振り向いた。編集長の森野だった。

「このマンション。立派なんですけど、闇ネットでは幽霊マンションなんてあだ名がつけられているんです。幽霊の目撃情報も結構あるみたいですね」
「みたいですね。じゃねえよ。裏を取れ。裏を」
　森野は普段から裏取りをしっかりしなければ駄目だと、記者のお尻を叩いて回っていた。心霊雑誌と言うただでさせ怪しげな情報を載せるのだ。不思議な話は書いてもいいが、いい加減な記事は一切認めないと言う姿勢だけは貫いていた。さもなければ、こんな雑誌、とっくの昔に読者から見向きもされなくなっていただろう。
「幽霊の裏取りですか？」
　本人が見たと信じているが実体がないと言うのが幽霊の幽霊たるゆえんだ。裏なんて取り様がないだろう。
「そのマンションが出来たのっていつだよ？　　建ってから今まで起こった事故や事件、行方不明者は？　　調べることは山ほどあるぞ」
「はぁ.....それはそうですね」
「うちの会社が契約している新聞社のネット検索があるだろう。あれって、経済一部だけの特権じゃないんだぜ。うちも使っていいんだ。やれ」
「ああ、新聞社のデータベースですね。なるほど」
　そこまで言われ、静香はパソコンの画面を切り替え、データベース検索用アプリケーションを立ち上げた。これは新聞社が過去記事のデータベースを有料で開放し、検索キーワードを設定して該当する記事を探し出すと言うものである。インターネットが普及する前のパソコン通信の時代からあったサービスだ。しかし、最近ではパソコン上の記事やログを探す方が便利になり、こうした有料サービスは敬遠されがちになっている。現に静香も編集長に命じられるまで、ネット上に存在する多数の記事を探そうとしていたくらいだ。

「ああ.....なるほど。ここ三年だけでも、事故が相次いでいるわね」
「そうなんすか？」
　と、蓮見が本立ての向こう側から返事した。「新聞記事だとプライバシーに考慮して、あんまり、個人が特定出来る情報はないんではないですか？」
　と、期待をそぐ様なことを言った。
「そんなことないわ。被害者の人権無視とも言えるけど、死んだ人の氏名と年齢と職業は出ているわ」
「ふっ、なるほど」
「あっ、今、馬鹿にしたでしょ！」
「そんなことないすよ」
　蓮見が立ち上がり、こっちに来て画面をのぞき込んだ。
　データベースでは題名と日付だけが羅列され、詳しくはそこをクリックして記事を表示させなければならない。検索費用は会社持ちなので、静香は遠慮なくめぼしい情報を得るべくクリックした。
「高橋琉貴亜.....って、これなんて読むのかしら？　　.....ルキアだって。十四歳、中

学生。三枝カオル、五十二歳、無職。佐藤耕介、八十二歳、無職。そして、吉岡遥、十歳、小学生」

直近の事故死.....と思われるがこれだけあった。

しかし、わかるのはそこまでだった。どんな死に方をしたのか、あるいは、殺されたのだとしたら、その動機や、誰に怨まれていたのかなど、知りたいことは山ほどある。

「連絡先わからないかしら？」

と、誰にともなく問いかけた。

あ、と、思うまでもなく、静香は反射的に机の上の電話機を手にしていた。

「あの、高橋琉貴亜の親戚の者なのですが.....」

マンションの管理事務所に電話を掛けてみた。セキュリティの緩い所ならひょっとしたら、本人の家族と連絡が取れるかも知れないという、はかない望みを抱いていた。

「連絡先はわかりません。事故の後、引っ越されて行きましたよ」

管理人はそんなことを言った。

そして、声を変えて、他の人の親戚を装い全員の連絡先を確かめた。現在も住んでいるのは吉岡遥の両親だけだった。

「後は、足を使って情報収集しかないか.....」

静香はそうつぶやき、いつも使っている革の取材鞄にノートとカメラとＩＣレコーダーを入れて、ジャケットを羽織った。

「あ、佐伯さん。行くんすか？」

蓮見はどうしようかなと言う態度で尋ねた。

「蓮見くんはいいわ。多分、今回は空振り率七〇パーセントだから。あたし一人で行ってくるわ」

「ご健闘を祈ります」

蓮見はニコリともせず、自分の作業に戻って行った。

三〇分後、静香は地下鉄麹町駅の階段を上った所で、辺りを見回していた。ここにマンションなんてそうはないはずだった。元々は商家が集まった街であり、現在もその流れを汲み、多くの企業のビルが建ち並んでいる。

その中でも一際高い建物を見つけた。五〇階建てのビルだそうだった。だとしたら、あれ以外にあり得ないと思った。

静香は灰色のパンツを履いた脚ですたすたと歩いた。

最近のマンションはどこともそうだろう。マンションの入り口にはセキュリティゲートが施されていた。暗証番号を押すか、キーを鍵穴に挿すかしないと玄関の自動ドアすら開かない仕組みになっていた。取材は初っ端から行き詰まった。どこかに、開けてくれそうな人はいないかなと手を目の上にかざして、自動ドアの内部をのぞき込んでみた。

ベビーカーを押した女性が何人か、話し込んでいるのと、幼稚園児らしき子がエントランスフロアで鬼ごっこみたいな遊びをしているのが目についた。

静香は子供の気を引き、誰かが自動ドアに近づいて来ることを期待した。オートロックは内側からなら簡単に開けられる。

バッグの中から、自分が休憩時間に食べているお菓子の袋を取り出した。――何かいいものはあるかな。少し迷って短い棒のついたキャンデーをつまみ出した。
「僕ぅ？　ほうら飴だよぉ。ほらほら」
静香は幼児の気を引くべく、キャンデーの棒をふうら、ふうらとかざしてみた。
しかし。幼児は静香の誘いには乗らなかった。
――何だ。それだけかよ。という態度でちらりと一瞥し、右手で瞼の下を押さえて「あっかんべえ」をした。――かわいくないガキだ。

正直、静香は困っていた。これから、取材をしたいのに、セキュリティゲートすら通してもらえないでいる。
そのとき、背後からガラガラという音を立てて、男性が近づいた。荷物を満載した台車を押している配達業者の中年男性だった。
「いいですか？」
インターホンの前で立ち尽くしている静香は、それとなくそこをどく様要請された。
場所を譲ると彼はインターホンのボタンをポンポンと押し、「９７５０＃」と入力するとドアがすっと開いた。鍵がないときに入るための暗証番号だった。住民以外には知らされていない番号だが、頻繁に出入りしている配達業者や出前の人にはそれとなく知らされていたのだろう。静香は横目でその動作を眺めていた。いや、仔細に観察していると言っても過言ではない。
番号だけ記憶にとどめて置いて、いや、このマンションにはこれから何度も通うことになると予感があった。誰も見ていない所で、メモ帳に書き取った。簡単な番号ほど、すぐに忘れてしまうものだ。記憶の狭間に紛れ込んでしまい、二度と記憶の表層に現れることはないのだ。そして、定期的に通わないと、月に一度くらいの割合で番号を変えられてしまう恐れもあった。通常のマンションだったらそれは当然の措置だ。不便かも知れないが、友達の友達はもはや他人だとする現代の人間的つながりからすると、便利さは危険に様変わりをする。

この場は台車を押す男性の後ろにつき、ゲートをくぐることにした。――おじさん。ありがとう。静香は男性には見えない位置ながらも、笑顔で会釈し、エレベータホールに向かった。

（3）

（３）

事故のあった当事者はほとんどが引っ越すか何かしている。マンションで付き合いがあるのは、両隣と上下の部屋、そして、同じ階のエレベータに一番近いお宅だ。順番に事情を聞いてみることにした。それに本人に訊くより客観的な本人像が浮かび上がるものなのだ。そして何より、聞き込みから、本人とそれにまつわる怪奇物語を紡ぎ出すのは怪奇現象記者、佐伯静香に取りもっとも得意な事柄でもあった。

――ピンポーン。と、ドアのインターホンを鳴らすと、お年寄りの女性が出て来た。手短に中学生の高橋琉貴亜くんの生前の様子について伺った。

「そうねえ.....」

女性はあまり好感情を持っていない様に見えた。「素行不良って言うの？　問題のある家庭の問題のあるお子さんだったわ」

「素行不良ですか？」

「そう。.....あんまり亡くなった人のこと悪く言うものじゃないのだけれど、不良のリーダー格って言うの。そんな感じだったわ」

「実際に奥様も何か被害に？」

「ううん。警察が来て騒がしくなったことがあったけど、.....まあ、被害と言ったら被害かな。でも、直接の被害者じゃないの」

「では、直接の被害者はいたのですか？」

「そうねえ。もう、二年前のことだから。ああ、そうそう、同じ中学の同級生で、吉田明弘くんっていたの。その不良グループからイジメの標的になっていたそうよ。同じマンションの住民だったら、逆に仲良くしてあげてもいい様に思うんだけど、実際はそうではなかったみたい」

静香はジャケットの内ポケットに隠したＩＣレコーダーの位置を確かめ、そして、髪をかき上げた。

「不良グループってどんな悪さをしていたんですか？」

女性の説明によると、高橋琉貴亜が中心となって、近所のスーパーで万引きをして数回警察のお世話になった他、いじめられっ子に対する恐喝でこれまた補導されたこともあるらしかった。このマンションの住民で高橋家に対する感情はかなり悪そうだった。

彼は地下駐車場で頭から血を流して倒れている所を発見されたことになっている。救急搬送されたものの、病院で死亡が確認された。

「本当に事故だったとお考えですか？」

「今となってはわからないわ。でも、他人様から怨まれていなかったかと尋ねるとするならば、怨まれまくりだったと言えるでしょうね。もしかしたら.....って噂も当時はあったもの」

「そうなんですか」
「でもねえ。結局親が一番悪いと思うのよ。息子の教育って言うの？　してはいけないこと、他人様に迷惑を掛けないで生きることの大切さとか、全然教えてなかったと思うの」
「なるほど」
　新聞記事では高橋琉貴亜は交通事故となっていた。まあ、そうだろう。駐車場で頭から血を流して倒れていたのだ。クルマにはねられたか何かだろう。しかし、このひき逃げ事件と言ったらいいのだろうか。犯人は見つかっていなかった。
「犯人に心当たりは？」
　静香は最後に質問した。
「地下駐車場の契約者全員が容疑者だと思うわ。このマンションの住民皆が高橋さんのことよく思っていなかったもの」
「ありがとうございました」
「いいえ」

　お礼を言って、鞄の中から寸志の入った袋を取り出そうとして、思わず手を引っ込めた。これは「芸術写真」の取材で話を聞いた訳ではなかった。あくまで、高橋琉貴亜の親戚のおばさんを装って事情を尋ねに来たに過ぎないのだ。
　この後、エレベータに乗り十階に移動し、去年亡くなった三枝カオルのことを隣の家の奥さんに尋ねた。
「三枝の親戚の者なのですが、亡くなった当時の状況について聞きたいんです」
　同じ様に尋ねると、奥さんはホッとした様な表情になり、答えてくれた。
「正直、あの人の顔と声を思い出すだけで、今でも具合が悪くなるのよ」
「具合ですか？」
「心臓がバクバクして、血圧が上がるって言うの？　もう、ＰＴＳＤになっちゃいそうなくらい」
　ＰＴＳＤとは心的外傷後ストレス障害の略だ。大きな事故の後に、精神と身体に不具合を生じる心身症のことだ。よっぽど顔を見るのも嫌だったと思われた。
「三枝は何をしていたんですか？」
「騒音おばさんっているじゃない？　よくテレビのワイドショーなんかに取り上げられる」
「ええ。裁判にもなってますよね」
「あの人がそのものだったの。夜中に、……実際、うちの主人が正式に訴えると言って、公害計測業者に測定させたことがあったの。夜中の十二時にオーディオの音を最大にして、演歌や歌謡曲の音源を流すの。いや、演歌なんてものじゃない。そんなものを通り越してただ、怖いだけ」
「因みに何デシベルでした？」
「一一〇デシベル」
　鉄道が通過するときの高架の真下の音が最大で一〇〇デシベルくらいだから、もう、相当な音と言うことだろう。そんな迷惑な音を夜中に聞かされたのでは、普通の人でも心身に異常が生じるだろう。よっぽど困っていたと思われた。それは、同じマンション

の隣の住人でありながら、裁判に訴えると言う、普通なら過激すぎる対応を取ったのだ。
「三枝の家族は何と言っていましたか？」
「あら、あなた親戚ではないの？　三枝さんは独身よ」
「あ、ああ、そうでした。止める人がいないから問題だったのでしたよね」
　三枝カオル、五十二歳、独身女性は、パートか何かをしていた様だ。では、どうやってこのマンションを買ったのか疑問に思えるが、ずっと独身だった訳ではなく、若い頃には結婚していて、おかしくなった頃に離婚し（させられたか？）、慰謝料代わりにこの部屋を手に入れたらしかった。
　この十階の廊下の手すりを乗り越えて地上に落下し、全身打撲で死亡している。
「正直、亡くなってホッとしたと言うか。こんなこと言うと冷血人間の様に思われるかも知れないけど、よかったって思ってる。あのまま大音響を流し続けて、主人は裁判所に訴え、何年もああでもないこうでもないと、争い続ける.....わたしは、それだけでも耐えられなかったって思ってる。それから逃れただけでもよかったって.....」

　奥さんは未だ、いなくなった三枝カオルの亡霊に悩まされているみたいだった。本人自らＰＴＳＤと言うだけあり、本当に、彼女のことを思い出す度、口にする度、手の先が微かに震えていた。何だか、思い出させて気の毒なことをしたと静香は思った。
　次いで、二十七階に住んでいた佐藤耕介氏、八十二歳のことも近所の人に訊いた。
「ああ、あいつなら、いなくなって清々しているよ。あのじいさんだろう？」
　人のことをじいさんと言う割にここの御主人もかなり、お年を召していた。見た目七十五、六と言った所だろうか。
「佐藤さんは亡くなる前、どんなだったですか？」
「もう、呆けてたんだろうね。自分のやっていることが認識出来ていなかったんだろう」
「はあ」
「夜中に、徘徊しては、非常ボタンを押しまくっていた。このマンションのセキュリティでは警備会社に直結していたから、しょっちゅう、警備員が飛んで来ていた。場合によっては消防に通報したこともあったんじゃないかな。俺がみたとき、夜中の二時に消防車が三台も来て、現場検証していたことがあったな」
「実際に火災になったことはあったのですか？」
「ないよ。そんなもの。木造アパートじゃあるまいし、こんな近代的な鉄骨コンクリートの建物でそうそう火災なんて起こるもんか」
「ご家族は知っておられなかったのですか？」
「えぇ？　ご家族？　あんた、親戚じゃなかったのかい？　佐藤さんは今時の独居老人だよ」
「あ、ああ、そうでした。遠隔監視システムを入れようと話だけは出てたのですよ」
　静香は咄嗟に話を合わせた。
　何だか、三枝カオルにせよ、佐藤耕介にせよ、現代社会が抱える人間関係の歪みの様な気がした。

　最後に静香はエレベータに乗り、四十四階の一つ下の階に行った。非常階段の四十三階で首の骨を折り倒れていた小学生、吉岡遥のご近所の人の証言を得たかったからだ。エレベータホールを出て少し歩くと、中年女性の住む部屋に行き着いた。インターホンを押すとすぐに出て来てくれた。
「あの、吉岡の親戚の者なのですが、昨日亡くなった吉岡遥ちゃんの生前のことについて知りたいんです」
　そう言うと、女性は、ああ、と言う表情になり、玄関先で腕を組み、あんまり、彼女のことを快く思っていなかった風を装った。
「近頃の若いお母さんって、どういう教育をしているのかしら、神経を疑うわね」
　履き捨てる様にそう言った。年の頃は五十代に差しかかったくらいと思われた。
「ピアノの練習を遅くまでしていたと伺っています」
「そうよ。上手ならまだＢＧＭになろうと言うものだけど、ものすごく下手。あれでは、中学に上がる前に辞めさせた方がいいと思うわ」
　そう、女の子のピアノの腕前をこき下ろした。
「夜中にピアノを鳴らしていたんですか？」
「苦情を何度も管理人室に入れているわ。昼間は塾だの習い事だの言って、遅く帰って来て、八時過ぎから夜の十二時までピアノを弾いているの。スタインウェイがどうのとか、メーカーがどうのとか言ってたらしいけど、それ以前の問題よ。音感が育っていなければ、遅くから始めたってある一定の所までしか上達しないのよ。ピアノは特にそう。幼児期から始めて絶対音感を身につけなければ、絶対にうまくならない。あなたはご存じないかしら？」
「あ、ああ、聞いたことあります」
　静香は女の子のピアノをこき下ろし、持論をまくし立てる女性の勢いに負け、首肯した。
「発表会が近いとか言っていたわ。でも、それに合わせて急にうまくなんてなりっこない。娘さんも少しは分かっていたみたい」
「ふうむ。そうなんですか？」

　静香は聞くだけのことは聞き出したと判断し、また、エレベータに乗り一階に下りた。エントランスホールでは子供を連れた若い母親たちがまだお喋りに興じていた。静香はそれとなく声を掛け、四人の事故死者について知らないか聞いてみた。
「ああ、高橋さんのお兄ちゃん？」
「ええ、ご存じないですか？」
「不良がかかった格好をしていたけど、子猫にはやさしいとか聞いたことがあるわ」
「ああ、そうそう。捨て猫を拾ってきて里親捜しをしたりとか」
「えっ、そうなんですか？」
　ただのワルだとは判じ切れない情報を得た。
「三枝さんの奥さんと仲がよかったって、十階の浪人生が言っていたわ。自分の息子みたいにやさしくされたって。……ほら、三枝さん若いときに子供を亡くしているから、余

計に浪人生にやさしくなったんでしょうね」
「へぇ。何か、ご近所の人の評価と全然違いますね」
「そりゃ、大きなマンションですもの、いい面も悪い面も見えてくるものよ」
「因みに、このマンションはいつ建設されたんですか？」
「さあ、……後藤さん知っている？」
「わたしも主人から聞いた話では、平成元年竣工ということよ。当時はバブル景気のまっただ中で一番高い部屋は一億五千万円もしたそうよ」
「いちおく！」
　静香が素っ頓狂な声を上げると、若い母親たちは笑い出した。今では半額くらいのレベルで落ち着いているらしかった。それでも、七千五百万だ。静香には到底手が出ないと思った。
「あの、琉貴亜くんが事故に遭ったって聞いているですが、監視カメラなんかはどこで見ているんですかね？」
「さあ、管理人室じゃないかしら。あそこが警備室も兼ねているから」
「そうですか。ありがとうございました」
　静香はいかにもな態度だと思いつつも、まるで通りすがりの人の様に振る舞い、エントランスホールを後にした。ここは冷房も効いていて、立ち話するにはもってこいの憩いの場だと思った。高級なマンションならではの設備だった。

　静香が管理人室を覗くと、あらかじめ、来訪者があるのを察知しているかの様だった。
「あんた。誰？」
　この高級マンションの住人に対しては絶対使わない様な言葉遣いで誰何された。
「あの、事故でなくなった高橋琉貴亜の親戚の者です。当時の状況が知りたくて、彼のおじから頼まれて来たんです。佐伯静香と申します」
「ふうん。ああ、そうですか」
　関係者であることを告げると、相手は一応敬語になった。静香は内心で苦笑した。いや、苦笑しつつも、相手の首から提げた顔写真入りの身分証に目をやった。
　――黒木友三。麹町不動産管理株式会社。とあった。
　四十代半ばの額が少し後退しかかった日に焼けた顔の男性だった。手は、油汚れがついていて、力仕事が得意な様に見え、指は太く節くれ立っていた。
「事故は目撃者がいないんですよ」
　彼はそうぶっきらぼうに告げた。早く帰れと言わんばかりの態度だった。
「ええ？　　でも、監視カメラがあちこちに付いていますよね？　　こんな高級マンションなら尚更のことじゃないですか？」
「いやあ、高級は高級なんですけどね。……仕様は確かに高級です。けれど、竣工が平成元年と少し古いんですよ。古い分、仕様も古めになっていて、例えば監視カメラだと、一秒二十コマの現在主流になっているタイプではなく、一秒に一コマの古いタイプなんですよ」
「では、その一秒の間に事故は起こったと？」

「ええ、しかも、記録ディスクとディスクの切り替わりの間というタイミングのよさ、ああ、いや、悪さでして、.....当時も麹町東署の刑事さんが何度も見えて捜査したのですが、結局はひき逃げで落ち着きました」
　管理人はそう言い、椅子にどっかと座った。
「黒木さん.....でしたっけ？　あなたはその当時のことをご存じなんですか？」
「その当時？　いつのことです？　わたしがここの管理を担当する様になったのは三年ほどまえからです」
「ああそうですか。監視カメラ導入に関してはご存じない？」
「いや、会社からはちゃんと引き継ぎ事項として承っていますよ」
「それは失礼しました」
「他には？」
「いや、他には別に」
　静香は用が済んで追い出されるかの様に、管理人室を後にした。他に疑問点が残らないか、周りをキョロキョロしながら。

３．管理組合

３．管理組合

（1）

（1）

マンションには普通の住宅では自治会に相当する「マンション管理組合」なるものが存在する。いや、実際には大規模修繕などが定期的に行われ、その予算が組合費として組み込まれているので、一般の自治会よりは権限は大きい。役員は毎年交代で大体は各階ごとに一人の代議員、そして、持ち回りで執行役員（理事長、理事、幹事などと呼ばれる）が決められる。

その中の四十七階の幹事をしている山岡さんの奥さんに、裕美果は母親と一緒に話を聞きに行った。

「うちの娘がどうしてもと言うものですから……非科学的なお話なのですけれど、もし、何か事情が……そう、マンション建設時の出来事とかおわかりになる範囲で結構なのです。教えてもらえないでしょうか？」

と、母の美千代が何度もお辞儀しながら、手で口元を押えて尋ねた。

「もしかして、地下駐車場の壁の染みのことですの？」

「それです！」

裕美果は思わず叫んだ。壁の染みが視線を逸らした瞬間、ふうわりと動いたのだ。非科学的には違いないが、幽霊や亡霊の類に相違ないと思っていた。多分、マンション建設時に事故か何かであの駐車場で誰か死んでいるに違いない。もっとも、本橋家に持ち込まれたアンティークの品々に込められた怨念みたいなものも否定は出来ない。こちらも非科学的だ。でも、母が大量に蒐集していて、どれにどんな怨念が籠もっていたのかはよくわからなくなっていた。

「あら、お嬢さんも見たの？」

「はい！」

裕美果が答えると、奥さんは右手の掌で口元を押え、おかしそうに笑った。

「あら、あなたも見たの？」という感じであった。「でもあれはあんな染みなの。昔からあって、地下水の影響だか、段々形は変化しているけど、それ以上でも以下でもないのよ」

と、幽霊説は言下に否定した。「でもねえ」と、奥さんは続けた。

裕美果は耳に手を当て、奥さんのもたらす情報を一パーセントも聞き逃すまいとした。

噂のレベルを超えるものではないが、マンション建設当初から、地下駐車場の辺りで幽霊らしき人影が見えたことがあるらしかった。裕美果は買う前に言ってよと思ったが、横で大人しく聞いていた。

事故か何かあったのですか？　と母親は聞くが、工事中を含めそんな事実はないという。三年の工期中、事故で亡くなった人はいないそうだった。建設会社とのやりとりと、議事録の写しを見せてくれた。

工事は昭和六十二年から始まっていた。日本中が土地の投機に沸き、ちょうどバブル景気に差し掛かった頃だった。あちこちで土地の買い占めや転売、そして、値上がりを見越し利ざやで稼ぎまくり、資金は銀行や金融機関がそれこそ、無尽蔵な資金を湯水のごとく市場に供給した。

「元々は何が建っていたんですか？」

事故説を否定する奥さんに裕美果がしつこく食い下がった。

「ううん」

奥さんは拳をほっぺたに当てて考え込んだ。「わからないわ。あのときは工事の時の事故が原因じゃないかってみんなが誘導されてしまっていて、マンションが建つ前のことまで気にしなかった様な気もする.....」

――そんなはずはない。前が何だったのか、誰だって気にするだろう？

「議事録、見せてもらっていいですか？」

「あ.....ああ。いいわ見て頂戴」

奥さんは部屋の中に姿を消して、しばらくして出て来た。どうやら、部屋の中を掃除していたみたいだった。それはそうだろうなと裕美果は思った。自分だって、普段のとっちらかった部屋など誰だって招待できるものではなかった。

奥のリビングの棚に古いキングファイルが押し込められる様に入れられていた。奥さんはその一番端のものを取り出し、ベランダで軽くハタキをかけてから裕美果に手渡した。マンションが建って数回目の総会の議事録と参考資料だった。付箋が何カ所かに貼られていた。

裕美果はすぐに目的のページを見つけた。

――工事期間中に事故や事故死はなかったのか？

という、住民の問いに対し、管理会社の担当者は工事記録（別の巻にファイルされていた）を指し示し、三年にわたる工事期間中に人身事故はただの一度もなかったと回答していた。従って、幽霊目撃談など、まったく根拠のないデタラメな言いがかりだと反論している。

そして、.....裕美果の思った通り、マンションが建つ前は何だったのか？　という質問も小さく扱われていた。

この場では管理会社は即答せず、おって回答となっていた。

そして、二週間後、文書で回答されている。時間がかかった理由は、このマンションの敷地は一つの物件ではなかったことが挙げられていた。

「地上げって言うの？　バブル時代によく行われていたらしいわ。小さな土地を数億円で買い集め、大きな区画にして高層マンションなんかにして数百億の価値を生み出すの」

「ええっ！　そんなことが？」

「そんな時代があったのよ。銀行はそんな業者にいくらでも、無制限にお金を貸し出し、

業者もお金をばらまくようにして土地を買い漁ったの。聞いたことない？　東京の二十三区の土地を全部売ったお金で、アメリカが二個買えるって豪語していた業者もいたくらい」
「えぇー」
　裕美果にはにわかに信じられなかった。価値観があまりに違いすぎる。そんなに数百億円の価値を産み出したとして誰がそれを買うのか？
「ううん。買うんじゃないの。と・う・し」
「とうし？」
「そう。家やマンションは住むものじゃなくて投資の対象だったの。そんな時代。だからこのマンションもバブル経済が崩壊する頃まで、住むことを前提に買う人はそんなにいなかったんじゃないかしら」
「はぁ……このマンションに古い住人の方はいらっしゃらないのですか？」
「そんなことないわ。管理組合の理事長さんなんかはその当時からの住民よ」
「じゃあ、何億も出して購入したのですか？」
「多分、古い人はみんな数億円で購入していると思うわ。でも、転売するタイミングを逸してしまった。そんな感じじゃないかしら」
「へぇ」
　裕美果がページを繰ると、管理会社からの回答が載せられていた。
　あまり聞いたことのない商事会社や商店のビルがあったみたいだった。うなぎの寝床と呼ぶような細長い形状で、それがＬ字型やコの字型になって、このマンションの敷地を形成していた。登記上はそこまでである。それらが統合されて、一つの区画として再登記されていた。フォルテッシモ麹町。
「ふぅ」
　裕美果は髪の先をいじった。これらの会社で土地が買収される前のことまではわからない。さらにいえば、一度、登記した後で、別の会社に再度売却されてもいた。だから、何かあっても、告知義務はないと言う訳だ。
「裕美果。もういいでしょ。何もないわよ」
　母親はそう言って、キングファイルに食い入る裕美果の袖を引っ張った。
「お母さん……」
「いいの。今住んでいる部屋に幽霊や妖怪の類いが出る訳じゃないんだし。それに、駐車場の黒い染みは、地下水が染み出てできたカビか何かよ。気にすることはないわ。もう、行きましょう。こちらのお宅にも迷惑よ」
「あ、それは……そう。どうもすみませんでした」
　裕美果は母と役員さんの家を後にした。

（２）

（2）

　高史が芸術写真編集部に出勤すると、静香が嬉しそうな顔で出迎えてくれた。
「そりゃあ、一応、正式にはこっちの所属なんですから。朝一には出ますよ」
「そんなことじゃないのよ。例の麹町のマンションの女子学生さん。アポは相変わらず、全然取れないし、つれない態度なのは変わりないんだけどね。他の筋からの情報で、やっぱり、幽霊の目撃談って言うの？　結構いるみたい」
「幽霊がですか？」
「違う！　目撃者！」
　静香は声を荒げた。
「すみません。でも、あんな高級マンションに出るんですか？　過去に事件でもあったんですか？」
「過去には……ないみたい。でも、最近というか、ここ数年色々出て来たわ」
　と、自慢げに語った。「交通事故とかね、階段からの転落死とかね。調べ甲斐ありそう！」
　こういうときの彼女の目は輝いていた。でも、女性としての魅力とは方向性が違う。例えば、夏休みに山にカブトムシを捕りに行って、でも、捕れなかった代わりに、カブトムシの幼虫を見つけたときの少年の瞳の輝きと言ったらいいのだろうか。高史は、苦笑して、あえて反論はしなかった。
「地下駐車場の幽霊って言うのが結構多いらしいのよ」
「それは暗いからでしょう。人間が歩いているところを背後からクルマのライトで照らされれば、壁に人の形が浮かび上がるのも当然ですよ。見間違いって言ったら失礼ですが、ガセネタの可能性が強いと思いますよ」
「中原くんてば、投稿者の意識をわかっていないよ！」
「はいはい。それで、取材方針は決まっているんですか？」
「あ、ううん。これから。事故で亡くなった人って、家族がその後引っ越したり、たまたま一人暮らしだったりで、遺族っていうの？　お話を聞ける人がいないみたいなのよ」
「周辺の人でいいんじゃないですか。あ、そうか。最近のマンションでは隣に誰が住んでいたかも知らないくらいの人が多いのでしたっけ？」
「でも……聞いて回るわ。いくら普段疎遠と言っても、お葬式くらいは手伝ったでしょうから」
「それでは、まずは現場に行ってみますか？」
「え、いいの。経済ジャーナルは？」
「午前中はこっちの勤務ですから問題はありません。それに今取材している高層マンションってそこなんです。午後からはそのままそこの取材に移らせていただきます」

「あら、そうなんだ」
　静香は嬉しそうな顔になった。

　早速、黒革の取材バッグにカメラや取材ノート、ＩＣレコーダーなどの電池を確かめてから放り込んでいく。心霊取材やなんかで、あちこち飛び回っているのだ。唯一、それらとの違いがあるとするならば、今回はお日さまの出ている日中に取材することだった。高史は途中で抜けて経済ジャーナルの仕事に切り替えられるよう、両方の準備をする。とはいえ、後者は先輩である山浦記者のアシスタントに過ぎないので、そんなに重装備ではなく、荷物も少なめだった。
「クルマ出そうか？」
　静香は少し迷った顔で尋ねた。
「電車の方が早いんではないですか？」
「そうなんだけど、途中で時間切れになったとき、中原くんの荷物、そのまま引き取って編集部まで戻ってもいいしと思って」
「ああ.....」
　何て優しいことを言うのだと思った。そんなことを言う性格の女性ではなかったはずだ。よっぽど、経済ジャーナルの記者を引っ張り出すことに負い目を感じているかの様だった。いやいやいや、そんなはずはない。よっぽど今日の取材に食指を動かされているのだろう。きっとそうに違いない。

　地下鉄の麹町駅から長い階段を上って地上に出たとき、空はきれいに晴れ渡り、一点の曇りもなかった。こんな晴れのとき、写真は意外と難しい。明るいところが真っ白になり、暗いところが真っ暗になる。むしろ、薄曇りくらいが一番記者としてありがたい。でも、静香を見ると、そんな風でもなく、都会の喧噪を楽しんでいるかの様だった。基本的に会社のビルばかりの町である。
　そんな中、一棟だけの高層マンションが屹立していた。地図で探すまでもない。まさに「ランドマーク」そのものだった。駅からマンションの入り口までを静香は丁寧にポイントポイントでカメラに収めていた。
　こんな写真など、後で使い道などないに違いないが、記者として気合いを入れる意味合いもあるのだろう。それに、元々静香は映像メディアを専攻していたと聞いている。

「セキュリティゲートなのよ。ここ」
　静香はガラス扉が固く閉ざされた前にある「電子ロック」のキーボードを指で指し示した。これがないと入れないし、暗証コードがわからないとなると、誰か知っている人の部屋番号を押し、呼びかけてゲートを開けてもらわなければならない。
「例の女子大生の彼女はどうです？」
　高史が問いかけると、静香は「あぁ」と天を仰いだ。たまたま、この上空四十七階が彼女の部屋だった。

「アポも取れてないし、今日は多分大学の講義があるって」
「そんなもの、真面目に出ているやつなんて……ああ、彼女理系でしたね」
　高史は経済学部だった。確かに、真面目に講義なんて出ることもなく、アルバイトに精出していた。そのときでも理科系は単位も出欠も厳しいと噂には聞いたことがあった。

「あ、待って。中原くん。前に来たとき、暗証番号をね……」
　静香が前に宅配業者が押していたと言う番号を入力すると、自動ドアが開いた。
「流石ですね。佐伯さん」
「おだてないで。この間は苦労したんだから」
「苦労？」
「子供がいたので、キャンデーで釣ろうとしたんだけど、あっかんべえをされたの。頭にくる」
「あ、ああ。なるほど」
「納得しない！」
「すみません。それで、駐車場の幽霊でしたね。エントランスからはどう行けばいいんです？」
「あ、ああ。そうだったわ。この奥を抜けた所に非常階段があって、そこから地下一階から三階まで下りるか、または、エレベータで下りるかだわ」
「ひゅう。地下三階もあるんですか？」
「麹町ですもの、地価が高いからなんでしょうね」
「非常階段から行ってみましょう」
　高史は先に立ち、肩から提げている黒の革鞄に手を突っ込み、デジタルカメラを手探りで手にしてスイッチを入れた。
　防火扉を開けて階段を下りる。長い階段だった。
「普通は途中で折れ曲がっているものでしょう？　　佐伯さん」
「そうね。あんまり誰かが使うことを想定していないみたいね。三メートルを一気に下りるってちょっと使う人には不親切かも。あ！」
「どうしました？」
　階段を下りる途中で静香が立ち止まり、何か言いたげに振り返った。
「階段から落ちて亡くなった人がいたじゃない？　　あれ、この階段だからこそなのよ。もし、普通に途中に踊り場があれば、三メートルの半分？　　一・五メートルですんだのよ。落ちて死ぬような場所ではないわ」
「そうですね。でも、その人たちはわかって非常階段を利用したのでは？」
「この間の小学生の女の子ならそうでしょう。でも、他の人はお酒に酔ってとか、呆けてとか色々事情があるみたい。危険な場所だと認識していない可能性もあるわ」
「なるほど、そうですね」
　高史は反論の根拠も見出せないで、ただ、相づちを打つ感じでそう答えた。もちろん、静香の意図を肯定するつもりはない。

　地下一階に着き、防火扉を開けると、排気ガスの臭いがした。薄暗い中を、所々、照明が照らしている。ずらりと乗用車が停まっていた。このマンション五十階分の住民の持ち物である自家用車の列だった。
　地下三階から一階までの駐車場から地上へは自走式で出る様に出来ていた。
「あ！　あの壁」
　静香が声を上げた。指さす方向を見ると、確かに壁に染みが浮かんでいた。しかし、いかにも地下水が染み出ただけの様に見えた。
　高史はカメラを向けつつも、軽く失望感に襲われた。幽霊の正体にしては、あまりにみみっちい。「その女子大生の言うにはね、じっと壁を見ているとふうっと浮かんで影が動いたんだって。.....本当かなあ」
「ち、ちょっと、佐伯さん。佐伯さんがそんなことを言っちゃあ駄目ではないですか」
「まあ、行ってみよ」
　彼女も、何枚かデジタルカメラで染みの遠景を収め、そのままクルマに気をつけながら壁に近づいて行った。そして、カメラを左手に持ち替え、右手の掌で、染みの箇所をぽんぽんと押えた。押えた所で、単なる壁の染みには違いない。何の変化もなかった。まだ、毒虫でもいて染みの形に蠢いている方が記事としてはまとまりやすかったかも知れない。
「駐車場で轢かれた話はどこです？」
「ああ、あっちの話もあったのよね。待って」
　静香は取材バッグの中からビニル表紙の取材手帳を取り出し、ページを繰った。「駐車ナンバー４番の近くよ。ここからだと、反対方面の.....入り口に近い方だわ」
　高史は各駐車区画の白線と、その前に描かれたナンバーを目で追っていった。

「このクルマが轢いたんですか？」
　高史は４番の区画にあったセダンを指さした。
「ちょっと待って。その区画の契約者は事故当時とは変わっているみたいなの。.....当時は空き区画になっていて、別のクルマが勝手に一時借用したとなっているわ。警察は轢き逃げ事件として、捜査したみたいなんだけど、容疑者不詳のまま書類送検して、ピリオドになっているみたいなの」
「監視カメラには映っていなかったのですか？」
「管理事務所に問い合わせたんだけど、うやむやにされちゃった。てへ」
「どういうことです？」
「厳しいんだ。経済ジャーナルに移ってから厳しいよ」
「そんなつもりはないですが、どうなったんです？」
「監視カメラが最近のものだと一秒三〇フレームで録画しているんだけど、昔のタイプだから一秒三フレームの解像度しかないんだって。しかも、録画ディスクの切り替わりポイントになっていて、その時間の前後十秒が抜けているそうなの。だから、轢かれた瞬間の目撃情報はゼロ」
「ううん。そう言われると厳しいものがありますね。昔のデジタル機器の性能ってそんな

によくなかったですよね。このマンションは平成元年竣工でしたっけ。古いっちゃあ古いですよね」
「それに、轢かれたご老人の噂もあんまりよくないのも……」
「それは原稿を読みました。問題のある人だったにしても、轢き逃げはよくないですよ」
　それに……である。人を轢けばクルマの前部は大破するように出来ているものだ。前がひしゃげることによって、衝撃をやわらげ、人体に対する被害を最小限に収める様に設計されている。もし、人を轢いたその足で表通りを走ったりしたら、たちまち、白バイかパトカーに制止を求められるに違いない。
　誰にも見られなかった。そんな偶然もないとは言えないが、かなり、確率の低い偶然なのだ。カメラが古かったという平成元年の水準でものを考えるのは、このマンションの中だけでしか通らない「常識」なのだ。

「何をしているんだい？」
　背後から声をかけられ、二人は振り返った。薄暗いので、年配の女性と言うことしかわからなかった。
「何年か前に、ご老人がクルマに轢かれて亡くなっていますよね」
「ああ……佐藤さんのおじいちゃんね。気の毒だったわねえ」
「ご存じなのですか？」
「ええ、古くからの住人で、退職金でマンションを買ったと言っていたわ」
「その佐藤さんなんですが、クルマを運転していたのですか？」
　高史は素朴な疑問を口にした。亡くなった佐藤耕介は認知症の入っていた八十二歳の老人だった。もしかしたら、認知症検査で運転免許を返上させられていた可能性があった。
「いいえ。それにクルマの運転なんてしてませんでしたわ」
「では、なぜ、佐藤さんは地下駐車場にいたのですかね？」
「ああ……本当だわ。なんでなんだろうね。あんたに言われるまで気がつかなかったわ」
　女性はそう言って、掌の上にグーでぽんと叩いた。合点がいった、そんな感じだった。
　でも、女性もそれ以上の情報はないらしく、お辞儀をして、二人にそこをどくよう言い、その前に停めてあったクルマに乗り込み、エンジンを掛けてどこかに出かけてしまった。
「中原くん。佐藤さんのおじいちゃんも呆けて駐車場をさまよっていたのかな？」
「可能性は低いと思いますよ。第一、クルマを持っていないことから、普段の生活圏ではないでしょう。生活圏でないところにさまよい出たりするでしょうか？」
「ふうん。それもそうねえ」
　静香は腕組みして考え込んだ。

（3）

（３）

午後の一時。高史は経済一部の経済ジャーナル編集部で、昼礼に出ていた。元々は朝一番に朝礼を行っていた時代もあったらしいのだが、高史は知らない。フレックスタイムの活用で各自がばらばらに出勤しているために、情報共有の機会だけは逃すまいと、全員が揃っている昼の一時にやっている「朝礼」の遅い版だ。

各自の記事作成の進捗状況を報告し、庶務から勤労課などからの連絡事項の申し渡しがあったり、編集長からの叱咤激励があったりする。ここのメンバーではない高史にとっては別に出ても出なくてもいい行事だったが、アシスタントをしている先輩記者の山浦が出ろと言うので、顔を出しているに過ぎない。

「.....で、マンションの件はどうなった？」

編集長の丸山が山浦に尋ねた。そんなに厳しい口調ではない。

「評判のいいフォルテッシモ麹町の近くの区画が買い占められている節があります。多少高くても、フォルテッシモ二番館としてなら売り抜けられるだろうという投機筋の動きがあるのと、許可申請が大分前に出されているのを確認済みです」

「二番館ねえ。一番館.....になるのかな。こっちは、バブル時代のスペックだろう？
二匹目のうなぎなんて狙えねえぞ。それとも、海外の投機家がメインか？」

「すみません。動きがありそうだと言うレベルで、記事にするにはまだ情報が少なすぎるんです。もう少し待ってください」

「ふん、そのうち、消えてしまうか、よそですっぱ抜かれるかどっちかになっちゃいかんぞ」

「はい」

昼礼の後、山浦は高史を喫煙室に誘った。高史はタバコなんか吸わないが、つきあえと言われたら行かざるを得ない。

編集部はライオン社ビルの三階を丸々占めており、喫煙室は中央階段の側の小部屋が当てられていた。昔は職場で吸っていたこともあるらしかった。しかし、社会的に禁煙の動きがある中、段々、喫煙スペースは小さくなっていき、そのうち、館内全スペース禁煙になるのではないかとも噂されている。

「ここだけはなくなりゃしねえよ。中原」

山浦はそううそぶき、ショートホープを一本口にくわえて、ライターで火をつけて煙を吸い込み、ふわあっと吐き出した。

「どうして、そう言い切れるんです？」
「社長が愛煙家だ。知らんのか？」
「え、そうだったんですか。だったらわたしも愛煙家になろうかな」
「無理しなくてもいいよ。一旦吸い始めると禁煙は苦痛だって言うぞ。そう言う俺もやめられやしない」
「そうみたいですね」
「ああ、マンションの件だ。やはり、近々でいいから、まとめなければ、編集長のフォローが厳しくなりそうだ」
　山浦はそう言い、タバコを灰皿に押しつけて消した。「ふぅ」と、ため息もついた。
　灰皿に残ったタバコくずを部屋の隅に置いてある容器に入れフタをすると、にっこりと微笑んだ。

　職場に戻ると、山浦はファイルを取り出した。
「多分、二番館は『一番館』とほぼ同等の建物になると予想される。土地の取引は日々なされているが、多分、『一番館』と少し距離を置いて近くになると思うんだ」
「でしょうね」
　高史は答えて、「一番館」の見取り図を広げた。竣工前に出されていた古いもので、これを元に各部屋物件が買われていったのだ。もっとも、自身でここに住もうと言う人は少数派だったと聞いたことがあった。バブル当時は高級な不動産を投機目的で購入し、そして、必ず値上がりするので、転売してその差額を儲けていたと言うことらしかった。現在、このマンションは一棟だけなので、「一番館」と呼んでいる人はいないし、正式名称ですらない。しかし、建設当時は本気で二番館、三番館という高級マンション（当時は億ションと呼ばれたこともあった）の増設が考えられていたらしかった。
　そして……つい最近も、「二番館」の建設計画が密かに動いているという情報をつかみ、高史たちが取材に動いていたのだ。
　買い手は、今度は日本人投機家ではなく、海外の投機筋だった。こちらは、将来的には日本に住むこともあるかも知れないが、取り敢えずの所は、部屋を押えておいて、日本に住む外国人・日本人に賃貸し、家賃収入で儲けようという人たちの動きがあった。
　現在、麹町の「一番館」周辺は商業ビルが一杯建っていた。多分……であるが、この近くの古くなったビルを何軒か買い取り、それらを合わせて大きな面積を確保し、そこに、「一番館」並か少し小さめの高層マンションを建てる構想があると踏んでいた。

「現在の一番館の構造はどうなっている？」
　山浦はファイルのページをあっちこっちにめくりながら高史に尋ねた。
「地下は三階で百九十台分の駐車場になっています。来客用は三台。地下三階の四分の一は電気室になっています。地上は一階がフロントと来客対応スペース。二階が娯楽室で卓球やバドミントンができる部屋になっています。カラオケルームもありますね。それと集会場もあります。三階から上が居住区画です」

「なるほどねえ」
「三階から三十階までは各十六部屋。三十一階から四十九階までは十部屋。最上階の五十階は四部屋という豪華な作りです」
「このマンションと同じくらいの規模で建設するとすると、どのくらいの土地が必要になる？」
「共用部分を合わせ、およそ百メートル四方の区画が必要だと思われます。付近の地図で言うとここいら当たりですかね」
　高史は麹町駅周辺の区画を指でなぞって言った。
「大規模マンションの建設許可申請はすでに出ている。が、外部にはその全貌は謎のままだ。それに、都の建設局に口利きした都議会議員の秘書がお亡くなりになっている。今のところ断片的な情報しかない。これらの点を線でつなぐにはまだ情報がいる」
「ですね」
　高史がそう答えると、山浦は指を口にやった。タバコを吸いたそうな素振りだった。喫煙室から戻ったばかりなのに、と、思ったが、もう、常習的なのだろう。もし、職場で吸えるなら、一日中、口にくわえているに違いないと思った。
「だから、今現在の状況を重ね合わせると、あそこ当たりにあるビルのうち何棟かはすでに買収されているか、その予定なんだ。そして、まだ営業している。外からはどれがそのビルなのかもよくわからないでいる。……あ、そうそう、一番館の駐車場で幽霊の目撃談があるらしいな。芸術写真のネタだろう？」
「あ……ああ。あれですか。あれはただの地下水が染み出てきた黒ずみです」
　高史は冷めた声で答えた。「亡くなった秘書の方って、遺体は千葉の海岸で上がったのですよね。殺人事件なのでは？」
「いや、遺書があったので、警察は自殺と判断しているみたいだ」
「遺書？」
「ああ、……都議会議員の先生に迷惑をかけたとか書いてあったらしい。陳情を自分の判断で勝手に処理したことで、ありもしない贈収賄疑惑となった責任を取った形だそうだ」
「そうなんですか」
「地元の不動産業者が都の建設局に申請した大規模マンションの許可をなるべく早く出して欲しい。これは人情だ。その議員でなくたって頼まれれば動いてくれるだろうね」
「そんなものですか？」
「政治家と言うのは不思議な人種だ。俺、つくづく思う」
「なんです？　　いきなり」
　高史は取材ノートの文字を追っていた視線をいきなり、山浦の目に向けた。
「驚くなよ。この仕事していると、色んなことに出会うんだ」
「と、言いますと？」
「結構私利私欲で動いている人が多いと言う印象なんだけど、実際の七割……いや、八割くらいは国家や社会のために働いているんだ。俺の個人的見解だ。信じられないかも知れないが、元々、政治家を志したのも、ある程度、社会的身分や資産があるにもかかわらず、もっと、社会の役に立ちたい。そんな考えで地方議員に立候補して自ら苦労を

買って出ているんだ。本当に金儲けがしたいなら、議員なんて、第三候補、いや、第四、第五候補の職業だ。そう思わないか？」
　山浦はまくし立てた。
「そう言われれば.....そうですねえ。だったら、マンションの建設許可に賄賂を取って役所の担当者に口利きなんてするはずがないと？」
「それがわからないんだ。もしかしたら、麹町に若い住民を引き込む、いいきっかけになると見込んで、賄賂なんかもらわなくても動いていたかも知れないし、逆に賄賂を示された時点で、怒って席を蹴った可能性がある」
「じゃあ、贈収賄はなかったと？」
「それもわからん。議員は純粋だから、席を蹴ったが、秘書が支持者からの陳情のひとつだと気を回して、議員の知らない所で動いたかも知れない。大概の贈収賄事件の真相なんて意外とそんなところで落ち着くんじゃないか？　　俺はそんな気がする。考えても見ろ。すでに、会社経営なんかで一応の社会的成功を収めた人ばかりの世界だ。ちんけな金額のカネで悪いことをすると思うか？　　俺は違うと思う。議員なんて一番しんどいボランティアのひとつだと思うよ」
「なるほど、何だか世の中の謎がひとつ解けた気がします」
　高史は何だか山浦の珍説に納得させられてしまった気がした。政治家なんて本性は悪い奴、カネに汚い、女にだらしがない奴の集まりだと思っていただけに、今まで生きてきて初めて承った見解だった。

４．調査

４．調査

（1）

（1）

　咲子は裕美果に誘われ、神田の古書店に来ていた。
　やっぱり、アンティーク同様、誰かの手を経てきたものは苦手であったのだが、ぜひともと、頼まれ誘いを断れなかったのだ。もちろん、今回も朋香には内緒である。
「ないわねえ。あっちの棚も見てみよ」
　裕美果が探していたのは、マンションが建つ前の町の概要がわかる地図だった。建築工事が始まったのは昭和六十二年だそうだったから、それより前の時代のものだったら、以前に何があったかわかるはずだった。
　咲子も裕美果の言わんとするところはわかった。気が乗らないのは、元来のアンティーク嫌いのためだった。指先の触れたものから、脳裏に、そこに込められた想念が浮かぶのだ。何人もの手を経てきた品物なら、悲しいものだけではなかったが、だからといって、楽しい作業ではなかったのだ。
　バッグの中のスマホからチャイムが聞こえた。
　手に取ってみると、朋香からメッセージが入っていた。――午後からお茶しない？
とあった。咲子は電話を掛けてみた。
「ごめん。今日はちょっと用事あって.....」
「何よ、誰かと一緒なの？」
「いや、まあ、そうなんだけど、誰かとは言えないの」
　咲子は正直にそのまま話した。
「あ、裕美果と一緒なんだ。あたしも行くよ。どうせ、山手線沿線でしょ？」
　勘のいい朋香には知られてしまった。咲子としては本橋と一緒なのだとは一言も言っていないから罪悪感はなかった。
「神田のね、古書店」
「ふうん、史学科みたいなことしているのね。古文書？」
「え、うちの大学でもそんなことしているの？」
「そうよ。文学部ならどこでもあるんじゃないかな。平安時代の古文書から昭和の文豪の手紙まで幅広く研究されているわよ。先輩が江戸時代の古文書を探しているみたいなの」
「ふうん」
　咲子は、朋香が部活動など何もしていないのに、「先輩」と呼ぶ人がいるのに、思わず笑いが出た。「先輩って？」
「ああ、放送部の人なの。史学科の三年生で江戸時代の武家屋敷の様子なんかを専門に研究しているみたい」

「ふうん」
「神田に着いたら、また、電話するよ。じゃあね！」
　元気な声で電話を切ってしまった。咲子は本橋の顔を見てふうっとため息をついた。
「ちょっと.....」
　本橋が手招きした。
「何でしょう？」
「ちょっと、あの怖そうな店主のおじさんに聞いてみてくれないかな。昭和六十二年頃の住宅地図がないか」
「えーっ、本橋さんが直接聞けばいいじゃないですか」
「あたし、あのタイプのおじいさんが苦手なの」
　――教授に似ているせいか？　　咲子は何となく想像がついた。彼女の必修科目を担当している老教授。彼の前では気の強い彼女がみんなの前でコテンパンにやっつけられてしまう。もう、苦手を通り越し、人間嫌いになってしまいそうなほど。咲子にだって苦手な人はいる。でも、逃げてていいのは高校生までだと思っている。大学生は大人なのだ。まあ、法律上はグレーな存在だが、世間一般では自分の意志でアルバイトもできるし、好きなことを思うがままにすることができる。それが認められているのは、大学生が「大人」の仲間だと思われているせいだ。ならば、ちゃんと、義務と責任を守らなければならない。

「いいですよ。はぁ〜」
　咲子はため息をつきながら、奥で文庫本を読んでいる店主らしきおじいさんに声を掛けに行った。
「あのー、すみません。麹町近辺の地理を調べているのですが、昭和六十二年頃の住宅地図ってないですか？」
　じろり、と、店主は老眼鏡を下にずらして咲子の姿を上から下まで睨め付けた。
「あの頃の住宅地図ねえ.....あったかな？」
　店主は立ち上がり、横の棚を調べはじめた。「うーん、ないねえ。昭和六十二年じゃないと駄目かい？　　お嬢ちゃん」
　お嬢ちゃんと呼ばれてしまい、少し、ムッとなった。まるで子供の使いみたいだった。本橋の姿を探すと、ここから見えない位置で本を探すフリをしている。
「他のだったらあるんですか？」
「ちょっと古いけど、昭和四十九年のならあるよ。他には.....ないねえ。ああ、品揃えが悪い訳じゃあないんだよ。少し前に不動産関係の人が買い漁って行ったんだ」
「あ、それでいいです。見せて下さい」
　咲子ははしごの上の店主から、古い住宅地図帳を受け取った。パラパラとめくると、確かに麹町近辺の地図が入っていた。
「本橋さーん！」
　咲子は本橋を呼んだ。彼女は見つかったのかと、ホッとした表情で歩いてきた。
「あったの？」

「はい」
「いくらですか？」
　本橋は聞き、バッグの中から財布を出してきた。

　住宅地図を買った後、二人は駅近くの喫茶店に入った。
　ここで、詳細を調べようと言う魂胆である。店は薄暗かったが、テーブルも落ち着いて調べ物が出来る椅子もあった。
「ホット二つね」
　と、本橋は近づいて来た高校生のアルバイトみたいなウェイトレスを追い払った。
「さてと……」
　見た所、現在の町並みとまるで違っていた。別の市町村の地図に麹町とタイトルを振ったみたく、面影がまるでなかった。どこが現在のどの位置に当たるのかそれすらわからない。
　そのとき、咲子のスマホがバッグの中で鳴り始めた。多分朋香が駅に着いたのだろう。咲子はスマホを手に取り、画面をタップした。
「朋香だよー。今どこにいるの？」
「えーと、駅前の喫茶店なんだけど、……名前はね。サン・アンド・ムーンって言う店」
「何となくわかると思う。今は裕美果ちゃんと一緒？」
「うん」
「じゃあ、すぐに行くわ」
　と言って電話が切れた。歩きながら場所を確かめるために電話を掛けたみたいで、三分もしないうちに、喫茶店の玄関ドアが開き、朋香が姿を現わした。

「ちょっと、咲子ちゃん！　朋香に喋ったの？」
「い、いいえ。わたしは何も言ってません。彼女が勝手に居場所を推測してついてきたんです。本当です」
「まあ、ちょっとは当たっているかな？　裕美果ちゃん、何やっているの？　あ、あのマンションの建つ前のこと？」
「もうっ、……朋香、あんたのお父さんには絶対喋らないでよ。それでなくても、筒抜けになっているんだから」
　と、本橋は少し立腹気味だった。
「わかったわよ。で、どこまで調べたの？」
　朋香はリスの様な目をくりくりさせて、興味深げに尋ねた。

　ウェイトレスがホットコーヒーを二つトレイに載せて持って来た。それを器用にちらかったテーブルの上にスペースを見つけて置いた。
「あ、あたしも同じもの頂戴」
　と、朋香が追加注文した。咲子は本橋がどう言うか、ちらりと彼女の目を見た。――自分の分は出しなさいよと言うかもと思ったが、静かにうなずくだけだった。どうやら、

三人分出してくれるみたいだった。
「地図ってね、基点があるみたいなの。古地図と現代の状態とは全く違っていたりするから、井戸とか交差点とか、お地蔵さんとかをポイントにするの」
「そんなもの、地図に載ってないわよ」
「だったらあ.....交番とか、病院とか」
「なるほど」
　咲子はため息をつく思いだった。明るいだけが取り柄の朋香にそんな知恵があろうとは思いもしなかった。交番と病院は昭和四十九年の地図にもあった。そこを重ね合わせて見ると、現在のマンション「フォルテッシモ麹町」の位置がわかった。Ｌ字型やＩ字型の複数の区画になっていて、それぞれが別の会社や商業施設になっていた。
「ふうん、会社があったんだね」
　と、朋香は無邪気な口調で言った。
「大西商会、戸田洋行、山下物産、カルガリー・コーポレーションに菊川文具。この会社の土地を合併してマンションか」と咲子がつぶやいた。
「いや、ちょっと待って、.....これは昭和四十九年の地図だから、その後に何か建った可能性もあるわ」
　本橋が異議を唱えた。確かに昭和四十九年から昭和六十二年まで、十三年の隙間があることになる。それほど長期間でもないが、何か建たないほどの短期間であるとも言えない。でも、もし、この会社で何かあったとするならば、地下駐車場の幽霊にも結びつくことがあるかも知れなかった。
「まあ、いいわ。今日はどうもありがとう。咲子ちゃん。.....それと朋香！　あたしが古い資料を調べていたことを家族の誰にも話さないでね。いいわね！」
「うん、いいよ。裕美果ちゃん」
　朋香がそう言っている間に、ウェイトレスが遅れて追加のコーヒーを持って来た。湯気が表面から立ち、ほのかにコーヒーのいい香りがした。

（２）

（２）

大学が始まった四月十日、咲子は二年生で履修する科目のオリエンテーションを受けた。今年度の前期科目の説明である。実際に受けるかどうかはこれから出す履修届で決められる。ほとんどが必修科目ばかりの本橋とは、この点が大きく異なっていた。咲子の受ける科目はほとんどが選択科目で、大枠は決まってはいたが、この中で何単位とればいいかが決まっているだけで、選択の自由度は極めて高い。

だから、レポートだけで単位をくれる教員の科目はある意味人気科目だった。「本当に」やりたいことが見つかるまでの「猶予期間」であるとほとんどの学生は考えているみたいだった。

「咲子もつきあいなよ」

と、朋香が誘ってくれた。

「どこいくの？」

咲子は深く考えることなく彼女と歩調を合わせた。

「まだ一個、決めていない科目があるのよ」

「ふうん、そうなんだ」

のんびりと答える咲子が置いてけぼりになりそうなスピードで、朋香は大股ですたすたと進んで行った。文学部の第三棟に入り、入り口の壁に掛かっていた行先案内板をちらりと横目で確認し、階段を早足で駆け上がると、廊下の真ん中くらいの部屋の前で立ち止まった。

「ふぅ、.....ここなの？」

咲子が聞くと、朋香はニッと笑みを漏らした。ここは史学科の教授の研究室だった。「日本史研究室」のプレートが出ていて、扉の枠の所に、責任者として教授の名前が掛かっていた。「竹山由隆」。

「たけやま.....何て読むんだろう？」

朋香が振り向いた。そして、あっと驚いた顔になった。咲子も振り向いたら、四十代半ばと思しき温厚そうな紳士が立っていた。

「ゆうりゅう」

と、彼は言った。

「えっ！」

咲子と朋香は同時に声を上げた。名前としては変わっている。

「冗談だよ。本当はユタカって読むんだ。初めてだと読めない人がいて困るんだ」

「あ、竹山教授でしたか？　　失礼しました！」

と、朋香はお辞儀した。咲子も釣られて頭を下げた。

「何か質問かい？」
「あ、いえ、……」
　朋香は言葉を濁した。まだ講義も始まっていない。一部の科目でオリエンテーションがあっただけで、今の段階で教授に質問など、一般的な学生ではまだいるはずがなかった。
「あの、文学部の新二年生なんですけど、日本史Ｉってどんな内容なんですか？」
「ああ、僕の専門は江戸時代の武家の家計なんだ。武芸の話じゃなくて算盤の話ね。そういったことを実際の武家の日記なんかの古文書から紐解いていくんだ。どうだい？　面白そうだろう？　履修してよ」
　――面白そうな内容だけど、このおじさんは胡散臭い。と咲子は思った。そう思えば、温厚そうに見せていた、団子っ鼻の下の口ひげも、少し怪しげに見えてくる。東都女子大教授と言う肩書きがなければ何をしているやらわからない人だった。
　横を見ると、朋香は楽しそうな笑顔を見せ、教授の機嫌を取り、そして部屋の中に入るのに成功していた。可愛い女の子は得だなと思った。
　咲子もついて中に入ると、大学院生と思しき学生と、ゼミ生らしい三、四年生が古文書や専門書を前に呻吟しているのが目についた。朋香は珍しいものを見るかのようにのぞき込んだ。
　教授が自分の席に行ってしまったのを横目で確認すると、朋香は一人の学生に話しかけた。
「吉田さん。お久しぶりです」
「ああ、……朋香ちゃんだっけ」
「ちょっと聞きたいことがあって来たんですよ。竹山先生の講義って、単位はもらえるんですか？」
「ぷっ、久しぶりに会ったかと思ったら、そんなこと聞きに来たんだ。おかしいわね。そりゃあ、真面目にやっていれば単位は自然と揃うものよ」
「そう言う意味じゃなくて、出欠とかレポートとか試験とか厳しいんですか？」
「ああ、そう言う意味では、レポート数回があって、最後に形だけの試験があるわ。真面目に出席していればわかるくらいの簡単な設問。でも、出席は取らないから、出ない学生には厳しいかも」
　咲子は二人の会話を聞いていて、朋香の人脈の広さに感心した。この先輩学生とどこで知り合ったのだろう。後で聞いておこうと思った。
「じゃあ、一緒に履修しようか。咲子？」
「え、ああ、うん」
　こんな感じで二年生前期の履修科目はほとんど決まっていた。確かに選ぶ科目によっては、半年間を棒に振る可能性もなきにしもあらずだ。難解なギリシア哲学の参考書をただ九十分棒読みの先生もいると聞く。そんな目に遭わなかったのは、単に幸運だっただけではない。朋香の「足で稼ぐ情報」に随分と助けられていたのは言うまでもなかった。

　隣の机に昔の地図が広げられていた。中央に「御城」とあり、「三つ葉葵」の紋が記されていたことから江戸時代のものと思われた。咲子はふらりと近づいて、側にいた学生

に尋ねた。
「これって東京のどこですか？」
「昔の江戸って今の東京のほんの一部だったの。他は山や田んぼばかり。お城を中心に武家屋敷が広がり、その周辺に商人の居住区画があったの。ここが番町で、その横が麹町。その横が.....」
「え、麹町？」
「何よ、素っ頓狂な声を上げて」
　と、朋香も割って入った。「そうそう、今の高層マンションの辺りってわかりますか？」
　そう言うと、ゼミの学生はキョトンとした顔をした。多分、彼女の研究テーマとは全く異なる質問だったのだろう。
「そのマンションの位置はわかるかしら？」
「もちろん.....あ、この地図でどこに当たるのかは、ちょっと」
　そこに竹山教授が近づいて来た。
「君たちパソコンは得意だろう？　　アプリで調べてごらん。緯度と経度がわかれば、ある程度まで絞り込めるよ」
「なるほど！」
　朋香は叫んだかと思うと、自分のスマホを取り出し、麹町の地図を表示させて、緯度と経度を調べた。そして、ゼミの学生が、パソコンに入力し、江戸時代の古地図と重ね合わせてくれた。
「松平家のお屋敷になっているわ」
「どこの誰かはわかるんですか？」
「この時代、番町が武家屋敷で、麹町は出入りの商人の町だったの。でも、ときたま、麹町に屋敷を持つ御武家もいたみたいよ。でも、旗本で、松平に水野、本多に酒井ってものすごく多いの。徳川家のご遠戚の松平家もあるし、そうでないのもあるし、でも、屋敷の面積から言っても相当大きな旗本だったとだけは言えそう」
「で、そのうちのどこの家柄かはわからないんですか？」
「古文書を紐解かないとわからないわ」
　徳川家の旗本は、三河出身で、家康公の関東移封で一緒に移動してきて、江戸時代は関東に屋敷を持ち、幕末の大政奉還後に、駿河に移封されたとき、また、一緒に移動している。だから、この広大な屋敷は江戸時代だけで、明治以降は薩摩・長州系の富裕層の屋敷になっているらしかった。

「松平家かぁ」
　と、朋香はつぶやいた。
　咲子は小さくため息をもらした。
「ちょっと、あなた」
　さっきの吉田というゼミ生が咲子に話しかけてきた。
「はい？」
「あなたは朋香の知り合い？」

「はい、そうです。附属中学からのつきあいです」
「そう……あなた、綺麗ね」
「え？」
　咲子は突然そんなことを上級生に言われ驚いた。
「あたし、放送部で制作もやっているの。もしよかったら見学に来ない？」
「あの……どうしてわたしなんですか？」
「ルックスもいいし、声も綺麗だし、リポーターかアナウンスに興味はないかな？」
「いや、そんなこと言われても……」
　咲子は今の今まで、綺麗と言われたりとか、ルックスを褒められたりしたことは一度たりとてなかった。母親は別にして。
「吉田さん。咲子は真面目なんだからからかわないで下さいよ」
　横から朋香が取りなした。
「からかったりなんかしていないわ。今、放送部は人材難なの。メインパーソナリティの子がのどを駄目にしてしまって、放送枠に穴が開きそうなの。でも、本人の意志が大事よね。もしよかったらでいいけど、放課後にでも、よってみて。文化部長屋の二階の端っこの部屋よ」
「はぁ」
　気のない返事に聞こえてしまったかも知れないが、今の咲子の気持ちと、相手への配慮を考えたギリギリの妥協だった。

（3）

（３）

高史は腕を組んで考え込んでいた。

静香から、麹町のマンションの幽霊話を持ちかけられ、たまたま、半日派遣先の経済ジャーナルで追いかけていた、現在建設計画が走っているマンションの二番館とも、情報が重なっていたからだ。いいネタは、元の所属の芸術写真に渡すべきだし、でも、出世のためには、経済ジャーナルを優先させた方がいいような感じもあったのだ。

「その、政治家の秘書の方が亡くなったって話の関連なの？」

静香は色白の顔を紅潮させて尋ねた。手元にはメモ帳を持っている。

「よくわからないんですよ。今建っている『フォルテッシモ麹町』の二番館と言うのがあって、ほぼ同じかそれ以上の仕様で建設し、投機家筋からの金を集めようと言う動きがあるらしいのですが、全貌が全く見えないのです。そもそも、二番館なんて建たないんじゃないかって話も出てくる始末です」

「それって、場所は？　麹町に余分な空き地なんてないわよ」

「そこなんです。ない所に作るのが地面師の仕事だそうで.....」

「それで、秘書の人との関わりは？」

「まず、土地を買うには、マンションの建設が大前提です。でないと、資金も借りられないし、土地のオーナーも売ったりしないでしょう」

「それはそうよね。で？」

「だから、誰かが認可状を出した。.....都議会の建設委員会が動いたのか。それで、周りの土地の買収をはじめたらしいぞ、って、所なんですが、情報が全て伝聞なんです」

「『フォルテッシモ麹町』の建設時はどうだったの？」

「ふうむ.....」

高史は腕を組んで天井を見上げた。「だから、その認可が味噌なんですよ。認可を得る裏工作の真っ最中に秘書の方が遺体で見つかったんです。警察は自殺の線で落ち着いたらしいです」

「何か、違った意味で恐ろしいわね。認可を得るには土地を買収して建設可能な状態にしておかなければならない。土地を買収するには、認可が必要って、堂々巡りじゃない？」

「もしかしたら、もうすでに、買収が完了しているんじゃないか？　そういう意見もありました」

「ふうん」

珍しく彼女はそれ以上追求してこなかった。彼女は彼女なりの情報人脈を持っている。決してあなどれない存在だった。

昼前に高史はライオン社ビルを出た。
行先は文部科学省のビル内にある文化庁だった。初めて訪れる場所だった。ライオン社に入社して以来、経済誌時代を通じて経済産業省には行ったことがあったが、文化関係には全く縁がなかったと言っていい。
入り口にあった内線電話で友人の袖岡俊介を呼び出してもらった。
彼は、東都大学法学部出身で、在学中に公務員試験に通り、文部科学省に配属になっていた。高史とはコンパサークルで知り合い、ここ数年は会ったことがないが、それでも、久しぶりに顔を合わせれば、気持ちは学生時代に立ち戻るものだ。
「よお、中原。久しぶりじゃないか」
多少年を取ったが、それでも、昔なじみらしく声をかけてくれた。
「今は文化財保護課にいると聞いて、少し相談に乗って欲しくて来たんだ」
「ふうん。経済誌に勤めていると聞いていたが、文化財ねえ。参考になればいいんだが」
「そう言うなよ。もう偉くなっているんだろう？　こっちはパッとしない雑誌記者だが」
「まだ、係長補佐だよ。中々、宮仕えも大変だぜ。もっとも本物の宮様の相手したりもするんだ。あれは面白かったな」
「へぇ。すごいな」
「古文書係だから、文化財相当の文書があれば、見せてもらって、写真コピーするんだ。今度、そのデータベース化の案件があってね。.....ああ、ゆっくり話そうか。お茶を淹れるよ」
「ああ、お構いなく」
彼はロビー脇にある、衝立の並んだ中にあるイスを進め、奥の部屋に戻って行った。そして、しばらくして出て来た。手にはタブレットを持っていた。
「もう、今では何でもこれだよ」
彼はそう言い、タブレットをポンポンと掌で叩いた。
「時代の移り変わりが激しいな。古文書って何を扱っているんだ？」
「公家の日記とか、大名家の日誌とかあるだろう。あれを詳細に調べるんだが、量が多くて追っつかない。それで、大勢の力を借りるために電子データにしているんだ。そうすると、ネット経由で調べてくれる人がいたり、あるいは、過ちを指摘してくれたりするんだ。便利な世の中になったもんだよ。昔だったら、大学図書館とか、国会図書館の古文書スペースに許可をもらって入らなければ手にすることも出来なかったんだぜ」
「へぇ、すごいな」
高史は素朴な感想を漏らした。「それで、昔何があったかを調べているんだけど、麹町に立っている高層マンションの出自を知りたいんだ」
「マンション？　おいおい、うちは古文書係だぜ。東京ならせいぜい、鎌倉時代から江戸時代末期までだ。それから先は.....そうだな。国土地理院が地図をまとめているんじゃないかな」
袖岡が投げ出しそうな口調で答えた。
「それでいいよ。武家屋敷が番町にあって、その外側の麹町って商人の町だろう？」
「完全に区切られていた訳ではないみたいだよ。麹町にもいくつか旗本屋敷があった」
「武家屋敷がやっぱりあったんだ。『番町皿屋敷』みたいな記録って出てこないかな」

「あれって、創作話だろう？　まあいいや、マンションの現在の町名と番地はわかるか？
それにしても、俺も暇だな。文科省に戻るまではこんな感じかも知れないな」
袖岡はそう言って、自嘲した。何となく肩から背中にかけて、寂しそうなオーラがつきまとっている、そんな感じがした。公務員試験を通って省庁に配属されたら、あちこち、転属を繰り返しながら出世していく。高史も大学三年で単位が揃ったとき、受験することも考えたことがあった。その足枷となったのが、多分、局長クラスまで上がって行くのだろうが、そこに至るまでの転属や休職派遣の行程だった。そのときは、自分は、一所に留まり、ひとつのことに専念する方が向いていると思ったのだ。官僚は専門家《スペシャリスト》ではなく、ジェネラリストであることが求められる。何にでも精通していなければならないのだ。
そう考えたとき、民間企業への就職を決断した。東京本社だけの構成となっているライオン社なら、他府県への異動はないに等しい。もっとも、子会社をいくつか持っていて、そこへの休職派遣ならばあり得た。今となっては浅はかだったと、多少の後悔はあるのだが。

目の前で袖岡はタブレットを指先で操作して、「フォルテッシモ麹町」のあるM丁目N番地の位置を検索してくれていた。江戸時代中期の古地図の上に赤い点で示された。
「多分旗本だろうね。松平家の屋敷がある。規模から言うと、大身だと思う。二千石から三千石くらいだろう」
「旗本？」
「うーん、徳川家の家臣で、松平というと、ご親戚か、近しい血筋かどちらかが多いんだが、この地図だけでは不明だよ。……松平に水野、本多に大久保って旗本では多いんだよね」
「調べられない？」
「出来なくはないと思うよ。このデータベースにＩＤを登録してくれたら、古文書は読み放題だ。ただ、文字ではなく画像データなので、題名以外では検索が出来ないのが玉に傷なんだ」
と、袖岡はこのシステムのＰＲをし始めた。利用は多分無料だと思うのだが、文化庁が運営する以上、一定規模以上の利用者がないと示しがつかないのだろう。

高史は、大学生のアルバイトを何人か雇って、しらみつぶしに江戸時代の日記や日誌を調べさせようかと思いついた。ただ、そんなことに予算を割いてもらえるか、それだけが懸念事項だった。芸術写真はあくまでもオカルト雑誌だった。心霊現象なら受け付けてもらえそうだが、古文書の解読とくれば……静香の渋そうな顔が頭に思い浮かんだ。
「その松平公が誰なのか、わからないかな？」
「悪いな。古文書のデータベースと古地図の名前とは紐付けられてはいないんだよ。古文書の方を地道に当たるしかないと思う。具体的には松平と名のつく旗本で、二千五百石くらいの身分の家の日記や日誌を紐解いていかなければならん。日記の中に麹町とあれ

ば、多分それが正解だ」
「その日記ってどのくらいの数が入っているんだよ？」
「ううむ。万は下るまい」
「あちゃー」
　高史は額の汗をぬぐった。

（４）

（4）

午後二時、水野宗佑は柳生ヒカルから封筒を受け取った。前から千葉県警に依頼していた政治家秘書の検死報告書だった。海岸に打ち上げられた遺体からすぐに溺死となっていた。然らば、自殺か他殺か、はたまた事故か？　様々な憶測を経て、家族の証言が決め手となった。――最近、勤務時間が長く、不規則になり、ノイローゼ気味になっていたと父親が語ったのだ。過酷な労働でうつ病を発症して入水自殺したものと判ぜられた。

「なるほどねえ」

「水野さんはどう思います？」

柳生は少し垂れ目気味の瞳をくりっとさせて、水野の顔をのぞき込んだ。

「遺体はもう火葬に付されたんだよな？」

「そうですね。事件性もないことだし、もう、一ヶ月以上経ってますものね.....って、人の話を聞いているんですか？」

水野は柳生の話を途中で遮り、遺体の発見地の管轄である千葉県警銚子警察署の鑑識課に電話を掛けた。主任と名乗る男が電話口に出て来た。

「わざわざ電話を掛けてきたと思ったら、こっちの見立てに文句をつけようと言うのですか？」

「申し訳ない。念のためです」

水野は内心腹立たしく思いながらも、一応詫びの言葉を挟んでおいた。

「ご遺体は田倉美千代さん、四十三歳。東京都議会議員茂原《もばら》繁氏の政策秘書をしておられた。死因は溺死です」

「その.....溺死と言うのには同意見なのですが、検視のときに肺か胃袋から溺れたときの水を採取していないですかね？」

「はあ？　水ぅ？」

「そうです。そのときの水です。彼女が本当に銚子の海で溺れたのか、別の場所で溺れてその後に流れてきたのが打ち上げられたのか。その辺が少しモヤモヤしていましてね」

「溺死と決まればそれ以上の検査は行いませんよ」

「そこを何とか.....調べてもらえないですか？」

「仏さんは自殺ですよ。これは、刑事課でも間違いないと断定しています。それに.....」

「それに？」

「ああ、失礼。これ以上は話せないんです。特捜が絡んでいまして。とだけ、言っておきます」

東京地検特捜部。政治家の汚職などの、警察署の刑事課なんかでは扱えない事案を扱う組織だ。そこが動いている？　そういうことだったのか。水野は丁寧に礼を言い、受話器を置いた。

「やっぱり事件性があるんですか？」
　柳生が尋ねた。
「ありありだ。元々、マンションの建設に政治家への陳情が絡んでいたんだ。どこかで、贈収賄があってもおかしくはない。それで、特捜が動き出したんだろう」
「えーっ、秘書の方、殺されたんですか？」
「わからない。そのために、所轄の鑑識に聞いてみたんだ。もし、無理矢理顔を水につけられて殺されたなら、肺や胃から水道水か風呂場の水か何かが出てくるはずだ。父親の供述通り、うつ病を患っての海に飛び込んでの自殺なら、海水だけだろう。肝心の情報は得られなかった」

　背後に気配を感じ、咄嗟に振り向いた。
「水野っ！　特捜が絡んでいる事案に首をつっこんでいるんですって？」
　今日も佐々木は不機嫌そうな顔で呼び捨てにした。
「自分は、マンションでの一連の事故・事件の一環と考えています。目的は絞り込めていませんが、この秘書の女性も自殺とも他殺とも判じきれない死に方をしている点では一致しています。政治家の秘書だから、地検特捜部が動いているのもわかりますが.....」
「わかってんなら、即刻この件からは手を引くこと。あんただけじゃなく、課長や署長にも迷惑がかかるんだからね！」
「わかりました。しかし、.....手を引くのは秘書の件だけですよね？　他の事案は今後も追い続けます」
「いいわ。今のところはね」
　そう言って、佐々木は後ろを見せて手のひらを、ひらひらさせながら、班長席に戻って行った。彼女の抱えている案件は水野たちの何十倍もある。こんな小さな案件にかかりきりになれるのも平刑事のうちだけだろうなと複雑な思いで彼女の後ろ姿を見つめた。

　午後三時を過ぎ、水野は柳生に引き続き、マンションを巡る一連の事故死案件を調べさせ、自分はイスに掛けていたスーツの上着を持ち、麹町東署を出た。行先は千代田区霞が関一丁目にある合同庁舎６号館Ａ棟である。東京地方検察庁そのものであった。
　入り口の前で水野はネクタイをキュッと締め直し、スーツの裾のホコリを払った。
　ロビーにあった内線電話を手に取り、担当検事の磯崎亘の名前を探して掛けてみた。
「亡くなった田倉美千代の親族なんです。亡くなったときの様子を聞きたくて、警察署にも行ったのですが、すでに、事案は検察庁に移ったと聞かされてやってきました。お忙しいところ誠に申し訳ないです」
　水野がそう言うと、電話の向こうで、急に態度の変わる感じがした。犯人と被害者遺族との取り扱いの違いは警察でも一緒だ。磯崎は玄関ロビーまで出て来てくれた。
「美千代とはいとこだったのですが、バリバリ働いていて、尊敬していたんです。自殺だなんて信じられなくて」
「そうですか。このたびは残念なことになり、心からお悔やみ申し上げます。わかる範囲

でお答えできればと思います。検察官室にどうぞ」
「恐れ入ります」
　水野はまんまと中に入ることができた。
「それで.....自殺ではないと言う根拠は？」
　磯崎は水野に席を勧めながら尋ねた。
「仕事にも家庭にも問題はなく、その.....うつ病と言うのですか？　精神を患うような状況ではなかったのです」
　水野は適当に今ある情報を切り貼りするかのように述べた。
「精神状態。.....こればかりは、他人にはわからないものですよ。でも、捜査結果に少し疑念を抱いた点があるんですよ。田倉さんは海で溺死しています。もっとも、海岸から飛び込んだのか、川に飛び込んだ後で海まで流されたのか、それは、今となってはもうわかりません。ですが、田倉さんの肺から、少量の淡水が出て来ました。それに.....大学の鑑定ではマツカサ貝、ドブ貝、カラス貝の幼生.....いわゆるプランクトンですね。それが検出されたのです。いずれも淡水の生物です」
　――やはり、肺の水は採取されていたのだ。大学で再鑑定もされている。水野は身を乗り出した。
「まあでも、こればっかりは立証できなければ何にもなりません。それに、犯人が誰なのか？　仕事絡みの線なのか、恋愛絡みの怨恨なのか、金銭トラブルあらゆる線を想定しています」
　磯崎は自信満々にそう言い切った。――どのみち、もう、特捜が動いているのだ。政治家絡みの線でほぼ間違いはないのだろう。彼女のボスである茂原は都議会の建設委員会の重鎮だ。あのマンションの二号館の建設にも関わっている可能性も否定はできない。
　――水野さん？
「水野さん？」
「あ、ああ、少し考え事をしてしまいました。ちなみに彼女の死に顔はどんなでしたか？」
　一応親族を装って訪れたのだ。それなりの質問でお茶を濁した。こんなとき、捜査官なら、決してむごたらしい死に様だったとは口が裂けても言わないものだ。彼も「穏やかなものでしたよ」と嘘をついた。

５．編集部

5．編集部

（1）

（１）

四月十一日、朝、咲子が一人で朝食のトーストを食べていると、テーブルの上のスマホが軽く振動した。誰かからのメールかメッセージだった。食べかけのトーストを皿の上に置き、スマホを手に取った。

兄からだった。

「どうしたの？」

咲子は通話ボタンをタップして尋ねた。

「すまん。俺の部屋の机の上に、封筒があるんだが、見てきてくれないか」

「あ、いいよ」

咲子は食事は中断して二階の兄の部屋をのぞいた。きれいに整頓されていた。机の上には茶封筒があり、紐で綴じられていた。「この茶封筒かな？」

咲子がつぶやくと、兄は焦った声で頼み事をした。

「大学が終わってからでいいから、会社に持って来てくれないか。昼からだったら、俺はいないから、佐伯さんに渡して欲しいんだ」

「うんいいよ。今日は午後からの講義はないから、昼一で持って行くね」

「すまない。この埋め合わせは何かするからな」

「ええ、いいよ。そんなこと」

「すまん。じゃあな」

「うん」

咲子は返事してスマホのボタンをタップして通話を終了させた。

時計を見て、慌てて食事の残りを片付け、戸締まりすると、鞄を持って家を飛び出した。

講義は午前中で終わり、朋香と学食でランチを食べた後、彼女とはそこで別れ、咲子はＪＲ中央線に乗り込んだ。

ライオン社は新宿駅の西口から歩いて十五分ほどの所に自社ビルがあった。これまでにも、何回か、兄への届け物をしたことがあったから、道順は慣れていた。違うのは職場だった。会社に入った頃は「経済ジャーナル」という一流経済誌の編集部にいたのが、今では心霊写真を扱っている変な月刊誌の編集部だった。人数も格段に少なかった。知っている顔の佐伯静香を含めて五人ほどの職場だった。

一階西側にあり、扉を開けると、数人が仕事をしていた。邪魔にならないよう、そおっと、中に入り、佐伯静香の姿を探した。

　背中を丸め、パソコンに向かって原稿を打ち込んでいる三十歳くらいの女性がいた。髪はショートカットで、耳には赤鉛筆を挟んでいた。
「静香さん？」
　咲子は小さな声で話しかけた。
「え、わ。びっくりした。咲子ちゃん？　　いつからいたの？」
　色白の肌に、くりっとした真っ黒な瞳をしていた。驚いたのは本気みたいだった。それほど、作業に集中していたのだろう。
「さっき来た所なんです。えーと.....」
　咲子は鞄の中を手で探り、兄が忘れていった封筒を取り出し、彼女に手渡した。これで任務は完了だ。
「あら、これを届けにわざわざ来てくれたの？」
「はい」
「何か悪いわねえ。待ってて、今、コーヒーを入れるから」
　そう言って、この部屋の隅にある流し台の所に行き、コーヒーメーカーのポットから紙コップにコーヒーを注ぐのが見えた。プラスチック製の紙コップホルダーに入れて、持って来てくれた。
「どうも、ありがとうございます」
「いいのよ。元はと言えば、中原くんが締切り日に原稿を家に置き忘れたのが悪いんだから」
「え、そうだったんですか？　　すみませんでした」
「咲子ちゃんが謝ることないじゃない。って、兄妹だったわね。ごめん」
「あの、何をなさっているんですか？」
　咲子はパソコンの画面を見ながら尋ねた。何やら容量の大きなＰＤＦファイルを開いて、中身を確認しているみたいだった。
「ああ、これ？　　中原くんが情報を仕入れて来たみたいなの。古文書のデータベースなんですって。文化庁に友達がいるみたい」
「へぇ、これって読めるんですか？」
「えへへ、残念ながら、読めないわ。崩し字だし、何が書いてあるのかは、さっぱり。でも、題名だけは、検索出来るの。だから、関係ありそうなものだけ、引っ張り出して、後は、文学部の学生さんにアルバイトを頼もうかと思っているのよ。誰か知らない？」
「あ、ああ、うちの大学の史学科でも古文書を読み込んだりしているみたいです。わたしは、さっぱりですが。お習字をやっている方でも崩し字は読めるそうですね」
「へえ、そうなんだ。あたしは、そう言った教養にはとんと疎くて」
「そんなことないです。静香さんの行動力はそこいらの人には負けないと思います」
「ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

　咲子は彼女が入れてくれたコーヒーを一口飲んだ。大分煮詰まってはいたが、豆はいいものを使っているみたいだった。ほのかにいい香りがした。画面を見ると、「松平家」という文字が見えた。
「あの、これって、どこのデータベースなんですか？」

「おや、興味が湧いた？」
「わたしも、ちょっと、調べ物をしていて、江戸時代の古文書でつっかえているんです」
「文化庁のよ。誰でもアクセス出来るみたい」
「文化庁？」
　咲子はメモ帳を取り出し、ボールペンで書き込んだ。覚えておいて後で、自宅か大学のパソコンで調べて見ようと思った。

「中原くんは何か言っているの？　おうちで」
　静香は後ろのデスクに腰を掛けながら、腕を組んでいた。
「何のことですか？」
「ほら、半日派遣という、変な職務形態を取らされていることについて」
「ああ、……特に文句はないみたいですよ。経済ジャーナルは慣れているので、そんなに負担はないみたいです。……でも、そのせいで、芸術写真の仕事が半日しか出来ないことで少し罪悪感めいたものはあるみたいです。あ、兄は何にも言ってないですが」
「やっぱり、そうよね。あたしだったら、多分耐えられないかも。転職とか考えちゃう？」
「でも、慣例では三ヶ月を超えての派遣はないそうで」
「それはそうなんだけどね。何か納得が行かないのよ。逆の立場で考えてみてよ。経済ジャーナルの一流の記者が三ヶ月だけだからって、芸術写真の業務が出来る？」
「あはは、まあ、そうですよね」
　それを考えれば、三年前に経済ジャーナル編集部から芸術写真に配置転換を命じられたときの兄の気持ちがどんなだったか、咲子にも薄々想像はついていた。屈辱的な異動だっただろう。でも、そのときは会社に辞表を叩きつけることは出来なかったのだ。まだ、中学生だった咲子という妹が家にいて、面倒を見なければならなかった。――自分のせいだ。咲子は普段は忘れていた罪悪感にとらわれた。
　兄は、学生は勉強をしっかりすることだけが本分だと常日頃から咲子には言ってくれていた。だからこそ、敢えて学業に専念しているのだ。実際、心は苦しい。自分のために、大切な兄が不本意な仕事に従事している。いつまで続くのだろう。兄も苦しいかも知れないが、咲子だって、兄の負担になっているのは苦しいと感じる年齢なって久しい。大学を卒業するまで？　就職して一人前になるまで？　それとも、お嫁さんになって家を出るまで？　もしかしたら、一生この状態が続くのではないか。そんな錯覚にすら陥ることがある。
「あのさ、ここの職場って、編集長とあたしを入れて全部で五人しかいないのよ。うち一人はＤＴＰと言って、誌面の編集専門だから、記者は三人しかいないの。そのうちの一人がよそに引き抜かれる。戦力としては三割よ！　三割。もし、あなたがグーなしでじゃんけんやってみろって言われて勝てる自信はある？　勝てないわよね。ふっ」
「すみません」
「ああ、いや、中原くんのせいじゃないから。会社の制度が問題なのよね。もし、咲子ちゃんが総合職でこの会社に入ったら、うんと偉くなって現場の人間が困らないように制度設計を改革してほしいの」

「あ、いや。……でも」

　まだ大学二年生になったばかりで、将来のビジョンなど描いてもいなかった。でも、来年になれば、企業へのインターンシップがあるし、そのときには、将来つきそうな仕事を選んで体験入社の行先を選ばなければならない。要領のいい人は、そのときに、内定に繋がるようツバをつけておくと言う。自分の性格的には、大企業の総合職などとんでもないと思った。

　通っている東都女子大は良妻賢母教育と自立した女性像という一見反対の概念をうまく教育制度に織り込んでいた。だから、専業主婦でも企業の管理職でも勤まるようにと、うまく、学生の自立心を育ててくれていた。

　咲子自身は、大勢の部下を管理するなど、性格的に向いていないと思っている。どちらかというと、スーパーの商品管理やレジなど、細々とした作業がいいなというタイプである。今もこうして、兄が抜けたせいで忙しくなったのを毒づく静香を前に、一言も兄をかばう言葉すら出なかった。

「すみません」

　咲子の口からはこれしか出てこなかった。

「あ、いいの。ただの愚痴だから、気にしないで。ね？」

　静香はそう言って泣きそうな顔の咲子を励ました。

（２）

（２）

高史は午後から始まる経済ジャーナルの各グループで行われている「昼礼」に出席していた。　各員が取材中の案件の進捗状況や、足で稼いだニュースなど、バラバラに動いていたのでは聞きそびれて二重手間になる様な情報を一分くらいの持ち時間で発表していた。

昼礼の後、高史は山浦に誘われ、喫煙ルームに来ていた。
高史はタバコなど吸わないが、おつきあいとあれば致し方なかった。上着にタバコ臭がつくだけのことだ。
「よう、中原。あんなミーティングに価値があると思うか？」
山浦はそう言い、煙をふうっと吐いた。
「ええ？」
――一体何を言い出すのかと思った。
「だってそうだろう？　情報の共有とか謳ってはいるが、実際は当たり障りのないものばかりだ。それに、これがあるばかりに、昼一は編集部にいなきゃならない」
「皆さんが発表している情報に問題があるのですか？」
「情報はパズルみたいなもんだ。ピースを並べていき、全部揃った時点で絵が出来上がる。これは事実だ」
「そうですね。芸術写真でもそうですよ」
「だから、他人の絵でも、自分が持っているピースが当てはまれば、そこで、その案件はいただきなんだ。だから、自分しか知らないピースは誰も出さない。みんなが知っていることしか喋らない。従って、あの時間に価値はない。価値のないミーティングに出るなんて、時間つぶし以外の何者でもないってことだ」
山浦はそう言って、ふうっと煙を吹き出した。

かつて、高史がいた頃は、昼礼の習慣はなかった様に思う。その代りに朝礼があった。朝九時にある十分ほどのミーティングだった。確かに、共有すべき情報の伝達だけで、各自が取り組んでいる案件の詳細までは喋ることはなかったと記憶していた。
そして、当時は他人の案件をいただこうなんて、いやらしい習慣もなかった。
「俺、前にやられたんだ。一度だけ」
山浦はそうつぶやいた。
「記事を持って行かれたってことですか？」

「ああ、……そして学習したのは俺だけじゃない。他の全員が学習し、貴重なピースを他人に差し出す奴はいなくなった」

寂しい話であった。でも、だからこそ、編集部ではなく、隅っこの喫煙ルームでこんな話を持ち出したのかも知れなかった。

「山浦さん。麹町のマンションの件ですが、一号館が建ったとき、五つの区画が合併して、再登記されいたじゃないですか」

「ああ」

「江戸時代の古地図を調べると二千石クラスの旗本屋敷なんです」

「ああん？」

「江戸時代の屋敷と、明治・大正・昭和時代の経緯は全く不明ですが、別物でもなかったみたいなんです」

「ふうん……」

山浦はタバコを灰皿に押しつけて火を消し、その手であごをこすった。「その情報《ピース》は中原にとって、重要なピースなのか？」

「は？」

「お前さんも、いつまでも、一階西側でくすぶっている訳でもあるまい。ここで特ダネを挙げて、三階に戻ってくるって手もあるんだぜ」

高史は、そう言われ、考え込んでしまった。それは三年前に芸術写真編集部に異動させられたときには、ショックで食べ物ものどを通らないくらいになってしまったが、あのときは、妹のことがまず第一であり、会社側から行けと言われれば、例えライオンの檻の中にでも行く覚悟だった。

でも、咲子の大学受験もうまく行き、後は、来年か再来年に就職が決まれば、もう、高史の手を離れたと言っても過言ではなかった。最悪の場合でも、何も今のライオン社にしがみついている必要もない。フリーの記者でも編集者でも、あるいは、他社への転職も考えないでもなかった。

その時に必要なのは、記者か編集者としての実績だ。

スクープ記事をひっさげ、華々しく登場するのも悪くないではないか。いや、それ以前に、経済ジャーナルに戻ってくるという選択肢もあり得た。残業や長期出張をバリバリこなし、ここでは普通に過ごしているだけで、まだ、将来への希望もあるのだ。

「このマンションの許可申請の裏で動いている政治と金の問題。それを東京地検特捜部よりも早く挙げること？」

「そうすりゃ、お前さんの株も上がるだろうな。でも、山は険しいぜ。二番館の情報は影しか見えないんだ」

「そうですよね……一番館は過去のスキャンダル。二番館は水面下で動いている現在進行形のスキャンダル」

「そう……過去も過去。すでに三十年前の大昔だ。今さらつついたところで、何も出て来やしない」

「そうでしょうか？」

「何か疑問でもあるのか？」

「ああ、いえ。……そうですね」

　高史が肯定の台詞を吐き出すと、山浦の目は覚悟を試すかの様に光った。
「中原は詰めるときはどうやって考えを進めるんだ？」
「詰め？」
「王手を掛ける瞬間があるだろう？　　ないのか？」
「ああ」
　そう言えば、山浦は将棋が趣味で、昼休みは窓際に将棋盤を出して、年配の記者や編集者とお金を掛けて駒を進めていた。
「あれは、掛け将棋と言っても、タバコ代くらいのもんだ。社内の倫理規定にはひっかからんさ。まず、情報が入るだろう。俺は、ポストイットに書き込んで将棋盤に貼り付けて行くんだ。もちろん、全ての情報が正しいとは限らない。重要な事案ほど、ガセネタも多いもんだ。途中でガセとわかったり、前後の情報と食い違うときは、剥がして捨てる。最終局面になると、自然と全体像が明らかになる。王手の瞬間だ。お前もやってみろよ。仕事は楽しくないとな。やっていけないぞ」
　彼はそんなことを言ったが、将棋好きでなければ、ついて行けないと思った。
「はぁ。なるほど」
「効率が悪いと思うんだろう？」
「あ、いえ」
「そう顔に書いてある。でも、今までの経験では、真実が向こうから、『どうぞぉ』なんて、やってくるなんてことはあり得ない。何も情報がない中をもがいて進むか、ガセネタの中から見つけ出すかだ。だから、最後の最後で他人に掠われると腹が立つんだ」
「では、わたしはこの事案に集中してもいいんですね？」
「それは、編集長の腹づもりひとつだ。でも、俺のサポート全般と言うことでお前のことは任されている。だから、多分、いいと思う。やってみな」
「はいっ」
　自分でも不思議なくらいいい返事が出たと思った。この部署への応援派遣は三ヶ月だ。幸い、麹町のマンションのことは、芸術写真でも追いかけている。何か形のあるものにして、アウトプットをここに残せなくても、いや、残さなければ、高史のことを高く買っている山浦にも申し訳が立たないと言うものだ。そして、最悪でも芸術写真での記事にすることも視野に入れていた。

（3）

（３）

午後六時半を回った頃、高史は一階西側にある芸術写真編集部に戻った。

書類の受け箱を見ると、処理の必要な書類と、回覧物の類が一緒くたになり、山を作っていた。ふうっと、ため息が漏れた。目を通すだけでも一時間くらいはつぶれそうだった。この点、経済ジャーナルでは、個人のスマホへの一斉メールなどで、なるべく回覧物などは少なくする工夫をしている。ただ、あちらが、総員四十名の大所帯なのに対して、芸術写真は高史を入れて五名のこぢんまりした部署だった。普通に席にいれば、回覧物などそう問題にならない存在だ。

ぴくりと、眉が動いた。

朝方、咲子に頼んで持って来てもらった記事が、かなりの量の朱が入り、返却されていたのだ。

「中原くん、最近、戻ってくるのが遅いんじゃなくて？」

静香がそんなことを言った。言いがかりもいい所だった。

「いつもと一緒ですよ。これでも、なるべく早く、向こうの仕事は切り上げる様にしているんですから」

と、嘘をついた。「……ああ、これ？」

「あたしはいいと思ったんだけど、編集長に却下されちゃった。何でも故人の名誉にもう少し配慮すべきだと言っていたわ」

マンションでの事故を記事にした物だった。それなりに、気を使ったつもりだったが、甘かったみたいだ。

「『死に様』がまずかったんでしょうかね？」

「よくわかんない。森野さんも気まぐれな所があるからね。もう一回出したら通るかも」

彼女は無責任そうな口ぶりで編集長の森野のことを評した。高史としては、そうは思っていない。すべてが緻密な計算の上に描かれている機械製品の図面の様だと思っていた。だから、朱を入れられた箇所を分析すれば、彼の言いたかった、こだわった部分が自ずと明らかになるはずだ。

「回覧は、しょうもないやつばっかだったわ。チェックだけ入れて次に回しておくといいわ。仕事には関係ないものばかり」

それでも、何かあるから回覧にしているのだろう。やはり、一応、目を通しておいた方がいいと思う。

高史は、流しの所にあるコーヒーメーカーのポットから自分のマグカップに注ぎ、そのまま自分の席に戻り、ちびちびと飲みながら、書類整理を始めた。確かに、目を通すのは時間の無駄だと言う静香の意見に一理があった。健康組合の健康器具、食品の斡旋の

案内。労働組合の集会の期日の案内。高史は全部見る気もなくなり、名前の欄にチェックを入れて、隣の課への配送箱に放り込んだ。

「それから、中原くん」
「何です？」
「嫌そうな顔しないの。七時から光雲先生がいらっしゃるから」
　高史は嫌そうな顔をしたつもりはなかった。午後からずっと経済ジャーナルに詰めていて、緊張が解けたので疲労感が出て来たせいかも知れなかった。ただし、契約霊能力者である高山光雲のことは嫌いであった。
　心霊写真がメインと言っていい芸術写真で、その鑑定をやってもらうには、それなりに名の通った霊能力者の存在が必要不可欠だった。もっとも、名の通ったと言っても、ニッチな業界である。この業界の中で名が通っていればそれでよかった面もある。
　心霊写真を前にして、適切な解釈を与え、除霊なり浄霊なりしてもらう。それが可能な人となると、いくら世界広しと言えど、そんなにあちこちにいる訳ではなかった。
　実際、高史が配属されるずっと前に、編集長の森野や静香たちが何人かの霊能力者に会い、それなりの能力を認めた上で、ギャラも適切であった彼と、専属契約を結んだそうだった。
　――七時というと残業になる。
　もちろん、サービス残業であることは知れたことだった。ふうっと、ため息をつきたい気分だった。
　高史が腕時計を見ると、まだしばらく時間があった。
　窓から見える人通りを眺め、あの人たちはどこに行くんだろうなと、意味もない問いを自分自身に投げかけていた。答えは.....ない。当然のことだ。

　高山光雲は新興宗教の教祖をしている。もっとも、カルトな宗教ではなく、「何となく生活に疲れた」、「生きる意味を見出せない」、「空回りばかりしている」と言った人たちの人生相談を霊的な視点で行う団体だった。現代社会の闇と連動した様な布教活動は結構、活況を呈していて、今だったら、とてもではないが、芸術写真なんかの専属契約や、顧問みたいなことを引き受けてくれるかどうかわからない。その点では五年前の静香たちの判断は正しかったと言える。胡散臭さを除いてはだ。
　主に、悩みに仏教的解釈を加えて答えている。彼自身、元々は僧侶だったそうだ。ただ、お寺にいると、葬式や法事の対応に追われ、彼自身の考える人々を教え導くと言う活動が出来ないので、独立した宗教法人にしたらしかった。
　そのお寺ってどこにあるのか？　　高史は疑問に思っていたが、光雲自身、問いに答えたことはないし、静香たち古参職員も、あえて話題に取り上げたりはしなかった。

　くしゃくしゃと髪をかき上げた。

「どうしたのよ？」
　静香が後ろから尋ねた。
「いや、別に。今月の心霊写真はどのくらいあるんです？」
「ああ、そんなことを心配してくれたの。一杯あるわよ。誰もいない場所に人影が写り込んでいたりとか、本人の写真の廻りに黒い影が差していたりとか。……ああ、何だかワクワクしない？　　これぞ、芸術写真冥利に尽きるっていうの？」
　――本気でそんなことを考えているのだろうか？
「あ、ええ、そうですね」
　高史は、身をくねらせて嬉しがる姿に、少し引く思いだった。
　彼女は、元々、心霊写真の雑誌と知って入社した口だ。心霊現象にも興味津々だっただろうし、これからやってくる霊能力者の先生に会うのもワクワクする思いだったのだろう。そんな彼女の姿を見ていると、「そんなものは、あり得ない」などと口には出来なかった。

　七時過ぎに高山光雲はやってきた。普通のグレーのサラリーマンのような背広姿で、変わった所と言えば首に輪袈裟を掛けているくらいだ。気をつけて見れば、右手に茶色の数珠を持っていたくらいだった。
　静香はいそいそとした態度で、光雲を奥の応接スペースであるソファに案内し、流しでコーヒーを淹れてそれを運んでいた。まるで、家に校長先生が訪ねて来たときの小学生の様な態度だった。
　高史は取材ノートをテーブルの上に置き、ボールペンを指で弄んだ。
「お待たせしました！」
　静香が勢いよく高史の隣に座った。
　光雲の前に一枚ずつ、合計十枚の心霊写真と思しきものを並べていった。そして、彼は、一枚一枚、丁寧に鑑別し、そして、コメントを加えた。静香は自分の取材ノートに一言一句聞き逃すまいと懸命に書き取っていった。
　高史としては、そこまで真剣には聞いていない。彼のコメントから、次号に採用する写真に「〇印」をつけ、ボツにするものを「Œ 印」をつけていただけだった。写り込んだのが、霊障なのかどうなのか、そんなことはどうでもいい気分だった。ましてや、「浮遊霊、地縛霊、生き霊」なんて区別はつける必要もなかった。
　もう一名いる記者のうち、カメラマンの蓮見と同意見で、写真へ写り込んだ不審な影や光は、技術的に説明のつくものであり、ただの光と影の織りなす偶然の産物でしかなかった。
「……この一枚は除霊しておいた方がいいでしょうな」
　彼はぽつりと言った。
「はい」
　静香は嬉しそうにうなずいた。
　そして、鑑定の終わった分を両手でまとめてとんとんと机の上でステップを踏んでから、封筒に収めた。

「ところで折り入ってご相談があるのですが？」
　静香は左手で髪を耳の後ろにやりながら尋ねた。
「何でしょう？」
「麹町に怪奇現象と言うか、よく人が事故死するマンションがあるんです。これって、本当に悪霊の仕業なのか、それとも、本当に偶然が重なっただけなのかわからないでしょうか？」
　――おいおい、こっちの特ダネを持って行かれては困るんだがな。と、高史は思ったが、口には出さず、ただ、視線を光雲の方から逸らすにとどめた。
「ふむ」
　光雲は軽く瞑目し、手元の数珠をじゃらりとさせた。「悪霊……とも言えるし、事故とも言えます」
「と、言いますと？」
　静香は身を乗り出した。――相手はわからないと言っているんではないか？
「さよう……たまたま事故の起こるタイミングに悪霊が手を貸した。事故は心の油断から生じるものです。悪霊はその隙間をつくるのに手を貸したに過ぎないのです。事故は人間だからこそ起こすものだと心得ておけばよいでしょう」
「なるほど！」
　――どこに納得する要素があるのだ？
　光雲の一言に静香はいたく感動し、コーヒーのお替わりを淹れに行った。

「中原さん。この職場はどうですかな？」
　光雲は手持ち無沙汰になったのか、高史の近況を尋ねてきた。
「いや、何とかやってますよ」
「最近、仕事の環境が大きく変わり、戸惑いを覚えているのではないですか？」
「あ、いや、そんなことは……ありません」
　なぜ、高史の異動の話を知っているのか、何気ない動作から、心の動きを読み取るコールドリーディングなる手法が心理学にあると聞く。そんなものの一種だろうかと高史は思索を巡らせた。
「あなたの発する波動から感じ取ったのです。戸惑っておられないのなら、それは結構ですね」
「……どうも」
　そこに静香がやってきて、話を元に戻してしまった。高史としてはホッとするだけであった。それにしても、この男に内面を探られるのは「不快」以外の何者でもなかった。
　それから、三十分ほど話した後、光雲は帰って行った。静香は礼儀正しく、この建物の玄関口まで彼の鞄を持ち見送りに出ていった。空っぽの彼女の座席を見て、高史は「ふうっ」とため息をついた。これから、ＩＣレコーダーに収めたさっきの光雲のコメントを記事に起こしておかなければならない。静香は当分帰ってこない。いつも、見送りに出ては、玄関口で長々とお喋りをして引き留めていることが多かった。先方にも都合と言うものがあるだろうし、こちらにだって、貴重な勤務時間だった。それでなくても、戦力の少ない芸術写真編集部である。

誰かに愚痴を聞いてもらいたかったが、それは、彼女も同じかも知れない。――ああ、今、まさに、彼女は霊能力者に愚痴を聞いてもらっているのだ。そんな感じがした。

6．咲子

6．咲子

（1）

（1）

四月十二日、咲子が大学の大教室に入り、朋香の姿を探していると、他の女子学生に声を掛けられた。あまり親しくはないが、喋ったこともないほどでもない。放送部の綿谷《わたや》小麦だった。普段の彼女はコムギとか、ムギちゃんとか呼ばれていた。前者は大学からの友人で、後者は中等部からの友人だった。咲子とも長い付き合いだったが、人前に出るのが苦手な人種の代表でもある自身に取り、放送部など、人前以上に、一般大衆にまで語りかける様な部活動の参加者とはまるで接点がなかった。

「吉田先輩に聞いたんだけど……史学科に行ったんだって？　中原さんらしくもない。いや、意外って言う意味なんだけどね。興味があるのかなって？」

「いや、そんなんじゃなくて……何て言ったらいいのかな。東京の歴史に詳しい人がいないのなかなって」

「ああ、そっちの方だったの？　少し残念」

彼女は咲子が放送部の活動に興味を持ったと勘違いしたらしかった。

でも、丸っきりの勘違いでもなかった。東都女子大文学部から、民放の女子アナウンサーなどになる人が、一年か二年に一人は出ていたのである。それに、アナウンサー以外にもディレクターや放送作家など、テレビ業界に一定の人脈を持っていた。だから、吉田が咲子に目をつけ、咲子がリクエストに応じることも十分あり得た事態だった。因みに、綿谷はシナリオライターを目指している。

「吉田先輩は咲子に頑張ってもらいたいみたいだったよ。うふふ」

そう言って、笑みを漏らした。

「えー、わたし？」

咲子としては、自身、背も低くスタイルも今いちだし、美人でもないし、放送部に目をつけられる覚えは全くなかった。

絡まれて困っていると、朋香がやってきた。

「おはよ。どしたの？」

咲子が説明すると、綿谷が横から口を出し、説明を補足した。

「あははは！」

朋香は破顔大笑した。おかしくて、ハンカチを目に当てた。「いいと思うよ。咲子かわいいじゃん」

朋香は母親の様に太鼓判を押した。少し無責任な気がした。

「朋香ぁ！」

「まあまあ、咲子、自分自身の魅力に気付いてないよ。ちっちゃくて可愛いし、声質も落ち着いているし、放送部向いていると思う。ムギちゃん、よろしく！」

「えっと、放送部の活動はね。……主に、番組制作コンクールへの参加と、コミュニティＦＭの放送枠があるのよ。その番組作りね」
「ＦＭ？」
　今度は朋香と一緒に声を出した。
「うーん、何て言うかな？　普通のＦＭじゃなくて、地域限定の出力の小さな局があるのよ。二〇ワット以下だから、大学のある西荻窪周辺だけで聞かれる放送なの。でも、落胆はしないでね。今はネットラジオっていって、インターネットで全世界に配信出来るの」
「全世界？」
「そうよ。でも、ネットにつながる人全部が聞くことが出来るんだけど、それほど、聞かれている訳でもないみたい」
　それはそうである。咲子だって、ラジオなんか普段は聞いたことがない。年に何度か兄の部屋を掃除しているが、その部屋に古いＣＤラジカセがあり、ボタンを押せばラジオを聞くことが出来ると、知識として知っている程度だった。実際に自分の意志でラジオを聞いたことは一度もなかった。
　――ラジオの向こう側の世界？
　ただ自由にお喋りをして音楽を垂れ流ししている訳でもないのだ。緻密な計算の元、聴取率が最大になる様、より、面白く、より、魅力的に番組作りがなされているはずだった。

「ムギちゃん。ＦＭって声だけなの？」
「おっ、やる気出た？　ＦＭ放送は声だけだけど、制作コンクールはビデオを回すわ」
「無理！」
「そう言わないで。吉田先輩も期待しているみたいなんだから、顔だけでも立ててよ。お願い！」
　――出演者に頼み込むのも、制作者の仕事なのだろうか？　咲子は素朴な疑問を抱いた。例えば、芸術写真の付録のＤＶＤみたいに、心霊現象に遭遇した人に頼みこんでビデオを回す。まるで静香の仕事みたいだと思った。

　午前中の講義が終わった後、大学生協脇のカフェでお昼ご飯を食べた後、朋香と喋っていると、ラフな格好をした吉田に出会った。彼女は自分のトレイを持って咲子たちが座っている席に移動してきた。
「お久しぶりです」
　と、朋香が挨拶したら、向こうも笑顔になった。
「中原さんね。……実は、状況は切実なのよ」
「と、言いますと？」
　咲子は首をかしげて尋ねた。
「あのね。うちの放送部って、コミュニティＦＭで二時間の放送枠をもらっているのよ」
「すごい！」
　朋香は感嘆の声を上げた。それに気をよくしたのか、吉田は説明を続けた。

「パーソナリティって言ってね。トークと音楽を流していたの。わかるよね？」
「はい」
「その子が、のどの病気で声が出なくなってしまったの。女子アナ希望だったから、余計に可哀想なんだけど、.....現在は、他のメンバーで代わる代わる出演しているの。せっかくの放送枠なのだから、手放したりしたら、先輩方に顔向けが出来ないって言うの？
　わかるよね？」
「何となく」
「あの！」
　と、咲子は割って入った。本来なら、咲子が注意を向けて聞いておかなければならない話だと思った。元のパーソナリティの女性のことが気になったのだ。
「最初はのどにポリープが出来たのよ。それで声が出しにくくなって.....でも、切除してみたら、悪性腫瘍だったらしいの」
「喉頭ガン？」
「.....だったみたい。かなり長いこと休んで、治療に専念していたんだけど、まあ、その話は置いておいて、あたしたちは、代りのパーソナリティを探していたのよ。そうしたら、研究室にたまたまやって来たのがあなただった訳なの。これは運命が引き合わせたとしか考えられないわ。お願い！」
「部員さんの代わりばんこでは駄目なのですか？」
「やっぱり、こればっかりは適性と言うのがあるのよ。大勢の人に聞かれても、耳障りな声もあれば、聞き心地のよい声もある。実際、ラジオの反応というか、聴取率にも影響が出始めているの。あなたでも感じない？　　ラジオやテレビのアナウンサーやリポーターの声質。声にも魅力ってものがあるのよ。番組作りを重ねていくと、よくわかるわ」
「はあ.....」
　咲子は曖昧なため息とも取れる返事をした。
「放送内容を組むときには、原稿を作って何度もチェックしているし、息切れしない様、ミュージックタイムもあるし、そんなに負担はないと思うよ。放送は十三時から十五時までの二時間。スタッフは、もう少し拘束時間が長いけど、パーソナリティ役はその前後十五分もあればいいかな。そんなに拘束時間はないわ」
「本当ですか？　　.....あ、だったら吉田さんは、今の時間にこんな場所にいていいのですか？」
「あたしは制作だから。台本を作って内容チェックしたらそこまで」
　咲子は、彼女の言うことが本当だろうかと、まず、疑い、そして、もし、引き受けるとしたら、どのくらいの負担になるだろうかと心配になった。講義の必須科目は一年生のときにほぼ取り終えていて、今は選択科目だけでいい様になっている。三年生からは各ゼミに配属されるがそれも、自由時間は多いと聞いていた。むしろ、就活関連で企業体験をする「インターンシップ」の方を心配していた。もう、朋香と一緒いる訳にはいかない。一人で全部やらなければならないのだ。
　そう考えると、コミュニティＦＭの体験も無駄にはならないだろうと、そんな気がしてきた。

（２）

（２）

　放課後、アルバイトに出かけようとしていた朋香を捕まえて、咲子は問い正した。
「前任者のことなんだけど.....」
「病気だったんでしょう？　　気の毒よねえ。女子アナ志望でも、声が出なくなっちゃお仕舞いよね」
「冷たいんだ。でも、その人ってそれからどうなったのかな？」
「さあ、.....あ、何ていう人だったんだろう？　　あ、ラジオ局に聞けばわかるか。待って、スマホで調べて見る」
　朋香はそう言いながら、片手でバッグからスマートホンを取り出し、片手で操作した。
「ふんふん、場所は近いわね。西荻窪の駅近くの.....この辺りって住宅地かしら？　　ラジオ局本社とスタジオと同じ住所ね。電話番号も書いてあるわ」
　そう言って、朋香はスマホの画面をタップした。そのまま局の代表番号につながった。
「.....はい、はい、はいそうですか。失礼しました。咲子。わかったわ」
　この辺のスピーディーさは咲子には欠けていた。「藤野葉月さん。東都女子大三年生だったらしいわ。三ヶ月前まで『西荻窪便り』っていうトーク番組のパーソナリティをしていたそうよ。現在は吉田先輩の言う通り、一日交替で部員が務めているみたい」
「藤野葉月？」
　咲子は朋香の情報をそのまま口にした。
「知り合い？」
「ううん。全く。聞いたこともないわ」
「吉田先輩はどうしてあのとき教えてくれなかったんだろう？」
　朋香は漠然と疑問を口にした。もちろん、後任となる予定の咲子には何の関係もない話でもあり、敢えて目標から挫折した人のことを口にする必要性がなかったのだろう。しかし、朋香が疑問に思ったとおり、あのときの吉田の表情にも、言葉の濁し方にも、不自然なものを感じ取ったのは同じことの様だった。
「これ以上は個人情報だから教えてはもらえないよね？」
　咲子は朋香の行動力に期待半分で訊いてみた。
「どこに住んでいるだろう？　　あ、あたし、一年生のときに、大学図書館の棚整理のバイトやってたじゃん？　　そのとき、管理システムを少し触らされてもらったんだよ」
「へぇ」
　今度は咲子も知らない情報だった。お金には困っていない真性のお嬢様育ちなのに、咲子ですら経験したことのないアルバイトをしていたことを口にされ、少したじろいでしまった。

図書館には蔵書検索用のパソコンが何台か置いてあった。朋香の話によると管理者権限でログインすると貸し出し情報などが見られると言う。さすがに、お金持ちのお嬢様でも、大学図書館で本を借りたことがないとは考えられなかった。参考文献を探したりするのに、誰しも月に何度かはお世話になっているはずである。その貸し出し者一覧に、結構な個人情報が含まれていると言うのだ。咲子は朋香を急かして図書館へと向かわせた。

図書館の天井は日光を採り入れる様に、天窓がついていて、中はほんのりと明るかった。数人の大学院生だろうか。少し年長の女子学生がロビーで資料を読んでいる。朋香はすたすたと彼女たちの存在を無視して蔵書検索用のパソコンの前に立った。そして、カタカタとキーボードを操作し、貸し出し情報の画面に切り替え、そこから、管理者権限のパスワードを打ち込んだ。

「藤野葉月さんの貸し出し履歴。……三ヶ月前に全部返却されているね」

「そうなんだ」

「英文科の当時三年生。住所は……と、千代田区麹町M丁目N番地……え！」

咲子も何か嫌な予感が脳裏を走り抜けた。

あのマンションだった。

「フォルテッシモ麹町、一五〇六号」

一五階の六号室だ。咲子は朋香の服の袖をギュッとつかんだ。

もしかしたら、……大学図書館で借りていた本をまとめて全部返却するなんてちょっと変だ。確かに、のどに出来たポリープが原因で声が出せなくなってしまったら、アナウンサーになる夢は諦めなければならないだろう。でも、それと、大学を卒業することとは別だ。三ヶ月前に三年生だったのだったら、四月からは四年生になるのだろうし、そうしたら、就職活動も本格的になるし、何より、卒業論文も書かなければならない。本の貸し出し制限があったのも四年生から冊数も期限も緩くなるのだ。卒論を書くために、大量の参照文献を必要とする。

それをまとめて全部返す？　咲子はさっき、直感的に嫌な予感がしたのを論理的な結論に帰着せしめた。

「朋香ぁ」

咲子は朋香の肩に手をやった。

「うん……どうしようかな？」

彼女も少し迷っていた。咲子は覚悟を決めた。

「新聞のデータベースに載ってないかな？」

「え？」

「事故や自殺ならときどき、載るじゃない？」

咲子がそう言うと、朋香はまた、カタカタとキーボードを操作し、キーワード「藤野葉月」「死亡」で、新聞社データベースで横断検索を掛けた。全国紙には載っていなかったが、地方紙の東京ローカルのニュースで出ていた。咲子の指摘通り、彼女は自殺していた。

「それで、吉田先輩も言葉を濁していた訳なのね」

　朋香も得心が行った様だった。
「わたし、どうしよう？」
　咲子は亡くなった方の無念を感じることが出来るだけに、その後任に据えられることに抵抗を感じた。
「複雑な気持ちよねえ。でも、与えられた任務をこなすことが、亡くなった藤野さんの遺志に報いることになるんじゃないかな。と、あたし的には思うよ」

　――遺志かあ。と、図書館で朋香と分れ、一人とぼとぼと駅に向かいながら、石ころを蹴った。石はぽーんと飛んで、道端に落ちていた空き缶にすこーんと当たった。偶然？
　咲子はふと考えた。偶然と考えれば、あり得る話だった。でも、全てがあのマンションに繋がっている。偶然ではない。何か大きなものの意志が働いているとしか考えられなかった。
　咲子は駅に着くと、券売機の上にある路線・料金表を確かめた。
　家の近くの高円寺では下りず、麹町まで行くことにした。あのマンション、絶対に何かある。そう確信していた。
　前に来たときと同じ地下鉄を降り、階段を上がると、ちょっと行った所に高層マンションが見えた。周囲にはこれほど高い建物はなかった。
　入り口のセキュリティドア横のインターホンで藤野の家の番号を押した。しばらくして、母親らしき中年女性の声がした。
「あの、放送部の後輩でした、中原咲子と言います。お線香を上げさせてもらいたくて」
　そう言ったら、ドアを開けてくれた。咲子はエレベータに乗り十五階を押した。
　以前、本橋裕美果の所に行ったときと全く同じだった。違いは四十七階と十五階の差だけである。もっとも、住んでいる人にとっては階の差は大きな違いになるのだとは、一戸建てに住んでいる咲子にも容易に想像がついた。
　エレベータは振動ひとつ立てることなく目的階に着いた。チーンという電子音を立てて、ドアが開いた。咲子はまだ見知らぬ、藤野の母親に会うべく気合いを入れ直した。本当は知り合いでも何でもない。なのに、知り合いのフリをして短時間で出来る限りの情報を取らなくてはならないのだ。
　怪しまれたその場で追い出されるに違いなかった。
　咲子は六号室のドアの前に立ち、ドアホンのボタンを押した。ピンポーンとやけに大きな音が廊下中に鳴り響いた気がした。ボタンに触れた指先からまだ会ったことのない藤野葉月の気配を感じた。咲子のことを拒みもせず、歓迎もしていなかった。
「はあい！」
　インターホンから中年女性の声がした。――今取り込み中なのよ。邪魔ねえ。そんな気配がした。
「東都女子大放送部の中原と言います」
　そう言うと、少し間を置いて、玄関のドアが開いた。出て来た女性は、朋香のお母さんくらいの年代だろうか。四十代後半だけれど、まだ、若々しい感じがした。髪はショートで薄く化粧をしていた。

「あなたが放送部の後輩の子？」
「はい。このたび、ＦＭ西荻窪のアナウンスを担当することになりました。その前に、藤野先輩のご仏前にお線香を上げさせてもらおうと思いまして、まかり越しました」
「そう.....あなたが？　来てくれてありがとう。上がってちょうだい」
　そう言われ、咲子は玄関でローファーを脱ぎ、出されたスリッパに足を入れた。
　奥のリビングに洋風の仏壇があり、横の棚に藤野の写真が立てられていた。切れ長の目をした色白の髪の長い美人だった。――見たことあるかも。咲子は学園祭で放送部のブースで目立っていた上級生を思い起こした。
　咲子は仏壇の前で膝を揃えて正座し、マッチでろうそくに火を灯し、お線香をかざして火をつけて線香立てに立てて、手を合わせた。
　そして、藤野の写真の額部分に指先で触れたとき、どうっと、イメージが頭の中に流れ込んで来た。彼女の死ぬ直前の出来事だった。
　のどにポリープが出来、声を失ってしまった。悪性の腫瘍で、生命の危機にも直面した。検査の結果では他の臓器への転移は見つからなかった。それだけが救いだった。せめて女子大だけは卒業したかった。声がなくても出来る仕事はあるはずだ。どんな仕事であれ、放送に携わりたかった。
　ぼんやりと、非常階段の踊り場から道行く人を眺めながら、どうやったらいいだろうと思索に耽っていた。
　その時だった。誰かに背後から突き飛ばされ、脚を抱え上げられ放り投げられた。十五階と十四階の間の踊り場だった。数秒後、地面に落下し、即死した。誰にやられたのかもわからなかった。意識は身体の上数メートルの所で浮遊していた。
　――自殺ではなかったの？
　咲子は自問自答した。指先に触れたものに込められた想念をイメージとして感じ取ることが出来るようになったのは、中学生のときだった。両親の事故死というショックをきっかけにして得られた能力だった。但し誰にも話したことはなかった。
　藤野の自殺が、実際には殺人事件だった？
　でも、根拠に乏しかった。いや、むしろ、アナウンサーになると言う夢を病気により絶たれてことを悲観してのことと取った方が自然だった。誰が殺したというのだ。動機は？　と、問われても、それすら答えようがなかった。

　咲子が仏壇の前で固まっていると、お母さんがお茶を持って来てくれ、テーブルの上に置いた。その足元に三毛猫がいた。
　――猫ちゃん？
　可愛らしい猫だった。丸々と太っていた。猫は咲子の足元にやってきて、すねの廻りをすりすりとこすりつけた。毛の柔らかな感触が伝わって来た。
「あら、ミケったら」
　お母さんは涙ぐみ、右手の指で目頭を押えた。「この子は葉月にしか懐かなかったの」
「そうだったんですか」
　咲子は手のひらで猫の頭をなでた。

「亡くなる半年ほど前に近所の公園で拾ってきたの。あの子ったら、それはもう大切に介抱して……。最初はおどおどしていたのが、いつの間にか、元気になって。太いでしょう？」
　お母さんはそう言って、猫をなでた。猫はニャアと言う声を上げた。
「本当に元気そうですね」
「あの子の代わりだと思う様にしているの」
「ま！」
　咲子は手を口に当てた。それを見てお母さんは、おかしそうに笑った。
　その後、お母さんは大学と放送部の今の様子を熱心に尋ねてきた。咲子は出来る限り正確に情報を伝えた。
「あの、放送はお聞きになったことは？」
「女子大近くでしか聞けないそうね。でも、インターネット配信もされているみたいだから、そっちで聞いていたわ。あの子の放送は全部録音していたの。パソコンショップの人に教えてもらったの」
「そうだったんですか。わたしが言うのも変ですが、便利な世の中になったものですね」
「あら、わたしのお母さんの様なことを言うのね」
「えへへ、ときどき、友達から年寄り臭いって言われてます。あ、ごめんなさい」
「いいのよ」
　お母さんが時計を見たのをきっかけに、咲子は帰る口実を見つけ、この家をおいとました。

　一階の管理人事務所を覗いてみた。昼間はずっと誰かいるみたいだった。
「あのー、すみません」
「なんですか？」
「このマンションってペットＯＫなんですか？」
　そう言うと、管理人の男はむすっとした表情になった。
「君、見かけたの？　　動物」
「あ、いいえ、ペットを飼いたいなあと思っただけです」
　マンションの大多数はペット不可と言うことは知っていた。念のために確認しただけのことだった。あの三毛猫を告げ口するつもりは毛頭ない。
「水槽で飼う金魚とケージで飼う小鳥までは可だよ。でも、それ以外は全部だめ」
「やっぱり、そうですよね。あはは」
　仏頂面の管理人から逃げる様に、笑顔でその場を立ち去った。自動ドアが閉まると、外の暖かい風を感じた。――ここの人ってタバコといい、ペットといい規約違反の人ばっかりだと思った。

（3）

（３）

　高史は午後から、独自に調べてもらっていた探偵から調査結果を聞いていた。棚田義男という五十歳の男だった。元は、静香の情報によれば、ローカルテレビ局のディレクターをしていたらしい。五年前に局の不正経理に関わり、諭旨免職となった。家族を食わせるために、人脈の広さを生かし、探偵業をはじめるが、うまくいくはずもなく、困っていたときに、静香が定期的に芸術写真の調査の仕事を回し、その縁で彼女の下僕となっているみたいな関係なそうだった。
「中原さんの見込み通り、地上げ屋が動いている節があります」
「フォルテッシモ二番館ですか？」
「まだ、名称までは決まっていないと思いますがね。でも、大規模マンションの計画はすでに動いているらしいです。都の建設局に建築許可申請が別の建前で出され、それが、以前、都議会で問題になり、担当していた委員長問責決議案が提出されるという騒ぎとなりました」
「秘書が自殺してうやむやになったあの事件ですね？」
「はい」
　棚田はそう言い、手元にあったお茶に手をつけた。
「具体的な証拠はあるんですか？」
「流石に直接的な証拠はないんです。麹町M丁目Ｐ番地でかなり多くの土地が不動産業者によって買い進められています。ですが、彼らは大手デベロッパーのプラネット住建の息のかかった業者です。多分、転売か、転売の転売で最後の段階まで正体を現わさないと思われます。それでなくても、茂原議員とプラネット住建の関係を野党に追及されたばかりです。簡単に正体を現わすことはないでしょう」
「その土地の規模はわかりますか？」
「ええ、それが調査の肝でした。商業ビル、小規模住宅合わせて三五〇〇坪が買収されています。正方形ではないですがね。多分、マンション本体と残りは公園か集会場用地ではないかと思われます」
「買い手はプラネット住建ではない。しかし、買い集められている.....」
「ええ。ですが、買い集めるには、建設許可の内示が出ているはずなんです。公式の許可でなくても、当局の内示があれば十分だと思います」
「内示を出すためには買収の事実が必要と？」
「鶏が先か卵が先かの議論になってしまいそうですが。しかし、両方を天秤にかけながら、一儲けしようとするのは、業者も政治家も同じみたいですよ」
「あの秘書って、本当に自殺だったのかな、わかりませんか？」
　高史が指摘すると、棚田はタバコを探すかのようにポケットに手を入れ、すぐに、な

いことに自分で気づき、決まりの悪い顔をした。そして、回答する用意がなかったらしく、手帳をパラパラとめくった。几帳面な細かい字でぎっしり書き込まれていた。
「千葉県警は自殺と断定していますね。水死で外傷もなく肺の中は水で満たされていたそうです。業者と政治家の間でうまく立ち回ることが出来ず、板挟みになり、悩んでいたのではないでしょうか」
「気持ちはわかるんですが、何か引っ掛かるものを感じますね」

　棚田が帰った後、高史は情報を記事にするべく、パソコンに向かって文字を打ち込んでいると、山浦が取材から帰って来た。
「探偵さんの調査はどうだった？」
「ああ、ご説明します」
　そう言うと、山浦は机の引き出しからタバコとライターを取り出した。話は喫煙ルームで聞くらしい。高史は棚田から提出された報告書を手に持ち、彼の後をついていった。
　シュボッと言う音を立て、ライターからタバコに火を点けて、大きく息を吸い込み、はあっと煙を吐き出した。
「やはり、フォルテッシモの周囲で土地買い漁りの事実はあるみたいです」
「ふうん」
　山浦は高史が差し出した報告書にザッと目を通した。
「建築認可のことがあるんだろうな。やっぱり」
「探偵は鶏が先か卵が先かわからないと言っていましたが」
「順序なんて関係ねえよ。事実、茂原議員が野党から追及されてすぐに秘書が亡くなっているんだろう？　　証人喚問をちらつかされていたから、やばいと思ったんだろうな」
「やっぱり、自殺ではないのでしょうか」
「そうだよなあ。よっぽど忠誠心が高くて、親分を守るために秘密と共に生命を絶ったのなら、自殺だろうけど、そうでなければ、殺人の疑いも出てくるだろうな。警察は動いていないのか？」
「千葉県警の検視では、自殺説で落ち着いた様ですね」
「自殺ねえ。まあ、気持ちはわからないでもないが.....」
　山浦はしょうがないなと言う顔で二本目のタバコに火を点けた。「ああ、それから一番館の方で相次いでいる事故は何かわかったか？」
「これも、事故で間違いない様なのですが、ただ、一点気になったのは、亡くなった方は何らかの近隣トラブルを抱えていた様なのです。だからといって、暗殺と言いますか、そんな大それた犯罪に巻き込まれたとすると動機としては弱いと思います」
「近隣トラブルねえ。ピアノの騒音や上の階の足音、風呂やシャワーの音、ペットを巡るトラブルって過去何度か殺人事件にまで発展しているぜ。そう言えば、一番館の管理業者はどこだっけ？」
「ええと.....麹町建物管理株式会社です。過去に問題は特にはないようです」
「そこ、プラネット住建の子会社だ」
「ええ？　　マジですか？」
「一番館の実績があるからこその二番館請負だろう。何かあるかも知れんな」

「もう一度調べて見ます」
「ああ、そうしてくれ」

たばこ臭いこの場所から逃げ出す様に高史は職場の自分の席に戻った。
パソコンから会社が契約している新聞社データベースで検索を掛けてみた。過去のフォルテッシモとその周辺の住所での事故や自殺、事件などをピックアップした。
ここ数ヶ月だけでも結構なペースで起こっていた。もっとも、五十階建てのマンションだ。居住者数から言ったらそれほどでもないかも知れない。それに、連鎖反応と言うこともある。誰かが飛び降り自殺を図ると、同じ想いを抱いている誰かが、発作的に飛び降りると言うものだ。過去にカリスマ的アイドルが自殺したときにも、大勢の追従者とも言うべき人が後に続いたものだ。
ただ、近隣住民との間に問題を抱えていたかどうかは、新聞検索ではわからない。地道に聞き込みに当たるしかないかも知れない。
高史には、そんな時間は与えられてはいなかった。
と、なると、外注するしかない。
さっきまでいた探偵の棚田に依頼しておけばよかったと思った。周辺住民への聞き込み捜査など、まさに彼にうってつけだ。高史は棚田の携帯電話に折り返し連絡をくれる様、メッセージを送った。

（４）

（４）

　咲子は自分の部屋の鏡台の前で、右手でおでこに掛かる髪を上げてニキビとにらめっこしていた。今日の昼間、初めてラジオ局で喋り、いまだドキドキしていた。来週は放送コンクール用のビデオを撮るらしかった。こちらは、東京の大学の連合が主催している内輪のコンクールで中学･高校を対象にしたＮＨＫ放送コンクールほどかしこまってはいないらしい。

　しかし、マスコミ関係者も上映会には参加するらしく、テレビ局やラジオ局に就職志望を出している学生たちは気合いの入り様が違っていた。

　地域ＦＭの放送だけでもドキドキものの咲子にとり、ビデオ撮りなど「とても無理」な話だと思った。

　夜の八時を少し回った頃、家の電話に朋香から掛かってきた。

「もしもし朋香？」

「咲子ぉ、大変なことが起こったの！」

　電話口の向こうで彼女が取り乱していた。大変と言えば、自分も今日は大変だったのだ。しかし、大変の種類が違っていた。「裕美果が！　　裕美果ちゃんが！」

　彼女は泣きながらそう言った。咲子は何のことだかさっぱりわからなかったが、彼女が泣いていることから、嫌な予感が脳裏をよぎった。

「まさか？」

「そのまさかなのよ！　　マンションの非常階段から飛び降りたって。お母さんから連絡を受けたの。咲子は.....事情なんか知らないよね？」

「あ、うん」

　知らないことはなかった。以前、朋香抜きで喫茶店で会った際に、大学の成績についての人に言えない悩みをじっくりと聞かされたことは記憶に新しかった。新学期が始まって数日になる。もう、何回か講義を受けたはずだ。課題を出されても、仲間同士で団結して調べることも問題を解くことも出来ないでいたに違いない。周りは一個下の学生ばかり、プライドの高い彼女には、「答え見せて～」なんて間抜けな台詞は口に出来なかったに相違ない。

　咲子は受話器を握りしめたまま、電話口の向こうの朋香と一緒になって泣いていた。

「お母さんは警察から色々聞かれたらしいの。普段の生活態度や学校での振る舞いのことまで」

「あ、うん。.....悩みは色々あったみたいだよ」

「裕美果んち、彼女も優秀な学生なんだけど、もっと優秀な弟がいるのよ。知ってた？」

「聞いたことある」
「兄弟間で比較なんて、本来はしちゃいけないことなんだろうけど、……」
「その件では本人が自縄自縛になっていたみたい」
「咲子ってば。そこまで知ってて放置したの？」
「放置じゃないけど」
「まあいいわ。お母さんの情報によると、警察から関係者にも事情を聞く場合がありますって言われたみたいだから、一応前もって知らせておくね。いきなり刑事さんが来ても驚かない様に」
「それはご親切に」
　でも、多分、こっちにまで警察が来るとは思えなかった。多分、大学の同級生や教官の所までだろう。成績を苦にしての自殺なら、そこまで調べれば十分裏付けは取れると思ったのだ。

　気がつくと、咲子は何だか中身もよく確かめもしないままに、鞄を肩に掛け、電車に飛び乗っていた。車両の行き先表示も確かめずに本橋裕美果のマンションを目指していた。地下鉄の麹町駅を下り、一目散にエントランスに向かって走り抜けた。本橋のお母さんは今頃多分、警察署の死体置き場か取調室だろう。前に確かめていた暗証番号を何気ない顔で押し、エントランスのセキュリティゲートを抜けた。
　エレベータで四十七階まで上がり、非常階段を探した。大抵のビルでは緑色の非常灯の矢印の方角に沿って移動すれば、外部へ通じる非常階段に誘導されるようになっている。そして、角を曲がると、そこには、「立ち入り禁止」と書かれた黄色と黒のテープが貼られ、中には入れない様になっていて、側には警備のお巡りさんが立っていた。
「あの？　　亡くなった本橋さんの友達なんです。現場を見ることは出来ないでしょうか？」
「友達だって？　　今は無理だね。現場検証が終わるまで誰も入れることは出来ない」
　制服姿のお巡りさんは事務的な口調でそう言った。
「そうですか」
　咲子ががっくりと視線を下げると、階段の下部が見えた。踊り場の床に灰の様なものが落ちていた。誰かがタバコの吸い殻があるのを、丁寧ではない仕草でざっと掃除した、そんな感じがした。
　また、彼女ってば、こんな場所で隠れタバコをしていたのかと思った、
「あの！　　この下の階で女性が倒れています！」
「えぇ！　　本当か？」
　お巡りさんは慌てて、肩につけている無線機のマイクで同僚にインフォームしてから、現場に向かった。咲子は、心の中でごめんなさいを言いながら、後ろ姿に手を振った。
　お巡りさんが立ち去ると、咲子はテープを上に挙げて、ひょいと中に入った。そして、彼女が乗り越えたであろう手すりに指先をつけた。
　――新学期の苦悩と絶望と言う、彼女が言っていた通りの想念が伝わって来た。と、同時に、タバコを一服して、よし、一人で乗り切るぞと言う気合いも伝わった。その瞬

間、背後から誰かに突き落とされた。上半身が手すりを越えて乗り出し、もう片方の手で下半身を持ち上げられ、背負い落とされた。落ちるまでの数秒。短かった人生をもう一度巻き戻すかの様に、幼い頃の楽しかった思い出が思い起こされていた。着地と同時に、即死だった。
　彼女の霊は肉体を離れ、遙か上空から自分の変わり果てた姿を見つめていた。そして、神に召され天に上がって行った。

「おい！　入るなと言っただろう。それに、誰も倒れてなんかいなかったぞ」
　さっきのお巡りさんが戻ってきて嘘をついた咲子を咎めた。
「あれ？　さっき倒れていたんです。もう大丈夫になってどこかに行ったんですかねえ」
　と、精一杯の笑顔で言い逃れた。お巡りさんは持ち場を離れたことを悔いていた。
「もう、行って！」
「すみませーん」

　現場から少し離れ、お巡りさんから見えない位置で咲子は静香に電話を掛けた。
「咲子ちゃんも、大人しそうに見えて随分と大胆なことをするのね。下手したら公務執行妨害で捕まっちゃうわよ」
「そうなんですか？　でも、このたびの事件と言い、三ヶ月前の藤野先輩の自殺と言い、わたしには、殺人事件としか思えないんです」
「待って待って。そんなこと急に言われても困るわよ。動機があったから自殺と断定されたんじゃないの？」
「動機は確かに当たっているんですが、周りから嫌われる様な一面もあったんです」
「どんな？」
「本橋裕美果さんは館内禁煙なのに、非常階段で隠れタバコしてその上、吸い殻をポイ捨てしていたんです。藤野葉月さんは、ペット禁止なのに猫を飼っていました。太い猫です」
「太いのは余分！　でも、そう言われて見れば、他の事故死者も、学校でイジメをしていたり、痴呆老人は非常ベルを鳴らしまくりしていたりだったんだよね。他人から見れば、死んで当然と思われるっちゃあ、そうも言えるんだ？」
「でしょう？」
「だからと言って、簡単に人を殺したりはしないものよ。でも、そうかもね。世間では殺人事件なんて日常茶飯事になっている面も否定は出来ない。このマンションって何かあるのかなあ？　因縁めいた話.....よしっ、調べて見るか！」
　佐伯静香は咲子の暴走めいた推理を否定はしつつも、やる気スイッチが入ったみたいだった。

７．金貸しＯＬ

７．金貸しＯＬ

（1）

（１）

　静香は電話で咲子からの報告を受けていた。また、あのマンションで女子大生が一人亡くなったこと。それから、意外なことに古い住宅地図を調べていて、あのマンションの区画は昭和四十九年の段階では、五軒の会社のビルがあったこと。ただの女子大生にしてはよく調べていると思った。
「おい、佐伯」
　編集長の森野が背後から声をかけてきた。
「何ですか？」
　森野は古い本を持っていた。書籍にしては殺風景な装丁で、自費出版本か何かだと思った。
「結構やばいことが書いてあるんだ」
「アングラ情報と言う意味ですか？」
「そうじゃなくて、犯罪者の告白本みたいなんだ。もちろん、本人はもう時効が成立してて安心なんだけど、このままでは不安って言うんだか、誰かに言わずにはおれない心境なんだろうな。舞台の背景に麹町の地名が出てくる」
「あ、貸してください！」
「そう言うと思ったよ。文章がまずくて、読むのに苦労していたんだ。最後まで読んだら内容をかいつまんで教えてくれ」
「わかりました！」

　静香はイスをクルリと回転させて前屈みになり、読書モードに入った。会社にいて堂々と本が読めるなんて、やっぱり、この職場くらいのものだろう。それにしても、文章がまずいと思った。いくら自費出版でも、担当編集者がついて、口を出さなかったのだろうかと疑問に思えてくるほどだった。森野がケチをつけるのもうなずけるレベルだった。
　こういうとき、編集方針はひとつしか考えられない。元の文章の毒々しさを失わせたくなかった場合だ。と、言うことは最後の最後に、衝撃的な結末が用意されているはずだ。
　静香はページを飛ばし、一番最後から読み始めた。
「やっぱりそうだ」
　考えるまでもなく、著者は重大な罪を犯していた。
「商社ＯＬ殺人事件かぁ」
　確かにそう告白していた。静香は事実関係を調べるために、一旦読書を打ち切った。パソコンに向かい、新聞社データベースに接続する。しかし、殺人事件ではヒットしなかった。こんなとき、いくつかのパターンが考えられる。事故に見せかけて殺し、それ

に成功した場合や、データベース化された時代より古い場合。そして、いまだ死体が見つからず、殺人事件として捜査されていない場合だ。
「いや、待てよ」
「どうしたんですか？　佐伯さん」
　前の席に座っている蓮見が声を掛けた。あんまり、独り言が多かったのかも知れない。
「時効ってさ、事実が明るみに出てから何年なんだよね？」
「確かにそうですよね。微妙な線ですねえ。法律の専門家に問い合わせないとわかりません」
　――蓮見は会社の法務部に問い合わせ、刑事訴訟法の時効は犯罪の事実からカウントされると言う回答を得た。
「そうなんだ」
　どうも、未だに死体が見つかってもいない様な雰囲気を醸し出していた。犯人、著者はそうして捜査の手から逃れ、当時としては、十五年の時効期間を過ぎたと安心しているのだろう。

　被害者は荒田杏子という。丸の内にある丸菱物産という商社に事務職として働いていた二十八歳のＯＬだった。麹町というのが出てくるのだが、これが彼女の住所地なのか、それとも、他に借りているオフィスなのか、記載ではよくわからない。
「ふむ」
　静香は右手の親指の爪を噛んだ。
　出身は静岡県の浜松らしく、地元の女子大を出た後、昭和五十八年に上京していたみたいだった。交際相手はいなく、アパートに一人暮らしの生活をしていた。
「あ、住んでいたのが麹町なんだ.....」
　住所は元あった菊川文具と同一だった。多分、地図にあった昭和四十九年から五十八年の間に菊川文具が移転するか倒産するかし、その後に一時的にアパートが建っていたと考えて良さそうだった。
　――結婚資金を貯めるためと、常日頃から冗談めかして広言していたらしかった。
「ふむふむ」
　静香はページをめくった。
　どうやら「金貸しＯＬ」と言うのは彼女のことらしかった。少ない給与をせっせと貯蓄する中、有利な運用を考えた。当時の銀行利子は結構高く、預金するだけでも、資産は増えたはずだった。しかし、女性の一人暮らし、実家も当てに出来ない（と、後の方に書いてあった）となると、ハイリスクハイリターンを求めがちなのは、焦りと油断があったのかも知れなかった。

　彼女はサラリーマン相手に小金を貸す商売を思いついたみたいだった。
　例えば、給料日前の金曜日なんかに、友人などから飲みに誘われたとする。お小遣いは給料日までもらえない。おごってもらえる訳でもない。独身の友人は気楽でいいなあ

と思いつつも、断ることもせずについていく。必要なのは少額の資金だった。一万か二万あれば足りる。

そんな客に荒田杏子はお金を貸していた。

利息は何と、十日で一割という高利貸しだった。

「そっかー」

でも、である。一万円借りて、十日で一割でも、何ヶ月も借りる訳ではない。給料日までのせいぜい三日から五日だった。日割りで五分の利息としても五百円だ。友人から借りたとしても、お礼のお菓子か何かつけなくてはならないことを考えると、ビジネスライクに割り切って五百円の利息でいいなら払うだろう。大したことのない金額だと思った。せいぜい、当時一箱二百円だったタバコを二つばかり節約すればいいだけの話だ。

荒田としては、貸すのと回収するのとのサイクルを早くしてとにかく回せばいい。回せば回すほど利潤が出てくる仕組みなのが金貸しと言う商売だ。

便利ですよ。便利ですよ。お礼は五百円だけ。気を使わなくてもいいのですから、便利、便利！

「なるほどなぁ」

静香も真似をしたくなるほど、うまい商売だと思った。

高利を取っておきながら、利用者から感謝されるビジネス。利益も大きかったに違いない。現に、数年の金貸し業で、荒田が数百万から一千万近い利益を上げている様だと、著者が推測していた。

認可を受けずに商売として人に金を貸して回収するのは違法行為である。しかも、十日で一割と言う利息も当時「サラ金」と呼ばれた金融機関では当然の様に行われていたみたいだったが、これも違法金利だった。

取り立ても、彼女のきっちりした性格を反映していたのか、厳しいものだったらしい。女友達を装って、借りた人の職場にまで電話を掛け、期日までにきちんと取り立てていたそうだった。

「でもなぁ」

これって、申告できない収入だと思った。税金を取られる以前に、その行為の適法性を問われかねない。下手をしたら警視庁捜査二課のお出ましになる。そんなお金を銀行預金にすると、金額が大きいので、必ず金融当局に目をつけられる。そんなことは商社ＯＬをしていたら、よく知っていただろう。

人に言えないカネはタンス預金に限るのだ。

静香だって、いざと言うときのために、いくらかは、タンスの裏側にしまっていた。給与収入以外にも、出張費を浮かせたり、取材経費として別にもらった分を使わずに「貯金」していた。芸術写真と言う雑誌がライオン社に買収され、給与体系が上がったにもかかわらず、元の編集部の悪しき習慣をそのまま引きずっていた。でも、金額は五十万ほどで、荒田杏子の数百万から一千万と言うレベルにはほど遠かった。それだけに、当時一ＯＬにしか過ぎなかった彼女の手腕を羨ましく思えていた。

（２）

（２）

静香は指先をなめ、ページを繰った。結末がわかったからには、最初から内容を精査しなくてはならないだろう。勤務時間内に、読書を認めてくれた編集長にも顔向けが出来ないと言うものだ。

本の背表紙を見ると、出版社は香才堂と言う、聞いたこともない会社名で、著者は福岡義隆とあった。多分、というか、絶対に自費出版以外にあり得ないと感じた。

前半に、金貸しＯＬである荒田杏子の活動を細かく著述してあり、後半は主題である、福岡の一人称による犯罪の告白になっていた。

「わたしは.....かぁ」

「静香さん。勤務時間中に本なんか読んでいていいんですか？」

背後から可愛らしい声がして、振り向くと小柄なかわいこちゃんが立っていた。咲子だった。読書の邪魔をされ、少しペースを乱された感があったが、ちょうど、目が疲れて来た所だった。コーヒーブレイクにしてもいいだろう。

「これも資料なのよ。咲子ちゃん、コーヒーでも飲む？」

「あ、自分で入れます」

「いいのよ。それにコーヒーメーカーも会社の備品なの。部外者が勝手に触ってはいけないわ」

「そうなんですか」

咲子はそう言い、舌を出して微笑んだ。

十分間のコーヒーブレイクを挟み、再び、資料に向き直った。

福岡義隆は、当時、勤めていた印刷所を辞め、麹町にあった不動作管理会社に転職していた。主に、マンションやビルに管理人を派遣する会社で、福岡もその交代要員として雇われていた。景気はオイルショック後、十年間続いた構造不況のまっただ中で、あんまりよくはなかったが、管理人の仕事に不況も好況もなかったので、比較的安定した職種と言えた。

金貸しＯＬから借りたり返したり。そうしてサラリーマンとしての日々は過ぎて行った。

それから、数年後、昭和六十二年の六月。

景気は上向き、不動産への投資や投機が相次ぎ、土地やビルの価格が高騰した。

福岡の仕事も忙しくなってきた。好景気に煽られるかの様に、色んな女性とつきあう

ことが出来た。お金にも不自由しなかったし、デートに飽きたら、管理物件の高級マンションの一室でシャンパンを開けたりしたこともあった。もちろん、自分のものではない。これから売りに出される部屋で、ＰＲ用品のシャンパンであった。

金はあったが、出ていく方が多いくらいだった。

静香は咲子にもわかる様、朗読した。

「サラリーマンの人ってお金持ちなんですか？」

彼女は素朴な疑問を漏らした。

「うーんとね。収入は学生さんより格段に多いんだけど、支出もものすごく多いのよ。だから、結婚している場合と独身の場合で自由になるお金は全然違うんだけど、この人はどっちだったんだろうね？　お小遣いは月に一万から三万くらいじゃないかしら」

「会社の物件でデートして備品のお酒を飲んでいるくらいだから、少ないと思いますよ」

「あら、鋭いわね。そうみたい。既婚者だわ」

「既婚者で、女の人とデートしていいんですか？」

彼女はカマトトぶった質問を投げてきた。静香は苦笑した。いわゆる、浮気とか不倫とか言うやつだろう。男女関係の習俗として流行しだしたのは、ちょうど、この頃、バブル真っ盛りの時代だ。

静香は、咲子の害にならない程度にオブラートにくるんで説明してあげた。彼女は真っ赤な顔になり、口に手を当てた。本当に知らなかった様だった。

男にとり、転機が訪れた。

つきあっていた彼女……恐らく仕事の上で知り合ったのだろう。彼女が今月の生理が来ないことを相談してきたのだ。まだ、携帯電話が普及する以前のことだ。多分、喫茶店かどこかに直接呼び出されて、事実を告げられたのだろう。

本の中でも、男は狼狽していた。

シングルマザーなんて言葉は、当時まだなかった。結婚できない間柄で子供が出来たら、生んで里子に出すか、あるいは、生まないかの選択肢しかないみたいだった。女は男に諭され、堕胎することを決める。しかし、女は金を持っていなかった。

男はいつも利用していた、アパートの一室で行われていた貸金業者である荒田杏子から金を調達した。十万円だった。足りない分は女が何とかしたようだ。

十日で一割。

この利息は、サラリーマンにとり小さくはなかった。給料日まで一、二万を借りる程度でしか成り立たない。十万も借りると、十日で一万円の利息になる。一ヶ月借りると、複利計算で利息は三万三千百円となる。小遣いでは返しきれない金額だ。

荒田は入金があるうちは、鬼の様な督促はしてこなかった様だ。

「利息だけでも入金してくださいよ」

とだけ言って電話を切ったらしかった。こんなメッセージは、借金を負う身には神経をすり減らす類の電話だ。そして実際に一と月に三万三千円を取られるのである。妻に

知られてはならない。
「最近、お小遣い足りてないの？」
　と、聞かれる度にドキッとする思いになる。なぜと聞き返すと、最近、飲みにも行っていないし、タバコも買わなくなったし、何か節約しているみたいに見えるもの。と妻が答えたそうだった。
　確かに、節約生活を強いられていた。
　そして、そんなとき、給料の高い.....と判断した会社に転職してしまう。これが、自らの首を絞める判断となった。確かに給与は今までより恵まれていたが、最初の三ヶ月間は試用期間で、基本給以外の手当すべてが保留扱いにされた。
　サラリーマンの給料は、基本給は少なくなる様に設定されている。様々な手当が付いて、大きな額となるのだ。試用期間の基本給に、妻は文句を言わなかったが、男としてはその間の小遣いを増やしてもらう様なことは出来なかった。
　職場に、頻繁に女友達を装う電話が掛かりだした。
　出たくないが、出なければ誰かが出て、自分に取り次ぐ。受けなければ、その人に用件を伝えられてしまう。
　営業に出ていると、事務所から何度もポケベルで呼び出しを受けた。「福岡くん。至急連絡をしてくれと言っていたよ。君もお盛んだねえ。あはは」主任はそんなことを伝えてきた。
　やばかった。
　小遣いは三万円。全部つぎ込んでも足りない。もう、何とかして元金の十万をどこかでひねり出し、一括して返金するしかなかった。

　そしてさらに悲劇が襲った。
　不動産の管理物件の賃貸料を預かり、会社に持って帰る途中、出先で紛失すると言う失態を犯してしまったのだ。本来、短時間でも金庫に入れるべきお金を、ちょっとの間だからと机の引き出しに入れて、席を空けたのだ。
　ほんの五、六分の出来事だったと思う。
「あちゃー、それはいけないよぉ」
　静香は読んでいてため息をもらした。咲子は真剣な顔で話の続きを訊きたそうにしていた。
　金額は三十万円ちょっとだった。会社への納金は、回収を忘れたことにして時間を引き延ばし、その間に、妻の実家に連絡を入れ、彼女も立ち会った上で、義父から現金を借り、会社の経理に渡すことに成功した。
「福岡さん、回収が遅れてますよ！　　本当なら金利がかかるんですからね」
　経理のお局さんはそう言って責め立てた。
　問題は荒田杏子から借りた十万円の行く末のことだった。義父には月給の中から、月三万円ずつ、十回払いで返済することで時間の猶予を得ていた。妻には頭を下げ通しで、小遣いを返上すると言わざるを得なかった。しかし、優しい妻は、半額の一万五千円だけ手渡してくれた。いくら何でも、サラリーマンの男の財布の中が空だなんて、妻が恥

をかくと、微笑を浮かべて言った。わたしは、妻の本性が恐ろしかった。荒田から借りた十万円の使い道がもしも、彼女に知れたらどうなるか。浮気で作った子供の堕胎費用だなんて、もし、知れたら、妻も怖かったし、彼女の実家の義父も怖かった。わたしなど、指で弾くがごとく、この世から抹殺されるに違いない。そう実感した。

そして、この十万円は返せないお金と化した。

荒田は、頻繁に連絡してきた。職場の電話である。まずかった。そして、それに輪をかけたのが、もはや、還す手段を失っていることだった。

そうして、ずるずると、三ヶ月ほどが過ぎた。

八月のある暑い夕方だった。荒田は普段は商社ＯＬをしているから、六時前に連絡してくることはなかった。わたしは、時計の針を見ながら、金利を電卓で何度も計算しなおした。

三ヶ月である。元金と利息を合わせて二十三万とちょっとだった。

複利計算だから、もう、莫迦みたいに金額が膨らんでいた。

わたしは、会社の資材倉庫へ行き、ビニルロープを取り出した。

「えーっ、まずいよぉ」

静香は叫んだ。咲子もスカートの裾をギュッと掴んだ。それの意図する所は、もはや、借金していた事実の隠蔽に他ならない。

荒田が借りて営業していた麹町のアパート。そして、その近くに、自分が不動産売買を担当していた地区があった。土地勘と言うやつだ。夜中であっても道に迷わず、それでいて、誰にも見られず、その場を立ち去ることも可能だった。

そして、財布から一万円札を二枚だけ取り出し、コピー用紙を紙幣と同じサイズに切り取った紙片二十枚を間に挟み、封緘のテープを巻いた。いかにも銀行で下ろして来ましたと言わんばかりだった。

電話で、荒田のアパートの近くにある菊川文具の裏の広っぱに来る様指示した。

「今日こそ必ず返しますから。臨時収入があったんです。もちろんです。耳を揃えて.....はい。はい」

そして電話を切った。

そして受話器を戻すと、ダミー紙幣を封筒に入れてジャケットの内ポケットに入れ、鞄の中にはビニルロープを丸めて入れた。

（3）

（３）

　咲子は既視感に襲われた。
　――この光景見たことがある？
　どこでだろう。思い出せなかった。そして、あっ！　と思った。以前、徹夜して読みふけった「殺人の告白文」の内容と、朝の四時に目が覚めたときの思いっきりリアルな夢の中の出来事だった。でも、どうして自分が見も知らない男の殺人現場など意識したのだろう？
　夢は記憶の混濁で出てくるものだ。まるっきり知らないことは出てこないはずだ。
「あっ」
「どうしたの？　咲子ちゃん」
　静香が不思議そうな顔で尋ねた。
「以前、夢の中で見たことがあるんです。男が女の人に馬乗りになり、ロープで首を絞めている光景を」
「ええ？　正夢だったわけ？　でも、どうして、未来予知？　いや、そうじゃないか。過去認知というのかな。それとも、雑誌か小説で読んだことがるとか？」
「朋香に.....あ、友達なんですけど、アンティークショップに誘われたんです。知り合いの引越祝いに何か探そうって」
「引越祝いにアンティークねえ。.....それで何を選んだの？」
「漆塗りの木箱に入った、絵皿だったんです。干支の絵皿なのに、十一枚しかないって不思議ねえって言っていたんですけど。あ、そうそう、それ、男の人が持ち込んで、オーナーが買い取り、それをすぐに買ったんです」
「その男の風体は？」
「五十代後半の頭髪が薄くなった日焼けした肌の男でした。服装はジャケットにスラックスとちゃんとした人に見えました。ああ、でも、そのとき、あの夢で見た人だと一度気づいたんです」
「この場所に関係がある人なのかも知れないわね。いいわ。探偵さんに頼んで調べてもらうわ。アンティークショップでは、買い取るときに身分証を提示しなければならないから、記録が残るはずよ」
　静香は記事に繋がりそうだと、嬉々とした表情でメモした。

　静香が立ち上がり、メモを拡大コピーし、そのまま探偵のファックス番号なのだろう。ポンポンとボタンを押して送信していた。

咲子は静香のいない間に、ページを繰った。
男は「偽の」札束が入った封筒を彼女に手渡した。彼女は疑うことなく、それを手にし、封筒の中身を改めた。封緘を破り、パラパラと扇状に札束を広げた。「あら？」と、彼女は失望した様な声を上げた。表面の二枚だけが本物で合間の二十枚は白紙だった。
「何のまねですか！」
彼女は怒りの声を上げた。しかし、それが彼女のこの世での最後の言葉となった。
男は用意していたビニルロープを彼女の首に回し、渾身の力を込めて締め上げた。うぐうとのどから呼吸音が漏れ、口から泡をふいた。彼女の全身はがくがくと痙攣し、下半身から力が抜け、地面に横たわった。男は彼女に馬乗りになり、尚も力を込めた。彼女がよみがえることがない様に。
呼吸が止まり、身体の抹消部分が冷たくなってきた。彼女は「確実に」死んでいた。今度は死体を永遠に見つからない様に隠さなければならない。
男は彼女の背後から両腕の下に腕を回し、上半身を持ち上げると、下半身を引きずりながら移動させた。
この敷地の隅には古井戸があったのだ。
江戸時代、旗本屋敷の時代からあった井戸だった。
「しかし、この井戸にはヒ素が含まれている。だから、藻もわかないし、苔も生えない。そして一度も使われることなく石の蓋で塞がれた」
男はそこまで知っていた。次の日から、高層マンションの建設工事が始まることも。
――え、あのマンションの敷地なの？
咲子は動揺した。あのマンションの地下に埋もれた井戸にＯＬの死体が埋められている。そんな突拍子もないことが実際に行われたのだ。
「咲子ちゃん。どうしたの？」
静香が戻って来た。
「静香さん。大変です。この人、とんでもないことを、しちゃってます！」
あの夢で見たことは、正に事実そのものだったのだ。あの古井戸は今でもあの場所にあるのだろうか。だとしたら、蓋を開けて中を確認する様に警察に言わなければならない。
「本当に大変だぁ。咲子ちゃん。続き読んでみて」
「へ？」
この自伝小説に綴られた告白はクライマックスを迎えていたものの、静香の反応は少しばかり、冷めたものだった。
男は石で出来た蓋を、力を込めて、移動させ、井戸を完全に封じてしまった。それくらいだったら、蓋をどけて、中を覗き込めばすむことだった。しかし、現実には事件の行われた昭和六十二年の八月から一切、事件が発覚したと言う情報がなかったのだ。――インターネットが普及する前の時代だったから？　そうではない、その頃だって、新聞各紙の検索機能は有料だったが開放されていた。地方紙の地方版の記事でも誰かが見つけていたはずである。

事件の翌日、男は確信に満ち、現場を訪れた。不動産管理会社のスタッフとしてで

ある。
「福岡さん。お疲れ様ーっす！　今から重機を動かしますね」
　土建業者の若者がショベルカーのエンジンを掛けた。ガーッと言う音で二人の会話はかき消された。福岡はブツブツと、井戸の底で永眠している荒田杏子の霊に語りかけた。
「ぶつぶつ、……すまなかった。悪気はなかったんだ。こんなことになるとは夢にも思わなかった。今は反省している」
「どうしたんです。福岡さん？」
　現場監督が話しかけた。
「いや、何でもないです。あ、作業の邪魔ですよね。すぐに帰ります」
　ショベルカーは井戸のあった場所を数メートルも掘り返し、盛り上がった箇所を平坦にし、穴の開いた部分には土砂や岩石を埋め、全体として平坦にならして行った。
　予定では、井戸のあった場所は、十五メートル掘り下げられ、マンションの基礎コンクリートが流し込まれることになっていた。予定を狂わせる要素は、例えば、掘り返したときに縄文時代の土器が出て来た様な場合だ。この場合、教育委員会の調査が行われる。もしかしたら、死体が見つかるかも知れなかった。
　しかし、工事は至って順調そのものだった。

　男は土器など出ないことを確信していた。
　この不動産投機の激しい時代、工期の遅れは絶対に許されるものではない。金利は莫迦みたいに高いのだ。福岡を苦しめた様にだ。土建会社やそれを管理する不動産デベロッパーも銀行から多額の融資を高利で受けて工事を行っていた。土器なんてどうでもいいものに、かかずらわっている余裕などどこにもないことは福岡自身よく知っていた。言い換えれば、――何が出土しようと工事は一日の遅れもなく遂行される。

「えぇー！」
　静香と咲子は声を合わせて悲鳴を上げた。「めちゃ悪人じゃん！　この男」
「時効にはかからないんですか？」
　咲子は尋ねた。
「時効が成立しているから、こんなものを出版したんでしょうよ。平成二十二年四月に法律が改正されて、殺人罪の時効はなくなっているけど、昭和六十二年の犯罪だと適用される公訴時効は十五年だから、平成十四年に時効はやっぱり成立しているわ」
　この事件が起こった昭和六十二年から平成二十二年まで間には平成十六年に時効がそれまでの十五年から二十五年に引き延ばされたが、このときは過去の事件にまでは遡らない規定となっていた。過去の犯罪に遡らないのは憲法三十六条に定められたものだからだと思われる。
　静香は、パソコンに向き合い、ブラウザを立ち上げた。ネット通販のアマゾネスだった。「わたしの犯罪――金貸しＯＬ殺人事件」という本は、新刊では出ていなかった。中古本が複数の出品者（古書店など）から三十部ばかり出ていた。多分、今読んでいる本も、編集長の森野がどこかの古書店の主から――面白いから読んでごらんよ。麹町のことも出

てくるよ。と言って一部買わされたのに違いない。

（４）

（４）

　麹町東警察署の二階会議室で水野宗佑は柳生ヒカルを前にして座っていた。彼女はホワイトボードにマジックで丸っこい字で被害者の写真と年齢、死因を書き、マグネットで貼り付けて行き、相関図を作った。
「ふうむ。これでも、班長は事故だと思っているのか？」
「確かに、交通事故や飛び降り自殺が続きすぎていますよね」
「事故なんかじゃねえ。背後に明確な意図が働いている。.....ちっ、証拠か」
　水野は座ったまま、前のデスクに足をどんと置いた。柳生は少したじろいだ。彼女の目の前では出来る限り、威圧的な行動や、態度の悪さを見せない様、班長の佐々木から言われていて、その通り行動していた。ただでさえ数少ない女性刑事だ。辞められでもしたら、管理職の責任を問われかねない。面倒な時代だと思った。水野はポケットをまさぐりタバコを探した。
「水野さん、ここ禁煙！」
「ああ、わかってる。くわえるだけだ」
　せめてタバコの葉の香りだけでも吸い込みたかった。
　これだけの「事故」が相次ぐと、もう誰かが裏で糸を引き、数々の殺人事件を犯し、それを事故に見せかけ、真実を隠蔽しているとしか考えられなかった。

「仮に.....仮にだ。これらの事故が殺人事件を隠蔽しているものと考えてみろ。理由は何だ？」
「動機ですか？　　この、猫を飼っている女子大生とか、隠れタバコをしている女子大生とかだったら、自治会の役員さんだったら、.....こいつ、マンションの規律を乱している。いなくなればいいのにって思ったりしませんかね」
「ふむ！」
　水野は身体を乗り出し、足を床の上に下ろした。
「あたし、そんなにいいこと言いました？」
「自治会役員の線は薄いと思う。しかし、猫にタバコか。他の非常ベルやイジメの中学生。確かに殺人事件に巻き込まれるほどのレベルじゃねえが、いなくなればいいのに、ってレベルでは一致しているんだよな。そこに一筋の光明があると思う」
「ホントですかぁ？」

「すると.....あの秘書の死は、どう説明する？」

「あれは.....政治家絡みですよね。多分ですが。自殺ではないと思います。あ、特捜も動いていらっしゃるんですよね？」
「彼女一人の死で何で特捜が動くんだ。俺も抜かっていた。殺人事件を偽装した疑いがあると思っていたんだが、それでも、単なる殺人だ。特捜が動く訳がねえ」
「あ、じゃあ、政治家の線ですか？」
「政治家の茂原繁氏が、我が身を守るために秘書に罪を被せて死んでもらったと、俺はにらんでいる。死人に口なしで、もう立証しようもねえけどな」
「茂原は何のために、動いていたんでしょう？」
「新しいマンションの建設計画みたいなものが.....あったのか？」
「それって、都の建設局の認可が必要ですよね。あ、それで、議会から圧力を？」
「認可の条件は、現時点では不明だが、フォルテッシモ麹町一番館で起こっているクレームや不具合を出さないこと。ということだとしたら、これらの細々した殺人と隠蔽は意味を帯びてくる」
「なるほど！」
「その方向性で過去の資料を整理し直してくれ。班長も納得行く様に。俺はもう一度フォルテッシモ二番館の建設条件を調べ直す」
「はぁ」
　柳生ヒカルは面白くなさそうな顔で返事した。また、資料室に籠もらなければならない。いい加減に、あそこからは卒業し、刑事畑で活躍したい。そんなことを思っているのだろうと水野は内心面白く眺めていた。水野だって下積み時代が長かったのだ。

８．男の犯行

8．男の犯行

（1）

（１）

　静香は編集長に掛け合っていた。
「あの本を全部うちで押えたいんです。いいですよね？」
「ああん？　　俺があの本を渡したのは、今の麹町のマンションで起こっている事故死やなんかの参考にするためだ。古本屋を儲けさせるためじゃないぜ」
「でも.....でも、あんなものが世の中に流布すればとんでもないことになっちゃいます」
「何にもならねえよ。現に平成十四年に発行されてから、何の反響もなかったじゃねえか。それとも、アマゾネスに出品されている古本全部を回収して何かメリットがあるのか？」
「それを言われると身も蓋もないんですが.....たかが三十部です。一冊三百円からです」
「からだあ？　　高いのは？」
「二千五百円です」
「ダメダメ。それより、あの本を読んだんだろう？　　内容を教えろ」
　森野に恫喝され、静香は最後まで読んだ「わたしの犯罪――金貸しＯＬ殺人事件」の内容をかいつまんで説明した。読み込むのは数時間かかったが、説明にはそんなに時間をかけられない。上司のへの報告は五分と言われている。それを超えると馬鹿と言われるのだ。

「福岡義隆は、事件後、荒川区西日暮里にある小さな印刷所を買い取り、細々と印刷業を営んでいた様です。香才堂という会社です。荒田杏子の杏から香に変えて一字をとり、香才堂と名付けたようです」
「どうして仏さんの名前を？」
「あの事件後、荒田の上司、.....丸菱物産の方の上司ですね。こちらの主任さんが、二、三日会社に出てこない彼女の元を訪れたそうなんです。これも、男の本に書かれています。部屋の中はきれいに整理整頓が行き届いていて、埃ひとつなかったそうなんです。遺書も、失踪をうかがわせる手紙もなし。でも、実際には金庫の中には一千万の現金とともに、もし、わたしがいなくなったらと言う、手紙があったらしいんです。もちろん、それらは男が持ち去りました」
「おいおい、香才堂って、その金で買った会社なのかよ？」
「みたいですね。.....荒田の足取りは、そこで途絶えたことになっています。上司は、自身の手に負えず、警察署に捜索願を出しました。でも、サラリーマン生活の悲哀と言うのでしょうか。日をたつごとに彼女の記憶が薄れていき、そのうち、その上司も転勤になりました。警察は実家にも問い合わせたみたいですが、家族は一人もいなかったそうです」

「家族がいない？」
「男の情報では、学生時代に父親を病気で亡くし、母親も、彼女が上京してしばらくして亡くなったそうです。姉妹が一人いたらしいのですが、当時から連絡不能でした。疎遠だったんでしょうね」
「ＯＬをしながら、裏で金貸し業をしていたと言うことは、上司は知らなかったんだろうなあ」
「ですね。さもなくば、警察に心当たりがある旨、申し出ているはずです。現金と共に失踪するなんて、事件性大ありですから」
「それで、時効を見越して、この本を書いたのか？」
「後書きでは、男は長年、良心の呵責に耐えかねていたが、時効の成立を機に、ことのあらまし一切を告白する気持ちになったとあります」

「おいおいおい。その井戸ってまさか.....」
「はい」
　静香はニッコリと微笑みを浮かべた。「あのマンションの基礎コンクリートの下にあります」
「一連の事故や自殺は、まだ浮かばれることのない、殺された荒田杏子の怨念によるものなのか？」
「井戸の正確な位置が、あの本だけではわからないんです。古地図と現行マンションの基礎図とつきあわせて調べる必要がありそうです」
「あの井戸の存在が少し気になる」
　森野は太く日焼けした腕を組み合わせた。
「何ですか？」
「井戸水にヒ素が含まれるとあった。恐らく昔から、井戸水を飲んで中毒になったり、病気になったり、あるいは、書いてある通り、藻がわかなかったり、苔が生えなかったりと、客観的な証拠があったんだろう。でも、それを知り得るのは古くからの住民しか考えられないぞ。ああ、井戸に蓋がしてあったのなら、住民ですら、噂レベルでしか知り得ない。これはどう説明がつくんだ？」
「福岡ってどこの出身なんでしょうね。もしかしたら、地元の土地勘って、不動産管理会社にいるせいもあるかも知れないけど、この近くに住んでいた可能性もあるかも知れません」
　後で探偵の棚田義男に頼むべき項目がどんどん積み上がって行った。量が多すぎると全部は頼めないかも知れない。

「まずは.....」
　森野は太い指先を編集部の片隅にあるホワイトボードに向けた。何か言いたそうだが、すぐには全部出て来ないらしく、あわあわ言っている。静香は微笑を浮かべ、彼と一緒にホワイトボードの前に立ち、さっきの指示と、これからの調査方針をキュッキュと音

を立たせながら、マジックで書き込んで行った。いくつか、項目を書くと、このマンションの建設に掛かる違和感の正体に気づくことになる。

　いくら景気がよいからと言って、平和な商業都市をいきなり、再開発して高層マンションを建てようとしても、出来ることには限りがある。当時の都議会建設委員会のドンが内示を出す様、都の建設局長に圧力をかけた。その裏では札束が飛び交ったことは容易に想像がついた。そして、昭和六十二年に着工され、平成元年に竣工し、入居が始まった。ドンを初めとする有力議員には別名義で高層階の何部屋かが譲渡され、転売され数億円の札束に変換された。これは、平成初期の週刊誌記事にも載っていた。話が本当であるか、ただの噂なのかは、もう、当時の先生方もお亡くなりになっているか、認知症が入っているかの年代なので、確かめ様がなかった。しかし、同じマスコミに属するものとして、週刊誌ネタはそれなりに、信用を置くこととなった。

　埋められた井戸だが、その後、問題にされたことは一度もなかった。
「森野さん。ヒ素って猛毒ですよね？」
　静香はマジックにキャップをはめながら、尋ねた。
「そうだなあ。……確かナポレオンも毒を盛られたって、まあ、ネタレベルの話だが、ヒ素中毒って聞いたことがある。青酸カリみたく即効性の毒じゃなくて、数年かかってじんわり効くタイプって言うんだか」
「じゃあ、やっぱり、長くその地に住んだ人じゃないとわかんないのでは？」
「よし、アポを取れ。取材しろ」
「この福岡なんとか言う人ですか？　今、いるとして、いくつくらいなんでしょう？」
「殺人事件当時は何歳だ？」
「二十五で結婚して五年目と書いてました。三十歳くらいでしょうか。……すると、今が平成三十年ですから、六十二歳！　すごい年数ですね」
「ここに書かれたことが全て真実だと言う保証はないが、仮に真実だとして、マンションの基礎コンクリートの下に荒田杏子の死体が眠っている。ヒ素の含まれた井戸と共に。場所によっては掘り返すことも考えられる。ここの住民には気の毒だが、大騒ぎになるだろうな」
「ええ」
　佐伯静香は自分の住んでいる武蔵境にあるワンルームマンションを思い浮かべた。全部の部屋が埋まっている訳ではないが、一階に十戸ずつで五階建てである。全部で五十人はいる計算だった。基礎コンクリートを掘り返すには、全戸に立ち退きを求めなくてはならないだろう。
　物わかりのいい居住者ももちろんいる。静香だって、事件と毒性物質の調査だと言われれば、はいそうですか、と、すぐに別の物件に移動するだろう。家賃と引越し費用を負担されるのであればだ。
　しかし、「うるさい人」と、周囲から目されている人物も何人かいた。その人が居住者

からなる自治会めいた組織の幹事になったときは、かなり、大変だった様に思う。住民に対しては、ゴミ出しルールの徹底や、隠れてペットを飼っていないか、タバコを吸っていないか、毎日が生徒指導の先生に監視されている中学生時代を思い起こさせた。
　もう、あの人たちに、役員は任せては駄目！　　そんな暗黙の了解が出たほどだ。

　あのマンションって、何世帯が入っているのだろう？　　静香は、目の前でタバコを吹かす、森野から目を背けながら、ぼんやりと、これからの取材方針を考えていた。

（２）

（２）

四月十五日の講義の合間の時間、咲子は図書館で古い地図を探していた。道路マップなどではなく、もっと細かい住宅地図だ。平成十五年に成立した個人情報保護法以降は、個人の住宅情報は載らなくなってしまっているが、それ以前は、個人の住宅では苗字だけが掲載されていた。

ふと、目を上に向けると、朋香が目を細めてにやりと笑った。

「何よ？」

「咲子ってさあ。国文科ではなくて、史学科かどこかに進んだ方がよかったかもね」

そう言って、嬉しそうな笑みを漏らした。そう言われればそうである。国文科に進んだのは朋香にくっついて来ただけのことで、さしたる目標がある訳でもなかったのだ。調べ物が好きなことに気づいたのは最近のことだ。

「あのマンションで亡くなった方ってさ。階と部屋番号がまちまちなんだけど、朋香はどう思う？」

「どうって？」

「部屋番号はまちまちなんだけど、マンションの部屋数って、階によって違うじゃない。間取りとか」

「そうね.....あ、そういうことか！」

勘のいい朋香は何か気づいた様だった。

マンションは下の階ほど断面積が大きく、柱も太く、一戸当たりの面積は小さくなっている。反対に上層階は部屋が広くなり、柱も細く、部屋数は少なくなっている。だから、同じ位置の上に建っていても、一階と五十階とでは部屋番号が異なるのだ。新聞記事のコピーを広げ、被害者の部屋番号をトレーシングペーパーの上に記していくと、それらの部屋が階数は違えど、南東角を少し北に行った位置で一致することに気がついたのだ。

「この下に何かあるのかしら？」

咲子は首をかしげた。

「あたし、前から思ってたの。でも、裕美果ちゃんの手前、言い出せなくてさ。あのお皿」

と、朋香は言った。だから、引越祝いにアンティークなんて、やめとけばよかったのだ。と、咲子は思った。

「番町皿屋敷？」

「そう、それそれ。一枚欠けていたじゃない？　何か怨念が込められていたんだよ。きっと」

「すると、ここに、その古井戸があったって訳なの？」
「そう考えると、意味が通ってくるじゃない。咲子が見た夢の男と言い、アンティークショップで手に入れた皿と言い、……お女中がお手討ちに合い、死体を井戸に投げ込んだのよ」
　彼女の妄想は暴走気味だと思った。それに、皿屋敷は隣の番町であり、麹町ではない。でも、……あの皿屋敷の話は本物のエピソードを面白おかしく脚色して広めたものであれば、実際には麹町だったのが、後に番町に置き換えられたとしても、おかしくはなかった。
　しかし、妄想はそこまでだった。
　もし、実際に、男が馬乗りになり、絞め殺した女性の死体をあの井戸に投げ込んで蓋をしたとしても、その後、マンションの建設工事で埋め立てられるか、掘り返されるかして、現在の頑丈なコンクリート基礎の下に埋もれてしまっているはずだった。
　――埋められている可能性があります。
　などと、言っても、百パーセントの確証がなければ、あのマンションを取り壊して、基礎をほじくり返すなんてことは不可能に違いない。
「咲子の読んだ本って、自費出版よね？　著者に会えないかな？」
　――また無責任なことを言い出す。と、咲子は思った。
　本は最初から最後まで確かに読んだ。だけれども、だからと言って、書いてあることが真実なのか、創作なのか、その辺ははっきりしない。最後のページである奥付を見て、著者の名が福岡義隆と言う人だと言うこと。出版社・印刷所が香才堂という会社であること。わかるのはそこまでだった。それに、出版は結構前で平成十四年になっていた。それからでも、すでに、十六年の歳月が経過していた。
　事件からは、もう三十年になる。
　でも、だからこそ、著者は時効になっていることを知っていて、全てを告白する気になったのだろうし、実際、「良心の呵責に耐えかね」というのも真実なのだろう。

　その日、講義が終わった後、二人は結局、西日暮里の印刷所兼出版社の香才堂の前に来ていた。朋香は咲子のジャケットの裾をギュッと握った。あっけらかんとした割りにこう言うとき、頼りにならない。
「あのー、すみません」
　と、咲子はドアを開けて中をのぞいた。
　誰もいなかった。勝手に奥に進んで行く。
　一階に印刷機があり、二階は事務室になっていた。事務室の奥の席に六十代の男性が腰掛けていた。あのとき、アンティークショップで出会った男に間違いなかった。

「何か？」
　男は二人を誰何した。頭髪は前が薄くなりかかり、顔の皺は日焼けした肌に深く刻まれていた。

「あの、御本を読んで.....」
「本？」
　男は不思議そうな目で咲子を見た。それはそうだろう。印刷所なのだ。本はたくさんあるに違いない。
「わたしの犯罪――金貸しＯＬ殺人事件」
「おお、あの本ですか。確かにわたしが書いたものです。しかし、十数年もの間、誰も訪ねてきませんでした。あなたが初めての読者です」
　いや、読者はもっといただろう。自費出版とは言え、五百部くらいは印刷したはずである。そのうちの何パーセントかは誰かの目に触れたに違いない。しかし、人一人殺して、古井戸に埋めるなど、荒唐無稽もいい所であり、小説なら、馬鹿馬鹿しくて読む気にもならなかっただろう。咲子だって、あのマンションでの一連の事故や自殺を知らなければ、こんな本に食指を動かされることもなかったはずだった。
　男は嬉しそうな表情になり、二人にソファを勧め、奥に入り、また戻ると手元にお茶の載ったお盆を持っていた。

「一人でも、反響があったとすれば、書いて出版した甲斐があったと言うものです」
　男は真向かいに座り、そう語り出した。
「お聞きしたいのは、あの井戸のことなんです」
「ふうむ。そうでしょうね。あれは事実です。わたしが荒田杏子さんを殺害し、井戸の中に投げ入れました」
　男は端的に答えた。
「あの井戸の位置はわかりますか？」
「今となっては、定かではありません。元あった菊川文具の敷地の裏庭にありました。南東角あたりです」
　あのとき、調べたマンションの敷地になった五つの会社のうちの一つだった。
「ヒ素が入っていたとか？」
「ああ、あれは、わたしの祖母から聞いたんです」
「麹町にお住まいだったのですか？」
「いや、元々は静岡県の出身です。学生時代に上京しました。祖母の祖母が武士の出で、麹町辺りに屋敷があったと聞いています。祖母はその祖母に懐いていて、よく昔の話を聞かされていたみたいです。わたしにも、昔語りしてくれました。確かそのときに.....あの井戸は水量が豊富だけど飲んじゃいけないよと祖母に言われたと語っていました」
「アンティークショップで売却した皿がありましたよね？　　十一枚の」
「あれも祖母の遺品です。嫁に出たときに祖母からもらったと」
「そんな大事なものを、なぜ？」
「お金が必要だったのです。会社経営はがん細胞みたいなものです。生きていく上で大量の血液を必要とする」
　でも、そんなことはどうでもよかった。男は昔も今も、常に金に困っていた。それだけだ。

「皿の出自はわからないですか？」
「先祖が武家で、お殿様から褒美にもらったと聞いたことがあります」
　そんな由来のあるものを、安い値段でアンティークショップに売却してしまったのだ。何百年もの歴史があるに違いない。そして、その歴史分の因縁があるのだ。下手に触れるとご先祖様の霊の逆鱗に触れることもあったに違いない。

　でも、あの本の内容は事実だと男は語った。
　ずっと良心の呵責に追われていた。そして、時効成立をもって自分の中の区切りとして、あの本を執筆し、出版した。幸か不幸か、文章が拙く、内容も荒唐無稽なため、今の今まで誰の注目も浴びることはなかった。
　男は当時の菊川文具の社屋の図面をうろ覚えで書いてくれた。他の会社の外形はわかるから、継ぎ足していけば自ずと現在位置は明らかになるだろう。

　朋香が横でそわそわしていた。出されたお茶にも全然手をつけている様子はなかった。帰りたそう。そんな感じである。
「あの、福岡さん。一つだけ教えて下さい」
　咲子は帰る前に聞きたいことがあった。
「なんでしょう」
　福岡は陰気な目で答えた。
「今までの警察の捜査には何と答えていたのですか？」
　それが疑問だった。人を一人殺めて、捜査員にもそれなりに勘の働く者がいたに違いない。何十年も、その手から逃れるのは困難だと思ったのだ。
「警察は動いていませんよ。……荒田杏子の上司が彼女のアパートに、休み明けに尋ねてきて、いないのを確認し、捜索願を出していますが、実際には、実家のある警察署に一度問い合わせただけで、何もしていません。……わたしも当時はびくびくしていましたが、それもそうかもしれません。死体も出て来ないのですから、殺人事件にもなりませんでした。ＯＬの単なる失踪だと思われた様です」
「それだけ？　……え？」
　咲子は言葉を失った。
　単なる失踪は年間七万件を上回る。実際に事件性が認められ、ちゃんと捜査されるのは、そのうちの数件にしか過ぎないのだ。失踪の大半は男女関係が絡んでいるので、プライバシーにまで警察は関与しないと言う大方針があったことを考えても、この事件の特異性が感じられた。
「だから、かも知れません」
「はぁ」
「自白本を自費出版しても、何の影響もありませんでした。マスコミの取材もなく、週刊誌に取り上げられることもなく、警察の事情聴取もなかった。……今日、あなた方が取材に来て下さった。そのことに少なからぬ満足感を覚えています」

　咲子もこの男を警察に告発するかどうか、迷っていた。現に死体のありかまで、男は明らかにしているのに、それを確認するすべもないのだ。死体なき殺人事件。そして、すでに時効は成立している。

「ああ、そうだ！　福岡さん。このレポート用紙に見覚えはないですか？」
　咲子は、殺人事件の告白をレポート用紙十枚にびっしり書き込まれたものをバッグから取り出してテーブルの上に置いた。福岡はチラリとそれを目にして、ぎくりとした表情を見せた。
「これを……あなたが？　どこにあったんです？」
「以前、大学で使う専門書をフリマアプリで購入したときに、本のページの間に挟まっていたんです。福岡さんがお書きになった告白本を拝見したとき、わたしもギョッとしました。これって草稿というか下書きなのですか？」
「ええ……。確かにその通りです。その専門書は同じ作者の新刊を出すときに装丁の参考にするために購入して、印刷後に古本屋に売ったんです。その後、下書きを紛失したことに気づきました。今日、あなたがお持ちしてくれるまで完全に行方不明だったんです」
　福岡はそう言って、そのレポート用紙の束を愛おしそうに手に取り、パラパラとページをめくった。――そうです。これです。これです。と、何度も小さな声でつぶやいた。

　朋香が咲子の横腹を肘の先でちょんちょんとつついた。
　こっちはこっちで早く帰りたそうだった。咲子はちらりと彼女の顔を見ると、勘違いしたのか、「うん」と返事した。確かに用件は全て片付いている。これ以上いても、福岡が何を話しても何ら得るものはないだろう。咲子も帰ろうかと朋香に目配せした。二人そろって「それでは」と、腰を上げ、お茶とお茶菓子のお礼だけ述べて、その場を立ち去った。

（3）

（３）

夕方、水野宗佑は早々と職場を出て、東都メトロの麹町駅近くの居酒屋で男と待ち合わせしていた。背広のポケットには捜査費用が入っている。今日の飲み食いは公費だった。

ウーロン茶を飲み、枝豆を食べていると、しばらくして、男が入って来た。水野は「おう」と言い、片手を上げた。

男は一礼して、水野の座っている座席の反対側に腰掛けた。

「水野さん、お久しぶりです」

と、親しげに挨拶した。とはいえ、実の所、水野は彼の素性をよくは知らない。いわゆる情報屋であり、前任の刑事から仕事を引き継いだときに、情報屋と情報網も一緒に引き継いだのだ。情報屋としては、持っている情報を正当に評価して買ってくれるなら、それが、善玉でも悪玉でもどっちでもよかった様だ。前任の刑事は「両方に情報を売る様な真似はしないから安心していい。その代り、やつを切るなよ」とクギを刺していた。

断片的情報によると、ある政治家の秘書室で働いていたが、大きな疑獄事件に巻き込まれ、政治家が逮捕されたときに、本人の身柄を前任の刑事が守ってやったと言うことがあったらしかった。

男は国会議員会館や都議会議員の下で働く秘書や、その助手たちの間に情報網を持っていて、情報を得る代りに、国会議員が汚職をして捜査の手が及ぶ前に、秘書たちに情報を伝えると言う、持ちつ持たれつの関係を維持していた。だから、情報の確度は格段に高く、情報料も高かった。

水野はビール瓶を持ち、男の前に置かれたコップに注いだ。

「あ、すみません。水野さんにこんなことをさせて」

「心にもないこと言うなよ。それで頼んでいた茂原議員の情報だが.....」

「ああ、あの先生はもう駄目かも知れません。もっぱらの噂になっていますよ」

彼の言う噂とは、秘書たちの間で交わされるものだろう。

「特捜が動いているらしいが？」

「そうなんですよ。もう、証拠も固まっているみたいです。あの高層マンションの二号館建設に当たり、建設許可を出す様、当局に圧力をかけ、その見返りに賄賂をもらっています」

「賄賂？　物証は」

「今度出来る二号館の最上階の５００２号室と５００３号室を茂原議員に譲渡し、それを、プラネット住建の関連会社のプラネット不動産に転売し、それぞれ、二億五千万、一億八千万を受け取っています。領収書のコピーはこれです」

男は鞄の中から茶封筒を取り出し、水野の前に出した。「さらに、茂原さんだけではなく、建設委員会の榊議員、友永議員にも一部屋ずつ譲渡されています。こちらは住む予定らしく、転売はなされていません。譲渡書類のコピーがこっちです」

そして、もう一通の封筒を出した。

「それから、あのマンションの一号館で事故や自殺が相次いでいる。何か知らないか？」

「ああ.....」

男は口を濁した。「高層マンションを新たに建設するには、周辺住民の環境アセスメントが必要です。いわゆる、今住んでいる住民の方々の同意を取り付ける必要があるんです。そこには、一号館の住民も含まれます。現在、周辺住民との間で問題となっている細々したクレームを、ひとつひとつ潰して回っているみたいなんです」

「それは、プラネット住建が絡んでいるのか？」

「多分ですが、プラネット住建の子会社である、麹町不動産管理と言う管理会社から派遣されている管理人が、事故に見せかけたり、自殺の幇助をしたりしている節があります。ただ、わたしから見た場合、そのまま放置していても、実際に自殺していたのではないかと思うんです。自ら手を下すのはあまりにリスキーです」

「なるほどなあ」

これで、特捜だけでなく、麹町東署の刑事課でも動けると確信した。事故や自殺の件は、管理人を別件逮捕して締め付ければ、そのうち、ボロが出るだろう。水野は男に捜査協力費の名目で入れたカネを渡した。

９．絵皿の由来

９．絵皿の由来

（1）

（1）

四月十五日の夕方。

咲子はニュースを見ていた。

「麹町のマンションの建築許可申請にかかる収賄事件として、東京地検特捜部は東京都議会議員茂原繁容疑者、榊明容疑者、友永有里容疑者を逮捕した」と報じた。

「ありゃ？」

兄が素っ頓狂な声を上げ、咲子は振り返った。

「どうしたの？　お兄ちゃん？　それに、麹町のマンションって？」

「ああ、うちでネタを追いかけていたんだ。でも、すぐに速報が出せそうだな。会社にいる先輩に電話を入れてみる」

そう言って、電話に向かった。

自分の知らない所で事件は動いている。そんな感じがした。それに収賄って何？　殺人事件ではなかったの？　事故や自殺で片付けられてしまった小さな生命がないがしろにされつつある。霊的には、井戸の呪いだとしても、実際に手を下したのは誰かは知らないが人間のすることに違いない。

四月十六日、咲子は大学に向かう前に、遠回りをした。

亡くなった裕美果のお母さんに会うためだ。

「遠い所をよく来て下さったわ。でも、学校はいいの？」

「うちの大学は出欠にあんまり厳しくないんです。裕美果さんから聞いたんですけど、工学部だと、単位がものすごく厳しいらしいですね」

「娘もそう言っていたわ。でも、永遠に卒業出来なくなっちゃった」

そう言って、寂しそうに笑った。

「あの！　あのときに持って来た、絵皿を貸して欲しいんです」

「絵皿？　何にするの？」

お母さんは不思議そうに尋ねた。

「大学の史学科と言う所に持って行って、由来やなんかを鑑定してもらおうと思うんです」

「あら、あなたもあの絵皿のせいで裕美果が亡くなったと思っているの？」

「そういう訳ではないんですが、でも、……」

このお母さんに、福岡義隆にまつわる因縁話をする訳にもいかなった。咲子は言葉を探した。

「いいわ。気の済むまで調べて頂戴。何かわかったら教えてね」
　お母さんは、咲子を一人にして、納戸に皿を探しに行った。しばらくして、箱を抱えて戻って来た。
「はい、これ」
「ありがとうございます。お借りします」
「いいの。でもね。アンティークだからって、霊とか怨念とかわたしは信じてないの。確かに霊に鋭敏な人はいるみたい。でも、全部が全部、念が込められているとは思っていないわ。そんなの迷信よ」
「そうですね」
　確かにそんなこと信じていたら、アンティークなど集める趣味は持たなかっただろう。咲子は個人的に、朋香のアイディアだったとは言え、あの絵皿をこの家に持ち込んだ責任を感じていた。古くからまつわる話もあっただろうし、福岡義隆による殺人事件も絡んでいる。犯人が永遠い処罰されないことで、殺された荒田杏子の怨念もあり得ると咲子は思っていた。

　電車で運ぶと結構重たかった。本橋の家に持って行ったときには、朋香と交替で運んだのだが、今日は一人だった。朝の乗客の多い時間帯なので、座れなかったし、ずっと、両手で絵皿の入った紙袋を提げていた。
　歩くと、紙袋の中でカチャカチャと音がした。ヒビが入るかなと心配しながら運んだ。
　史学科の玄関を抜けたときには、もう、すっかり、指先の色が変わっていた。ずっしり食い込んだ紙袋の提げ紐がピンと張っていた。心配になり、一度下ろして中身を確認すると、漆塗りの木箱のお陰で無事だった。

「あれ、中原さん？」
「あ、どうも」
　振り返ると、吉田有紀だった。パーカーにジーンズという放送部の格好をしていた。古いホコリをかぶった書物を扱うのでオシャレな格好は出来ないと言うことらしかった。
「史学科に何か用？」
　アナウンスを始めてから、吉田との会話は部室で行うことが多かった。こっちの研究室に訪れたのは二度目だった。
「実は鑑定してもらいたい絵皿と書き付けがありまして」
「ふうん、そうなんだ。あたしたちだけじゃわからなくても、竹山教授が詳しいから大丈夫だと思うよ」
「よかったー」
　重たい想いをしてまで持ち込んだ絵皿である。うちではわからないと言われたら、それまでのことだが、疲労感は百倍にもなるだろう。ここからは、吉田が紙袋を持ってくれた。
　階段を上がり、竹山教授の研究室に入った。

　教授は絵皿と書き付けを交互に見比べた。
「絵皿は十四世紀の明代のものだね。安土時代から江戸時代初期にかけて日本に入ってきたものと思われるね」
「やっぱり、由緒ある骨董品なのですか？」
「組皿なのに、一枚欠けているのが気になるね。しかも、漆塗りの箱の区画は十一枚分しかない。元々十一枚だったと思われる」
　次に教授は書き付けを手に取った。
「軍功に対して、武将に与えたと書いてある。花押（サイン）は徳川家康のものだ」
「えぇーっ！　　そんな大層なものなのですか？」
「こういうのはよくあるんだよ。普通は功績を挙げた武将に対しては所領を与えるものなんだが、家康公については、自分の部下に対してはけちん坊で、美術品や刀などを与えているんだ」
「ということは、この武将は腹心の部下と言うことですか？」
「書き付けと家紋とから、松平五郎左衛門と推定される。松平と言っても、徳川家ご親戚とそうでないのとがあり、これは、そうでない家柄だ」
「あ、先生。屋敷が麹町らしいんです」
　横から吉田が口を挟んだ。
「なら、間違いないね。松平公の日記があったと思う」
　竹山教授は、古びた書物が積み上げられた一角に行き、無造作に紐で綴じられた和紙の本を引っ張り出した。ぷわぁっと辺りにホコリが立ちこめた。咲子は、ここで研究生活をしていると、健康に悪そうだなと思った。

　竹山教授の説明によるとこうだった。
　松平五郎左衛門重治は、家康麾下《きか》の武将として側近くにつかえ、関ヶ原の合戦のとき、一向に合戦場に姿を現わさない徳川軍本隊の代りに、命懸けの戦いをして抜け、戦の後、褒美を与えられた。実際には徳川軍主力部隊は、戦から一日遅れで現場に到着したと伝えられている。
　そのときの褒美の品が、明国から伝わり家康所蔵になっていた干支の絵皿十二枚だった。
　重治は、家康の生まれが寅年であることから、寅の皿だけ返上し、残り十一枚を家宝にすると言い、さらに、褒美を与えられた。二千石の所領と麹町の屋敷だった。
　とはいえ、当時の江戸はまだ造成中の町であり、屋敷の周りは葦《あし》が茂る湿地帯だった。
　そして、江戸の町が繁栄するにつれ、麹町の物件は価値が出てくる。

　十一枚の皿が面白おかしく語られたのは、後代の寛政年間のこと。
　お皿を一枚割り、お手討ちになった腰元が井戸に投げ込まれ、幽霊が現われると噂になる。当主、松平明親公の日記ではそれは事実ではなく、皿は元々十一枚であり、殺さ

れた腰元もいないということだった。
　ただ、当時、井戸に藻がわかず、苔も生えないことから、毒性を心配した当主により、封印される。具体的には石で出来た蓋をしたということだった。

　そして江戸時代が終わりを迎える。
　大政奉還により、将軍の座を返上した徳川家は薩摩･長州政府により、駿河国七十万石に移封される。数万の旗本たちも多くが、徳川家に従い、駿河に移った。麹町の屋敷はお召し上げになり、多分、外から入ってきた商人などの屋敷や会社になったと考えられる。

「あ、福岡さんも静岡の出身だと言っていました！」
　咲子は叫んだ。「この井戸のヒ素の話も知っていました」
「多分、一緒に移封した松平家の子孫だったのかも知れないね」
「では、皿の呪いというのは.....」
「これだけでは、そんな曰わくはなさそうだねえ。でも、その福岡義隆っていうの？
死体が見つからず、殺人事件にもならなかった『事件』の犯人。彼の方がよっぽど呪われていそうだね」
　竹山教授はそう言って、古書を閉じた。パタンと言う音がしてふぁさっとホコリが舞い、日の光を浴びてきらきらと輝いた。

　皿に呪いがないとすれば、後はあの「井戸」しか考えられなかった。
　結婚資金にと一生懸命貯めた金を残し、絞殺されたＯＬの呪いだ。しかも、大切なお金は犯人に奪われ、使われてしまっていた。

「あの？　　松平家屋敷跡に出来た菊川文具という会社の見取り図なんです」
　咲子は福岡に書いてもらった、マンションの出来る前の井戸の図面を出した。
　教授の指示で吉田がパソコン上に現代の地図と古地図を重ね合わせた。
「多分、松平家の井戸で間違いないと思う。今のマンションの外形図から言うと、南東角の少し北よりの部分だね」
「あ！　　やっぱり」
　事故や自殺のあった部屋は皆この場所に固まっていた。
　咲子は井戸の呪いは、金貸しＯＬこと荒田杏子の呪いであることを確信した。

　経済ジャーナルでマンションの記事が書かれ、埋められた井戸についても、一部伝えられた。しかし、確たる証拠もなしに数百億円もかかる「基礎コンクリート下の調査」など出来るはずもなかった。

それから数日後。

咲子は.....福岡義隆の本と証言、そしてマンションの見取り図と昔の地図、江戸時代の区割り図を細かにまとめて「古井戸」の位置を明らかにし、荒田杏子なる女性の遺体の埋められた場所を特定した資料を作成して、兄の助けを借り告発状を作成して警察署に提出した。

窓口となった地域課の巡査は、うなずきながら咲子の説明を聞き取った後に「自分だけでは処理出来ないから」と言い、奥の席の上司に報告を入れた。そして、課長らしき人が出て来た。

「よく調べてありますね。でも、平成十四年で時効が成立していますねえ」

彼は眼鏡の縁を指先で押さえながら、そう言った。

「もう、取り上げてもらえないのでしょうか？」

咲子が失望感ありありの眼差しで彼を見つめると、こう言った。

「事件としては、もう扱えないのです。警察署としては。でも、その.....福岡氏ですか？

本人に事情は聞きますし、申し送り事項として記録にはとどめておきます。また、将来、そのマンションの建て替え工事のときに、その井戸ですか？　底をさらって調査するよう指示します。それでいいですか？」

咲子はそれでもいいかなと思った。

鉄骨高層住宅。五十年から七十年くらいは使い続けられる。建て替えなんかは、それこそ何百軒と入居している住民にとっても、一生に一度の大事業なのだ。もしかしたら最後まで見届けられないかも知れない。しかし、このたび、警察署に届けを出すことで昭和六十二年からこの地に埋められた遺体に光が当たったのだ。それだけでも許されるかなと、帰り道、ふとつぶやいた。

※

それから五十年あまり経ち、耐震基準の強化もあり、マンションは性能上の耐用年数を迎えた。本体は取り壊され、新しい建物が建つことになった。基礎コンクリートは掘り返され、きれいな更地となった。そのときに、過去の記録に基づき、地下の超音波検査がなされ、古井戸と底に横たわる人骨が見つかった。

警察の鑑識が検査した結果、二十代から三十代と思われる女性の人骨と判定された。昔、出された告発状の情報に基づいて、人骨の正体がここで商売をしていた荒田杏子なる人物のものだと同定された。

その後、骨は静岡県浜松市にある荒田の菩提寺に丁重に葬られ供養された。

そして、麹町のマンションでの幽霊は姿を消した。了

呪われた井戸・金貸しＯＬ殺人事件

著　　黒川 文

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社